

川柳塔

平成三年六月二十五日印刷
平成三年七月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通巻七七〇号



日川協加盟

No. 770

七月号

日本川柳秀句集 日本川柳推薦句集

「日本川柳秀句集」は第4集、「日本川柳推薦句集」は第2集と発行を重ね、掲載された川柳は現代川柳の代表句として、川柳界はもとより広く文芸各界で好評を得ております。今回、秀句集第5集、推薦句集第3集を刊行いたしますので、左記要項によりふるってご参加をお願いします。

記

発刊予定 平成3年11月

掲載内容 日本川柳推薦句集 約3000句

日本川柳秀句集 100句

応募作品 昭和63年10月以降の自作品5句以内

(既発表・未発表を問わない)

参加料 3000円(秀句集・推薦句集を贈呈)

締切 平成3年7月末日

選者 西尾 栗・亀山恭太・渡邊蓮夫

申込先 大阪市中央区谷町7丁目1-39

新谷町第2ビル206号

日本川柳協会

第15回

茗人忌川柳大会

とき 8月25日(日)午前10時開場 11時半締切
ところ ホテル・ニューいなば

(鳥取市永楽温泉町403)

兼題 ◎おはなし 川柳塔社主幹 西尾 某氏
(各題2句) 席題なし

「幕」 田中正坊選

「嘯む」 春城 武庫坊選

「遠慮」 久家 代仕男選

「竿」 小林 妻子選

「髪」 小西 雄々選

「掘る」 但見 石花菜選

「いねむり」 小林 由多香選

会費 3500円(作品集・懇親会を含む)
投句 投句料1000円を同封、8月15日までに
着くよう、うみなり川柳会へ。

うみなり川柳会

〒680 鳥取市相生町3丁目204(森田熊生方)

電話 0857-2314672

申す申す

西尾 栗

電話の伸展・普及は洵に目を見張るものがある。テレホンカードの觀光地の風景、又個人でつくる俳句、川柳などをいれたPR用のカードブームは嵩が低うて値段も手頃というので、冠婚葬祭にも名刺替りにも適当として、テレホンカードははんらんしている。

それでも十円硬貨の方が好きだという人がいる。電話はその十円硬貨でかけられるのだが、では何時頃から十円かというとき、葉書が五円の時から十円だった。その葉書が今や四十一円であるから、いかに電話の値段が上っていないかがよく

わかる。

さて電話のモシモシという最初の言葉だが、外国ではハローハローであること、あとで知ったが、中学一年生の時はIf If というのだろうかと思っていたのは大笑いである。「モシモシ西尾君ですか」、このモシモシはモシかして西尾君ですかと訊いているのかと思っていたら、「申す申す」が語源だった。申すという古語が生きているとは之は亦……東北地方からの電話で、「モスモス」とあればその方が正しいことになる。「申す、申す、こちら栗と申す」ということになる。なんのことはない狂言の世界である。

電話の創始者グラハム・ベルは世界初の電話で何と言ったのかというと、「ハロ、ハロ、ワトスン、私の部屋へ来い」、つまり隣の部屋にいるワトスン氏に電話したのが、一八七六年三月十日であった。テレ

ホンという言葉はギリシヤ語で「遠い音」が語源である。翌年の明治十二年に東京熱海で市外電話がつかがり、世の人は驚愕の目で、いや耳で仰天した。そして電話線に処女の血が塗ってあるのだと誠にやかに言い合つて、娘さんを表へ出さなかつたという話もある。その最初の熱海の電話ボックスが熱海富士屋ホテルの前に復元されている。

今やコードレスとなり、車の中にも置けるし、歩きながらでもという時代となつた。それにポケットベルというのが出来て、主人の浮気防止、セールの怠惰防止になっている。

バスタオル巻いてハイハイという電話 栗
ポケットベル会議中退堂々々 〃
返事しただけの電話のしらけよう 〃

座右の句

古くとも僕には仁義礼智信

(路郎)

私の句

晩学や歩幅小さく趣味に生き

岡本清水

川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 申す申す

西尾 栞 ……(1)

四年目の夏

小出 智子 ……(2)

川柳塔 (同人吟)

西尾 栞選 ……(4)

自選集

東野 大八 ……(37)

川柳の群像 白岩文衛

東野 大八 ……(42)

■古川柳 柳籠裏三篇研究 (八丁)

黒川 紫香選 ……(44)

同人特集 「夫婦百句」

黒川 紫香選 ……(46)

水煙抄

小島 蘭幸 ……(50)

秀句鑑賞

同人吟

小島 蘭幸 ……(41)

水煙抄

奥山 美智子 ……(70)

大空のころろ (7)

橘高 薫風 ……(49)

■川柳こぼれ話 キーワード

田中 正坊 ……(81)

銀河系

河内 天笑選 ……(82)

四年目の夏

小出 智子



今年も、夏がやって来た。七月が来ると私は四年前のことを思い出す。腸を悪くしてその年の六月半は頃からいよいよ悪化し、それまで診てもら

っていた病院を変えて診察を受けると、その場で手術を言い渡された。院長の険しい顔を見ているだけで、どんなに病状が進んでいるかが判断出来た。その日、医者は長男を呼んでどんな話をされたのか、今も息子には聞かないでいるが、聞かずとも大方のことは理解が出来た。多分回復の見込みはないであろうと諦めとも覚悟ともつかない複雑な、だが非常に切羽詰まった気持ちを家族にさえずり耐えていた。

その頃主人は、前年に心筋梗塞をやって療養中であつたから、シヨックを与えないために、私の病状についてはありのままを話さぬよう口止めをしておいた。

その年の一月号から担当していた川柳塔誌の「茴香の花」欄のことが気に掛り、万一の

茴香の花

■ ひみこさろん「猫・犬」

「七夕」

一路集「斜め」

「泣く」

初歩教室「耐える」

理瑛・元江句碑建立と句集刊行

六月本社句会

京都塔の会吟行

私の句碑

■ 各地句会だより うみなり川柳会

各地柳壇（佳句地十選／三宅保州）

柳界展望

七月各地句会案内

■ 編集後記

小出智子選 (86)

桜井千秀・岩本笑子 (88)

西山 幸選 (90)

鷲見 章選 (90)

高杉千歩選 (91)

辻 白溪子 (92)

小林由多香 (89)

本庄福子 (98)

二宗吟平 (98)

森田熊生 (109)

正坊・みつ子・しげお (123)

編集後記 (124)

座右の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

私の句

花吹雪 常楽我浄と舞いおおせ

(路郎)

福井桂香

事も考えて八木千代さんだけには入院する旨を知らせたが、「もしもの時はよろしくお願ひします」とは言葉に出せなかった。

丁度その頃、平林たい子の「ひとりぐらし」というエッセーを読んだ。その中に「孤独な人間は手際よく世を去るのが自分のためにも他人のためにもよいのではないか、という考え方もある。が、私はちがう。死は、病気という生の最後の儀式を充分に行い了えてから、迎えるべきものだと思ふ。その儀式は、私の身辺が無人であるために、より波瀾的に行われることだろうと思ふ」と書かれていた。平素、忘れっぽいのに妙にその文章が記憶に残っていて、その儀式とやらが私にも、始まりつつあるのだと、むしろ厳かな気持ちで手術の日を待ったものである。

最近、テレビのニュースや新聞に、癌の告知ということが問題にされ、アンケートを纏めてとやかに言われているが、告知については人それぞれ立場、性格、環境などみな違い、誰にでも知らされてよいものとは思えない。人間は弱いものであるから、病気になると思ひようにはかり考え勝ちになる。だが、最悪の状態になっても生きることへの執着は案外に強い。

辛い私は、健康を取り戻すことが出来た。大勢の方のお力添えのあったことを改めて思ひ起こし、感謝の念にひたっている。

川柳塔

西尾 葉選

鳥取県 松下 たつみ

妻と言う立場がじやまな赤い靴

山の幸 女に別な顔があり

温室の中の評論家が吠える

ジグザグに歩いて故郷 話好き

下請の垢がしみこんでいる猫背

やわらかい言葉で古い釘ささる

八尾市 高杉 千歩

面白い人と聞いたが泣き上戸

真実は一つ耄碌まだ早い

うけ売りの冗句でつなぐ命の灯

遠い日の言葉に酔うて夏の章

ゆきずりの余花に慕情がつのる筆

有情無情六十路の坂を往來する

大阪市 西出 楓 楽

家庭医学読んで病気を重くする

早風呂の貧乏性が抜け切らぬ

手前味噌美味しく食べる事もある

お薄たて無心に一步近ずきぬ

家風などなくて仲よい嫁姑

さよならを上手に言えたことがない

下関市 石川 侃流洞

コーヒーで充電メーター上がらない

本心は見せず一升空けて去に

耕耘機快調結納済んでいる

愛はほのぼの大草原の小さい家

淋しさはビデオが撮った背の丸み

女狐に抜かれた骨が戻らない

奈良市 宮口 笛生

阿呆やなど言われて人の世話をやき

みどりの日オゾン満ち足る庭がある

十中八九 男エッチに出来ている

兄ちゃんと呼んで今でも好きな人

二日共晴れて良かった妻の旅

憲兵という軍歴をさみしがり

竹原市 小島 蘭 幸

哀しみよ涙は濁くものですね

負けることだよ少し大きくなるために

僕に似た男はいないので眠る

少し大人に修学旅行から帰る

風邪をひくのは髪が少なくなつたから

たんぼの自信はどこでも生きる

米子市 林 荒 介

盃に溶けるむかしむかしの斬

結び目のひとつひとつの仏さま

あなたには見えない風にゆれている

月光を浴びて舞台も出来上がる

琴線に触れる笑顔を妻と呼ぶ

下駄箱も帽子掛けも父を知らぬ

今治市 矢 野 佳 雲

退屈をする幸せに気がつかぬ

雑魚の子が雑魚では終るまいとする

知らぬ顔出来る男が恨めしい

初恋と知らずブランコ揺ってあげ

母さんの勝負浴衣の糊が利き

いい線をいってららしい娘のデート

藤井寺市 吉 岡 美 房

若葉道辿り路郎の碑に出会ふ

風薫る五月の恋にとび込もう

鯉のぼりうちの緋鯉は肥満体

花菖蒲お前が迷うことはない

ミサイルが浮気な蝶をねらつてる

春以来律儀な鬼が同居する

熊本市 永 田 俊 子

切札を持つてる男であわてない

情深い耳が重荷を背負い込む

ときどきは造反したいヤジロベエ

うら表ない金太郎飴の笑顔

修身が骨まで浸みて世に疎い

恍惚が放さぬ袋に子の写真

和歌山市 西 山 幸

紫陽花のころ変わりを愉しもう

もう足に合わなくなつた赤い靴

くろこだから黒よりほかは許されぬ

ビールの泡と多情多恨を語り合う

まだ飲める酔えるいのちを抱いている

逢わぬ逢わぬと自分を苛めすぎないか

和歌山市 内 田 結 実

気がついてほしくて炎える蛇いちご

はり紙はいまバルサンをたいてます

犬の面つけるとシツポ振れるかな

そつとしておこう傷口癒えるまで

肌身離さず抱いていた歳月だった

シャンパンの蓋は一気に君へとぶ

松原市 玉置重人

なつめろが好きコーヒーが甘すぎる
社員食堂でぬるいうどんを食べます
輪の中に入りたくなる負けいくさ
引き算はせぬことにする古希の坂
杖いらん間にプラン組みなおす

廿日市市 林野甦光

藤棚の下で聖俗温め合い
相性がいいよと下駄を預けとく
税務署をしてやったりと髭を剃り
手鏡の奥で激しい渦を見る
とっておきのスペシャルママが離婚する

岡山県 嘉数兆代賀

響き合う心に今日の灯を点し
五百羅漢訪ねる心晴れぬ日に
世渡りが下手で明日の絵が描けぬ
重い過去曠野へ捨ててわたしを捨てる
触れ合えば温さが沁みる句読点

京都市 都倉求芽

囀りを心にくれた野の小鳥
咲き誇る 誇ると言わんでいてほしい
鳥肌をたてて泳いだ鯉のぼり
風邪をひくことにも慣れて六十路の譜
何するにしてももの忘れがつきまとう

倉吉市 奥谷弘朗

苦手だと思っ心が負けている
さりげなく構えて四季の彩を着る
逃げ場所があるからでつかい口をきく
ちっぽけな義理が頭をかけめぐる
辻褄を合わすことだけうまくなる

倉敷市 小野克枝

誰に似てこんな優しい絵が画ける
背を向けた子へも届ける鈴の音
ため息で終る八桁のウインドー
実印をはらはらせて子は走る
若い気の母の化粧が気にいらぬ

米子市 林瑞枝

鍵のない土蔵にむかし語らせる
Uターンのグラスの底にあるネオン
万歩計オゾンの森をひと巡り
白魚の指にペパーミントが似合う
らせん階段ジャンプするなら此の当り

堺市 板尾岳人

寶石の如き輝き母の指 (函館)
残雪の八甲田山は母の中 (八甲田山)
母のこと阿修羅の流れ美しき (奥入瀬)
山波は母の乳房のかたちして (八幡平)
湖の深さを問いし昼の月 (十和田湖)

堺市 高橋 千万子

信楽焼きのタヌキの番で鯉泳ぐ
人にはれ人に捨てられ女生き
水を得た魚といかぬ新ポスト
せんざいの槇一本で猫の勝ち
預かっておくとは効いた袖の下

島根県 堀江 正朗

日向ぼこ忘れ上手になれそうな
正座して邪念捨てねば明日が来ぬ
聞き流すことも上手に八十歳
妻寝たか僕も眠れぬ夜が続く
馬耳東風 昔の人は偉かった

島根県 堀江 芳子

退院のブラン山積み寝たつきり
爽やかな緑だそうな天井よ
がんじがらめにしといて主治医力づけ
お見舞の人それぞれの温かさ
病室の時計よっぽどのろまだな

美禰市 安平次 弘道

星座西に作家のペンが冴えてくる
飽食の科に気づかぬ血糖値
一寸先は闇とうそぶく刹那主義
良心をだまして闇が抜けられぬ
脳死論 神も気になる守備範囲

鳥取県 土橋 螢

銀の匙 昏までのエチケツト
女が隠してある夏の幕を引く
もうひとり女を躲す赤信号
母がMで娘がLのペアルック
花束の花が泣いたり笑ったり

鳥取県 新家 完司

地下街の隅に仙人らしい人
好きだった乙女もただのおばさんに
隣のピアノ音楽らしくなってきた
恥ずかしくて猿の檻から目をそらす
さわやかな記事が小さく載っている

奈良市 天正 千梢

無宗教 舵なき舟に乗り合わせ
視界みな我がものと見る吉野山
無駄使い旅の楽しさなど分かり
のみ仲間ゴルバチョフを料理して
旅の醍醐味なんてキザな事思ひ

松原市 小池 しげお

おてもやん楽しい酒にしてくれる
家建てる金剛山を借景に
入院の妻からチヨイチヨイ電話くる
聞いてないのにくどくど長い負け惜しみ
ライバルと出合い電車の前に乗る

富山市 舟渡杏花

乳房の谷へ傾きかけているクルス
人並みにわたしも使うごま摺り機

猫舌が女のなさけへ縋りつく

春愁や弾む約束一つ消え

路傍の石 泥水をはね返す

尼崎市 春城 武庫坊

正論を時どき誤解する余生

目の高さ下げて浮世を見直そう

一度だけ腹から笑いたい仁王

サンバ躍動 胸の起伏が天を向く

横道にそれてわかつた世の情け

尼崎市 春城 年代

うしろ正面だあれ君の名当ててからの恋

ライバルのあとに続けぬ棒グラフ

娘の家の電化と競うことはない

手垢つけた辞書は身内のあたたかさ

香水を選ぶ情熱はまだ残る

名古屋市 越村 枯梢

本心を明かせばバカと笑われる

三猿に徹して安けき老いの日日

左回り好きなわたしの脳時計

そう言えば母にもあつた泣き黒子

臘涙流して人恋う新魂よ

豊中市 田中正坊

お茶めし風呂 妻という名の全自動

さまざまな別れ見てきた風の駅

大空のころ 心に不死鳥忌

源氏三代 歴史がそよぐ大銀杏(古都鎌倉)

大仏は泰然と坐す晶子の忌

東大阪市 森下愛論

散るために咲いたと思う花吹雪

通りやんせ路地の子供は塾通い

老いの腰シャンと伸ばしてするデート

めりはりをつけて二次会行くとする

貯まりましたと余裕の受け答え

笠岡市 松本忠三

出る釘は打たれるだから言ったでしょ

衣食住どれもまあまあだからけです

集會に田舎時間の鯖を読み

知らぬ間に桜が散っている余生

愛情を野良猫素直に受けとめる

今治市 越智一水

精一杯今日生き明日の扉うつ

孫のもの先に買うのも旅のこと

無の書から音の流れが聞こえくる

決着をベッドの中でつけた恋

女の眼尻皺に秘めてる色ざんげ

大阪市 河井庸佑

横車押して孤独をかみしめる
反省の色が見えぬとまた小言
冷静さ欠いた自分が道化めき
あせらずに気分転換する余裕
心得ているが退けない訳がある

和歌山市 堀端三男

根回しの下手な男の一本気
八十八夜に雪降るニュース見ています
温泉めぐりしている夫婦と乗り合わせ
艶布巾片手に古物屋謂れ説く
漬物は重し加減と祖母達者

和歌山市 若宮武雄

白黒をすばつと言うて疎まれる
居直つて悟つた顔をしてみても
山の貌近づきすぎて見失い
目立たない都忘れとあの女と
青い山のおおい木霊をもう一度

和歌山市 牛尾緑良

嫌煙権からはじまった人嫌い
信号の青をどこまで信じよう
休日の妻 助手席でひと眠り
反戦歌 君は知らないから強い
血の濃さをゆるゆると知る住民票

和歌山市 福本英子

建前の和からこぼれた花の種
石女に花籠届く母の日よ
シャガの花踏まねば沢に降りられず
無防備でいるから怖いものはない
長電話やかんの笛が呼んでいる

和歌山市 内芝登志代

先生が皆賢明と信じてた
漁師町荒い言葉がマツチする
傘寿なお堂々覗くコンバクト
客のいる間は可愛い妻でいる
休肝日守つて妻にいたわられ

和歌山市 松原寿子

一途に慕う直訴が胸に届かない
まなうらに激しく揺れる影法師
流れ矢の的なら遠慮しておこう
本心をころして檸檬しぼり切る
面影も慕う想いも編み込んで

和歌山市 垂井千寿子

ドア一步世間の風に身構える
にせ物のレットテルだつて美しい
人誇る苦い後味いつまでも
争いは好まぬ顔で武者飾る
女郎花 亡母の心を守り来て

和歌山市 細川 稚代

告白のきつかけくれた星月夜

一人居も三度三度のめし茶碗

かみ合わぬシーソーゲームにある疲れ

表裏一対 心の隙をぬすまれる

山も樹も病んで故郷にゴルフ場

和歌山市 桜井 千秀

葉桜の毛虫は鳥の栄養素

個性派でないが持つてゐる自己主張

覚え書自分でなけりや読めぬ文字

分析をしすぎて愛に飢えている

筋書きの通りに運ぶ気味悪さ

和歌山市 木本 朱夏

爪さえも亡父に似ている血の絆

無人駅きれいに掃除ゆきとどき

くすりやのおじさん風邪をひいたはる

半眼に猫飼い主を品定め

家出した猫待つてゐる花の冷え

和歌山市 山川 克子

3対7は私の好きなバランスよ

成るようにしかならんとは他人様

美しいハガキ神経撫でにくる

夏山は男でそこにネムの花

出藍の誉れ経営者も困る

和歌山市 福井 桂香

春風に裾は乱さぬ姫りんご

竹人形ひとりぼっちはつまらない

意地すてて幸せごっこしませんか

罪消えぬ たとえば手記を焼いたとて

お仏飯もひかえ目只今ダイエツト

和歌山市 田中 輝子

生き方が時折猫に似るわたし

少量の雨に決意が儘ならず

去る人を追わず未完の絵が綺麗

遊ぶのが下手で罹った五月病

幸せと言う裏は覗かぬ方がよい

八尾市 宮西 弥生

その先は若気のせいにして許す

つかずはなれず嫌われまい嫌うまい

美しく老いる支度の赤い服

物言わぬ冷戦好きな女なり

金持ちでなくってよかった姉妹

八尾市 宮崎 シマ子

力づくでものを言わなくなった父

碁敵の来ぬ日の父をさけておく

相談の重さに母は口ごもる

タンポポの踏まれた型で花が咲き

奥の手と知ってて母さん乗って来る

八尾市 鷺見章

寝屋川市 稲葉冬葉

ルーブタイ遺影の父の若々し

カラオケにガイドいらぬバスツアー

難聴のポリュームあげて句座の隅

反核へ巧拙問わぬサインペン

女人百態ロビーの暇を持て余す

八尾市 古川 覚然坊

職人の自我に固まる人嫌い

マネキンが裸にされてる定休日

初出勤妻の真心身に纏い

学長の立場苦しい語尾となり

陽が落ちる時妥協する地平線

大阪市 江城 修史

子供の日 母の日 五月はものいりだ

労働歌亡父の昔がよみがえる

赤 白の花の命の私語を聞く(母の日)

深追いはよそう虚しい風が吹く

あと十年命下さい腎不全

大阪市 津守 柳伸

参加することに意義あるあみだくじ

駄目なもの駄目と決めてる好い寝息

老眼鏡余儀なくさせる偏頭痛

休まないパートに意地が見えかくれ

健康が取り得五十路の笑い皺

嫁さんも私と泣いた北キツネ

冗談に済まずに惜しい社会性

葬儀屋の息子も好きな山川歌

弱りめたりめ猫もばかにする

仏さんだしに使った桜もち

松原市 佐藤 奏月

優しさに溺れて母の日も暮れる

長男と長女あつさり出てしまふ

風みどり夫婦の旅はつづくなり

来年の藤の咲くのを待ちましょ

現状に耐える私の時間表

堺市 藤井 一二三

子を持たぬ妻へ母の日花が着き

ヘルスメーター怒まれているダイエット

気休めがすんなり言えてうろたえる

夜桜はさぞやと散ってからの旅

出雲路の花 御衣黄と名も優し

堺市 楊井 二南

隠されぬ好意言葉の端に出る

カド番は覚悟の上の底力

無に出来ぬ好意窮屈でも座る

聞こえない振りして別の柄を選ぶ

不承不承後の祭りをあきらめる

松江市 柳 樂 鶴 丸

生きるために穴を掘っているもぐら
僕の哲学 一生青春

僕があくびしたら猫もあくびした
人の字のつかい棒は妻である
ゴルビー人形商魂は見逃さず

松江市 舟 木 与 根 一

ベッドタウン霞の上で寝ています
へい越しの芝生でつくり笑います
示談では銭の言い分だけを聞く
少し欠けた茶碗にふかい訳があり
幸せな余生と思う裏通り

松江市 恒 松 叮 紅

連休に無粋布教がベルを押す
日の丸を仇のようにする謀反
本業がつい疎かになる美声
賞状は一つも掛けてない鴨居
後継ぎのない老斑の農具小屋

大和高田市 岸 本 豊 平 次

出生率低下で婿も望めない
饒舌がパート仲間に疎まれる
山菜は味より匂を食べる幸
遅霜に枯れてしまった茶摘唄
灰皿の代りにされた水たまり

姫路市 人 見 翠 記

春浅し東の人と別れたり
佇めば老鶯の声山霞む
血の絆昔を今に重ね合う
吾妹と歩けば亡母の影惚ぶ
亡き母と歩いた里の白い道

箕面市 坪 田 紅 葉

花みずき画く気にさせた花ごころ
春うらら桃の一枝添えてみる
心まで病まないように絵筆もつ
年なりのいぶした炎 喜寿の春
浮気などした事ないとはい切れぬ

大阪市 大 塚 節 子

関節の痛み具合よ明日は雨
女独り小出しの醬油減りもせず
糸切れた傘で濡れてる不惑です
フォーカスも無しひっそりと夫不倫
君の名の真知子も孫のある年齢か

寝屋川市 岸 野 あ や め

狎撫でてひとの苦衷に耳藉さず
ワープロの辞表迫力足りませぬ
花ハッ手悔いに時効はありません
もう少しおきばりやすと人使い
腹ふくるることのみ下級公務員

宝塚市 丸山 よし津

遊び上手が美德になった世の移り
デザートになって嬉しい話出す
あしたへの歩幅息子を信じよう
おとなしい妻が六法全書繰る
友達はみんなライバル塾通い

神戸市 中村 ゆきを

小糠雨 人が死んだり生れたり
母の旅釜めしの釜持ち歩き
水色の流れに会った木曾の旅
オール3将棋は教師より強し
夏羽織人妻と降り京都駅

米子市 小西 雄々

初心貫徹できず仮縫い着ています
朝寝するだけにとりえの無位無冠
昔なら打ち首という嫁もいる
だまされた昔の鱗もっている
生きてると言いはったとて脳死では

米子市 石垣 花子

残された土をのがさず杉菜の子
老妻は疑いもせず踏絵踏む
峠の茶屋 蛇の脱け殻祀ってる
泣き寝入りしたのは祖母のねこ炬燵
裏の裏知っているから辞表出す

米子市 野坂 なみ

鍔広帽子 初夏のおしゃれをして見よう
おふくろの味スプーンにも教えとく
手提袋に温い言葉を詰めている
はぐれ鳥 決心をして水を飲む
善人の思わぬ裏にたじろいだ

米子市 菅井 とも子

峠から落ちるものには追いつけぬ
続編を辿り決着つけに行く
戦略に負けても男 明日がある
次に割る茶碗はちゃんと決めてある
ホームステイのつもりハワイで娘の自炊

米子市 寺沢 みど里

多才には遠くひぐらし聞いている
減量へスプーン一杯重く見る
芝居なら男下駄でも履きこなす
正直な耳を子孫へゆずりたい
祝砲にマストも震えかくせない

米子市 田中 亜弥

渴ききった心いやすは仏さま
ふれあいの太鼓風上から打とう
王さまと同じ珈琲のんでいる
きりとり線実りの音で切りはなす
スプーンが曲るみんなの顔も真剣だ

米子市 政岡 日枝子

窓全開 向学心に燃えている
許す気になれば構えることもない
劇は終つて峠の茶屋は戸をしめる
たそがれの峠で犬と座っている
橋の手前でお茶を一服所望する

米子市 沢田 千春

好きな絵をいつも心にかけている
雲が動く忘れものでもしたように
降る雨を池の波紋に知らされる
やさしいが動かぬ芯を持つ女
知らない町を雨と歩いた遠い日よ

米子市 光井 玲子

子育ての谷で鉛筆尖らせる
浮上してわらべを誘う水すまし
過去形の言葉がわたし放さない
恍惚の風しのびよる休み明け
太陽とお話好きの麦わら帽

米子市 新 正子

桐の箱 徽章は父のものでした
セールスがべっぴんだったばかりに
人間の縁を思うアイバンク
両親の生年月日言えますか
情報はネズミを取った猫のこと

米子市 茂理 高代

頭一つ下げて身丈へるでなし
安堵する椅子も絵もある珈琲館
影法師お前が先に泣くでない
色褪せた帽子に恋を教えよう
女の香残っていそう自己安堵

米子市 小村 てい子

好きなスーツにシャネルはいらぬ念を押す
万緑の中で若さを取り戻す
勉強でした反故にされたは口にせぬ
金持ちといつも話がかみ合わぬ
レースのカーテンこの頃情緒不安定

唐津市 田口 虹汀

切り口が非凡じゃないと見る非凡
影法師杖もつかずに確と立ち
孫の鯉太平洋の風を飲む
童顔の父でネクタイ赤が好き
石仏に見る童顔の無欲さよ

唐津市 久保 正敏

灯台を避ける不倫の船外機
ライバルが肩を寄せ合うボトル棚
中年の恋が隠れる旅靴
助けての声に二階の窓閉まる
絶句したままパトロンの鉢合せ

唐津市 浜本義美

ふるさとの緑を削る風に哭く
心急くことのみ多し菜種梅雨

北方領土みつめ浜辺の昆布拾う

あの人とそっくりの瞳と眼が出合い

こんなにも花が咲いてる貸空家

唐津市 浜本ちよ

喜んで良いのか夫の優し過ぎ

座布団に足をとられて手首折り

四十年妻の助役は平のまま

墨の香に心澄まして筆をとる

ほんとうのおしゃれは粋な帽子から

出雲市 板垣夢酔

母病んで父のラッパはつまりがち

毬だつてつかねば弾んで来はしない

諦めがとつても悪い火消し壺

子のためとならば十字架背負う母

冗談もチラホラ咲いて酒はずむ

出雲市 久谷まこと

老農は米と話して独り住む

年金にゆつたり浸る旅の宿

ストレスをビールの泡と飲み下ろす

健康のパロメーターの爪を染め

野仏に今宵はかかる月の暈

出雲市 園山多賀子

お早うの言える蝶に手間が要り

糊塗ばかり取り繕つてはしたない

藤垂れて謙虚な彩で蜂を招ぶ

鯨尺当てては妥協の線描けぬ

師の声が節目節目で蘇り

出雲市 吉岡きみえ

見抜かれているとは知らぬ肩パット

ひょうたんの駒を出そうとあせつて

アッチむいてホイわたしをにくむ人がいる

シンデレラ役には背が低すぎる

満月の夜に身内の血がさわぐ

出雲市 石倉芙佐子

ほうほう蝮 私の胸に灯をともせ

日没になると人恋うサルスベリ

鴉二羽住んで居るらし私の森

銀蝶が翔びたつような帯しめる

やぶこうじ其の存在を無視される

島根県 松本文子

死にたいと楽しいことのように言う

コーヒーに飽きて別れを口にする

旅人のように花の季節がやってくる

日没よ呪いたいほど美しい

棘抜いた日から微熱がなおらない

高槻市 川 島 諷云児

噂ほど始末の悪いものはない
万雷の拍手の中に義理もある
事なかれ主義で流れに逆らわず
家中のリズムが狂う妻の風邪
足して二で割るととんでもない話

静岡市 渥 美 弧 秀

本降りに詩と音楽が濡れる昼
深呼吸葉桜つづく散歩道
寝転べば空の蒼さに吸い込まれ
ライバルに勝てる自信で句に励む
FMが流れて茶の間安らぎを

寝屋川市 江 口 度

かる鴨よ三つ数えて飛び込もう
花吹雪ゆっくり抜ける霊柩車
コンパクトばちんと狐出来上がり
ホーホケキヨ老婆とほおぼるにぎり飯
休み明け言葉少なになっている

高知県 赤 川 菊 野

門灯が見えて仮面をぬぎ捨てる
左遷地の地酒に傷をいやされる
逆境に強いが情けにもろい寡婦
編物をしている私がいっち好き
ストレスはとれたが家計火の車

西条市 片 上 明 水

自らの達者を影で確かめる
茶を半分残して話くどくなる
両手とも嫌いな人と手をつなぎ
養生の土地にネオンが多すぎる
仏壇の鐘にリズムをつけて祖母

倉吉市 渡 辺 菩 句

お多福はうれしさを隠さない顔
雲雀鳴く下でうれしい魔法瓶
心臓に悪いニュース多すぎる
コーヒーカップ取り替えるのも浮気かな
ランバダのリズムで米をといでみる

香川県 松 村 迷 観 子

申し分ない話にも裏があり
バランスをくずしていたのは欲だった
横書の方を好いてるボールペン
置くとくに置けば小皿も光り出し
登り口までは揃っていた男

神戸市 山 口 美 穂

みどり濃しショパンの曲に酔う
しまい風呂 雨だれの音ききながら
亡父の靴もみがいて七回忌人を守り
捨てられた子猫これからどう生きる
もう一息定年までの荷を担ぐ

京都市 山本規不風

花菖蒲の紫包むひと一人
若者の結婚しない遊び癖
素行調査の探偵高額納税者
信楽のたぬきに逢うて怪我をする(信楽の事故に娘遭う)
轟音とショックが地獄に突き落とす

加古川市 吐田公一

反核の旗のしまえる日を希い
笑い話で済んでよかった軽い事故
身のためを思った話からこじれ
ケセラセラお天道様と米のメシ
「名誉ある地位」へまだまだ波高し

呉市 榎田英詩

初夏だから私も虫も外へでる
ピンク色の頬もドレスもいいもんだ
大人になるのを少女よ焦ることはない
信号機に急ぐ理由を尋ねられ
ひと筋の煙で終る一生か

倉敷市 稲田豊作

知らなくていいこと余計知りたがる
叱りたくはないがと父は叱りだす
知恵くらべするから夫婦仲悪い
金貸してから音沙汰のない男
ふるりの緑を吸って蘇生する

町田市 竹内紫鏑

ワープロのふみでも詫びる行乱れ
老翻訳者まだ期待され細字読む
褒めすぎの極 カミソリといふし銀
生ごみの袋 古道の朝が明け
シルバーパス生きのいい声乗って降り

奈良県 長谷川春蘭

花は散る亡友の佛胸に抱き
花冷えや金魚の居ない金魚鉢
地虫出てはや戦いの始まり
ものの芽や夫婦で分け持つ鍵二つ
趣味多彩秀でたものがあるでなし

宇部市 平田実男

嫁の物指しへ合わすとうまく行く
勝つ汗を知らないエリート
三歳の孫がイヤイヤしたショック
ホステスの小指自己嫌悪が続く
虎の子を虎穴に入ってからなくし

岸和田市 福浦勝晴

掏摸老いてすれぬ夜半に独り言
雑念を梅雨の晴れ間に整理する
サンダルの片方跳んで夜の土間
どっちみち命に予備のない三期
仮りそめの愛は冷たい二号邸

岸和田市 古野ひで

言いそびれその悔い今も胸の底

安心感与える父のでかい靴

衿少し汗ばんでいる花疲れ

寝たきりの老いの祈りは哀し過ぎ

待つ事に慣れてこだわり捨てました

岸和田市 原 さよ子

奥さんのグループ今日はグルメ旅

満ち足りた余生時々怖くなる

憂うつな顔を五月の陽が笑う

新緑の山借景に寺の庭

うっとりとし弥勒菩薩に立ちつくす

岸和田市 高須賀 金太

酒飲んで自己を失いたくはない

均等法女もくわえ煙草など

窓開けて隣の壁を見る暮らし

噴水もつゆ明けの陽を待っている

ご立派な意見だ聞いて置きましょう

岸和田市 岩 佐 ダン吉

浴後の女もひとこと言いたそうである

積ん読でまた連休は終えました

不機嫌な顔ばかり乗せ通勤車

逆転無罪マスコミ汗を出しています

劳いの言葉を海はもっている

姫路市 大原葉香

とつてもうまそくに水を吸い込む素焼鉢

カウンターの美人配置の銀行屋

竹光の意見で子らはついて来ぬ

胡瓜にもストレス溜まり曲ってる

口紅からもれる言葉は軽すぎる

姫路市 丁坪サワ子

子は鏡 昔の言葉になりました

家道具揃えて嫁さんだけが欠け

五月病巣立った孫を案じます

浅漬けの茄子の色は亡姑のもの

頭陀袋へ入れ忘れた恨み節

姫路市 中塚遊峰

「失言」と詫びて本音はしまつとく

細い身に鬼も仏も住んで居り

父の縁うすい息子と彼岸花

花冷えに亡母編み給うチャンチャンコ

親馬鹿が先にさわいで息子が笑う

守口市 野呂右近

聞き役の安全策を取るも老い

勿体なや三百六十五連休

授かりし命大切に野天風呂

運ぶ足軽く牡丹の寺を訪う

自惚れも恐いが悲観もつまらない

守口市 羽原静歩

アルバムに万里の長城駆け足で
日の丸に恥じないように掃海艇
ピカソもマチスも迷惑なオークション
ゆっくりと病気とつきあう心知る
七夕に二十一世紀の夢を書き

守口市 森川まさお

整地され父のふるさと山低い
塵のない近江八幡隠居町
私語やめて老いた社員の唄を聴く
タンポポが飛ぶ老人の多い町
転勤の先生にもう若葉道

島根県 西村早苗

連れも又ポツポツ話す国なまり
児の手には余る母子のマリ遊び
嘘すらしりすらしあんなに可愛い娘
性格ががらり変って酒の息
気のもめる話も聞かず立ち話

島根県 小砂白汀

睡蓮も咲きたくなった空の色
美しい私語聴かず柿若葉
風みどり一億じつとしておれず
どじょう掬いが出たぞそつと抜けようか
老いしかな座ぶとん如きに引っかかり

島根県 柿原秀子

気負わずに生きてときどき恥さらし
からたちの花に暫く立ちつづけ
本当をほんと言ったまでのこと
無事だろう便りないまま春が立ち
万緑の中のふるさと鯉のぼり

島根県 樽みどり

知恵袋娘に伝えおくひもほどく
耐えしのふ事繰り返す朝の経
余生なお夢とロマンのかぞえうた
につこりと若く着てみる試着室
カバーする年をいたわる化粧水

島根県 石田清泉

葉桜に馬耳東風が振り向かず
入院の噂は癌にしてしまい
輸入にも負けるでないぞゴシヒカリ
年金のアップに昼寝支えられ
散り際をあつさり桜と共に逝き

岡山市 川端柳子

雨の日は稼ぎの多い本の虫
たしなめておいたら時計止まってる
ちっぱけな嘘が私を眠らせぬ
歳月やオペラグラスにかけた愛
みる人はみてくれていた石の上

岡山県 小林 妻子

もしもなら消費税なぞ止めてんか
もしもなら大学行きも表から
もしもなら白寿までもと思つてる
もしもなら極樂行きにしてもらう
もしもなら畳の上で大往生

岡山県 矢内 寿恵子

生き生きて余生は弥陀の手にあずけ
愚痴も苦も忘れさせます詩心
よろこびを分けるとゆれる絵ろうそく
山頭火も私も旅で傷が癒え
老春を炎えて染めよう一行詩

岡山県 山本 玉恵

美しいことばにかくす含み針
ひとりよがり泣けばあすから貝となる
ゆきずりの情けによわい千切れ雲
重い枷だつたと思ふ靴のひも
不器用な背を見て育つ子が二人

岡山市 井上 柳五郎

不精髭白が混じりてよく目立ち
お若いと言わせないから齢を言い
栄転の辞令がさせた酔いつぶれ
入れ知恵を授け自惚れまでも入れ
器用さも隔世遺伝 子にも負け

岡山県 二宗 吟平

ごみあさる猫にも生きる権利あり
天皇のお顔で醍醐桜咲く
待つ人へバスのローマ字拾いあい
逢う人のみんな和める同じ趣味
百か日地球が早く回るよう

西宮市 林 はつ絵

たいていのドラマにユグが顔を出す
離婚するほどフアイトがあればよい
時間が無い自由行動いたします
とりあえずしつ尾切ること老える
それぞれのやり方ですと蟹が言う

西宮市 門谷 たず子

合せ鏡に映す本音と建前と
合掌の向うの虹を信じよう
足を病む夫にテレビのいいショット
心配をさせたベッドがよく眠る
たあいな話 母娘の糸電話

西宮市 奥田 みつ子

沙羅双樹 迷いつづけているばかり
まなざしの奥で許してくれている
衣替え胸の起伏に風が添う
子が巣立ちミシンの音が聞こえない
鬼太鼓のひびきに酔うた佐渡の旅

西宮市 西口 いわゑ

仲なおりビール程よく冷えている
生きている十指に余る欲がある
空想のとっても好きな妻の椅子
三面鏡 女のドラマ続くなり
うっかりと鬼と約束してしまふ

鳥取県 林 露杖

鶯の声バリトン・テノール バスはない
風邪の熱下がり有明時鳥
雨だれの音のリズムをきく朝寝
若し妻が癌なら告知どうするか
ゴミ出しがいつしか僕の役となり

鳥取市 小谷 美つ千

子に譲る太陽汚してはならぬ
なにもかも譲る覚悟の沙羅双樹
言葉より肩をびったり寄せてほしい
思いきり恋して自分史を飾る
紫陽花に傘の味方を従えて

鳥取県 羽津川 公乃

人情が乾いてからの花粉症
のびのびと背丈も靴も父を越え
記憶の中に兵隊さんよありがとう
字も口も下手で凶太く生きている
太陽の真下で嘘のない暮らし

鳥取市 美田 旋風

いざというときにお里がもろに出る
こぼれ種思わぬ場所です芽を伸ばす
夜桜に月も出てくる歌も出る
遅まきの明るい顔に救われる
可も不可もなくお役所の椅子守る

竹原市 森井 菁居

切札を隠して騙し舟に乗る
失敗を重ねて攪む虹ひとつ
ハイテクの戦に弱い五十代
相続をして忙しい日曜日
都会化の波因襲の気に要らず

竹原市 信本 博子

鬼のいる仲間でカゴメの輪が出来る
ふわりとターン白鳥となるトーションシューズ
イミテーション宝石箱をまた増やす
ファミリールェストラン男が運んでくる料理
先頭のエスカレーターに立つ不安

竹原市 岡本 清水

愛すればみなよく見えてくる不思議
沈黙考やはり女は邪魔になる
七十四歳今更向きは変えられぬ
口八丁 未だ嘘一つ言えませぬ
真実は必ず稔る茄子の花

羽曳野市 田中透太

誰よりも君を愛して五十年
ここからはあなたが先に歩く道
灰皿が空っぽいつまで続きます
出稼ぎの父を見送る無人駅
四捨五入しても届かぬ願ひ事

羽曳野市 吉川寿美

紫陽花のひとつひらずつにある懺悔
罪状は明らかならんリトマス紙
芒原仔細はきかぬ事にする
戦列を離れ挽歌の風をきく
じつくりと愛を煮つめる落し蓋

寝屋川市 宮尾 あいき

花の土手私は蝶になって舞う
あおい空軽いタツチで白い雲
軒のぞくつばめやつぱり住宅難
ばあさんの頬へキスした阿呆な蚊よ
さみだれの音もうれしやしまい風呂

寝屋川市 柴田 英壬子

梅雨の視界も天才の詩になる
外面如菩薩山を動かす女です
思いやり少し黙っていてあげる
卯の花も出石の蕎麦の花も白
沈黙は金 夫との誤差埋める

大阪市 黒田真砂

逢えば別れがしのび泣きする彼岸花
いたわりを受けて嬉しい老いの膳
落葉焚く煙見つめる無為の刻
俵せが指の間からこぼれ出す
亡き友の想い出いつも赤いばら

大阪市 本間 満津子

影の私を突き放せない岐れ路
押し入れに我が家の歴史積んである
誓ったのでないが自分を裏切れぬ
カタカナに躓きながら聞くニュース
欠席に大事な人を二度死なせ

大阪市 神夏磯 典子

しまつた言葉も時効 五月の陽
年輪を自信と錯覚してならぬ
抜擢の椅子に吹矢がとんでくる
しっぽ振る犬に備わる処世術
人ごとと思えぬ過労死の話

大阪市 北 勝美

日本に平和憲法と言う重荷
社会党脱皮をしても蛇は蛇
気がつけば生き石死んでいたざる碁
山峡の石の弥勒に青い風
白桜忌晶子がダブル酒を酌ぎ

大阪市 井上白峰

あり余る国の政治に知恵が無い

結論が出るまで回る換気扇

酸欠の部屋で会議が捗らず

納得はせぬが手を打つ多数決

相槌を打って人生丸く古い

大阪市 藤田頂留子

金属も上手に活ける池の坊

放牧の羊絵にするあかね雲

タイミング悪い親切うたぐられ

平野川末吉船をおぼえてか

親よりも易を信じる若いもん

大阪市 坂口公子

一粒の貝が持っていた魔力

大人並み挨拶出来る子で怖い

うぬぼれのドアがノブから錆びてくる

中供になった子供で他所他所し

無口なる貝の潜術には勝てぬ

大阪市 板東倫子

相続税まで心配してる馬鹿な親

絹道の果てならまちの吉祥天

花粉症のまま夏風邪へ移行する

旧き良き言葉が死語となる船場

風致地区という名の暴走族コース

大阪市 榎本落児

河童にも酒の呑めない奴が居る

春晩に木魚はねむい音を出す

なさけなや男に汗の匂いせず

新聞の集金人のおべんちやら

女の子椿を拾いつつ歩く

大阪市 塩田新一郎

何所に金あるのか日本の金余り

蒟蒻と聞いて畑をのぞき込み

成住壊空 我にかえれば四畳半

古希だから忍の一字は捨ててやれ

ベントの新車ビニール本が乗っていた

奈良県 田中紀美代

句読点つけて妻母女する

太陽に脱帽薄着になりました

太い腕出して夏日にこたえます

揉めるのが嫌いで無口になりました

姑の目が優しくなつて初夏の風

有田市 松井かなめ

煽てられ調子に乗って本音出す

活発な女客ばかり五月雛

脛の古傷めぐり出すよな友が来る

夢枕亡母は緋の着物着て

連休がいいと言うのは金次第

黒石市 相馬 一花

失恋をいつも貴方のせいにする
乳牛は黙って乳房握らせる

右隣左隣も花粉症

曲者のように夫が朝帰り

水仙も偶に不倫の味を知り

松山市 谷 信夫

水平線に地球の丸み夕日落つ

山菜を食べ鶯を聞いて無事

人生で何であろうか葱坊主

そら豆のおはぐろつけてかたくなり

探し物ここに居るよとなぜ言わぬ

海南省 三宅 保州

氷山は海の深さを知っている

簡単に頭丸めたがる男

従いて来いと言った男も粗大ゴミ

盛大な葬儀喪主への忠義立て

他人には喜劇に見えて悲劇

藤井寺市 福元 みのる

子どもにも言い分正座崩さない

ミニはやるそろそろ景気後退か

起き抜けに白状なさい妻強気

雁首が輪になったとて知恵は出ず

政治改革よりも自己変革が先

広島県 田村 新造

シベリアの語り部僕が生き証人

望郷の想い北斗の星に泣く

ノルマにはまだまだ足りぬ雪乱舞

戦友がまた二人逝き朝点呼

ひと冬で半ばが死んだ捕虜地獄

京都市 松川 芳子

一生を働く妻で母で老い

ほとぼりが醒めると傷が癒えて来る

特売場女戦士になっている

難民の飢餓の乳房に児が縋る

人生を姑息に生きて来た孤独

弘前市 小寺 花峯

預金通帳離さぬ頑固ボケかいな

自由にはなつたが寂しい妻の留守

エリートに値打ちは酒の量を知る

トックリに昔話を入れてみる

目を閉じて耳は塞がぬ四畳半

富田林市 片岡 智恵子

人生の午後三時なり夜はながし

売れないから舞いこんでくる役もある

探しもの掃除区切りのつかぬまま

土壇場で決断下す四捨五入

ひっこみ過ぎた杭へまわりの杭打たれ

倉敷市 田 辺 灸 六

堺市 柿 花 紀 美 女

今のまま愚痴に濡れては風邪をひく

ほろにがい酒が自省の雨となり

白い杖やさしい音を聞き分ける

音もなくいのちを消した流れ星

くつろいで飲む晩酌にあるゆとり

和歌山県 天 満 三 千 代

家計簿に平穩たもつ嘘もあり

ほんやりへ頬杖ちゃんとやって来る

節目節目に亡母の仕種が甦る

田も家も豆が主役の豆の秋

八十八夜お茶ひと枝を仏前に

東大阪市 崎 山 美 子

呼び出しておいて何か用かとはあきれ

おぼはんと呼ばれて年齢を意識する

あざやかな手口に怒るのを忘れ

一瞬のスキが招いた大ピンチ

セールの言葉で本物だと信じ

境港市 細 木 歳 栄

初夏の風引つ込み思案を唆かす

くすぐってみたいなハウスマヌカンよ

妖艶な牡丹をねたむ小糠雨

たんぽぽの綿毛を攫う風は初夏

さておいて話に花咲くわらび採り

父蔵書はらりと落ちた花栗

温い風連れてナースがやって来る

弾んでるデートへ春の花時計

グムの底昔話が沈んでる

帯の位置きまり今日の同窓会

河内長野市 井 上 喜 醉

玄関で念を押された忘れ物

夢少し残した余生の風ぐるま

追及を軽くなして酒を注ぎ

花園に夢あり恋のテント虫

茶柱が嬉しい誤算におわせる

玉野市 小 谷 仙 山

心の奥に亡父の笑顔と泣き顔と

かと言ってそれでは法が許さない

あのーそのーと逃げ回ってる肚のそこ

母の味このくらいそのくらいで覚え

あのーそのーと逃げる金魚がにくめない

尼崎市 奥 山 美 智 子

親孝行やってほどよく腹が空く

丸木橋渡る代役ならやらぬ

ふところ手奥の手はどうに打ってある

会いたくて星のとりこにさせられる

もたれ合う友達がいて輪が温い

奈良県 中原 比呂志

渦巻いて消えていつもの陽が沈む

あと始末出来ぬ砂漠が燃え続け

先生も人間臭く好きになり

ネクタイを直しノックの深呼吸

本棚の向うで聞き耳立てている

静岡県 藪田 獭 杳

玄関へ千客万来の塩を盛る

母のこつ醬油を落す隠し味

パチンコで隣も年金暮らしとか

母の日にそつと握らず軽いもの

不祥事の温床 大学門の中

柳井市 弘津 柳 慶

十年振り髪が薄くなったなあ

柳友にやさしい目で迎えられ

たばこ一本余裕を見せて吸いつける

バランスがくずれていますと評論家

大田市 藤田 軒太楼

待ちました日本晴の入学日

減塩の昔の味を忘れず

まだ捨てぬ願望やつと孫を抱き

気に入らぬ雑用出立ちから疲れ

奈良市 上田 翠 光

わいわいがやがや憲法第九条

リクルートほとぼりさめて党復帰

海部さん聾機敷に慣れている

不甲斐ない野党 自民を驕らせる

諫早市 原田 明 春

嫁さんが強くなるぞ鯉のぼり

初孫を抱いた女房はマリアめき

午前様迎えてくれる妻入院

孫が来て俺もつられて食が増え

和泉市 西岡 洛 醉

隣から女の噂派手なこと

草花は風の意見に素直なり

化粧台鏡に別の顔と逢う

髭剃って今日のデートは妻でした

羽咋市 三宅 ろ 亭

萌え上がる鄙の論理をとがめまい

いつからか下が上になった変化球

濡れ手に粟そんな種はまくまいぞ

今朝脱稿 朝飯こんなうまいとは

竹原市 岩本 笑 子

カラオケと聞いて軽く腰を上げ

愛という言葉のカギが見付からぬ

眠り癖 五月の声を聞いてから

優しさの中で溺れたのは私

岸和田市 清野 こう

動物に餌与えつつ仕込む芸

腰痛に泣いて家族の愛に泣き

妻の背に連休重荷となつて載り

ハイハイと軽い返事で聞き直し

夫逝きしその日は桜満開に

貝塚市 行天千代

傘寿まで生きるつもりはなかつたに
セーターがブラウス着よか迷う朝
娘が帰りホッとひと息また一人

七尾市 松高秀峰

紙屑が再生紙で生きてくる

他人だから優しい言葉軽く出る

晩成を信じ努力も無駄と消え

降りそいで降らない雨に泣く蛙

唐津市 仁部四郎

夕立のぶりがえし待つやせた恋

夕立がやまぬ財布を手で押さえ

夕立が消えて虹からきた電話

夕立へ左肩から割って出る

唐津市 山口高明

構想も無いのに反対ばかりする

白酒の甘さに一寸長居する

太平の世間騒がす人面魚

狙ったポストへ俄か天下り

唐津市 筒井朴竜

夢ロマン求め六十路の赤いシヤツ

雪山のロマン崩すな山おとこ

新能を舞う幽幻の宮舞台

喊声は天突く舞の里神楽

春耕の土塊農の百面相

弘前市 真喜内 實

草刈機泣かせの草に花がない
ママ不在おぼろ月夜の孫と寝る
ほめられて男冥利に尽きる酒

十和田市 斉藤 劼

夜桜に見とれて吾子を見失い

花花花津軽りんごの花の顔

土の手が好きと素直に言いたいので

蛙とて本音で泣いているのです

五所川原市 加藤 彩人

あす左遷別れるポチと子は眠る

人食らう夜叉でも歌う子守歌

瞳の底に子がいて辞表出しそびれ

忘却の二字 広島の辞書にない

十和田市 阿部 進

おいしいのひと言妻が満ち足りる

痛いところ突かれて本音跳びあがり

秘密ごとテレホンカード知って居る

定年の納屋で錆びてるゴマスリ器

弘前市 村田 善保

ひらがなの「おんな」が匂う洗髪

厳しさに忍の一字の自閉症

アドバイスだけではすまぬ金が要り

逆境の小羊が聴く神の声

オブラートの向うにもある友情よ
岡山県 千原理瑛

悪縁の絆にひきずられている男
有為で生き無為になる事だつてある
ちっぽけな私に幸せありがとう

岡山県 松本元江

遠足の子等が手を振る日本晴れ
惜しみなく命を張って花が咲く
快晴の空に感謝の衣をたたむ
苦労話も聞いてやりたい二年草

岡山県 荻野 鮫虎狼

神前の大太鼓から寄付の音
勲章の重みに歪む小抽斗
三度目の職 任侠の心かも
父に似て隣の世話をやきたがり

岡山県 岩道博友

寺祭奉仕の話が長い夜
信心気無いの席だけ前を取り
八十八夜何か書きたくなる色紙
先生が昔の仮面付けて飲み

岡山県 花田 たけ志

楽しくて余生の後押しする手芸
強引と言われぬほどのマイペース
名水を探し求めて未だ死ぬ
土に聞き土に話して立つ菜園

今日の疲れ労つてくれているステッキ
段々と孫僕に似てくる怖さ
刺の有る女に男魅せられる
けもの道人が侵害してならぬ

大阪市 渡部 さと美

五時起きをすれば都会も風みどり
変る街番地おぼえていたつばめ
木の芽青じそ好きでつくづく日本人
一触即発それ火の付きそうな恋

大阪市 寺井東雲

ベレストロイカ大きな旗もうなだれる
停年で酒の限度をわきまえる
掃海艇重い課題を積んで居る
新婦の前で誓いの言葉舌もつれ

大阪市 上田柳影

鬼仏使い分けてる姑で
性佗し叛かれる人叛く人
堀水も今日はとろりと花に酔う
この帯もとくと起伏がありそうで

大阪市 町田達子

ガンダール仏そつと何かを語りそう
不動像お滝見守る水しぶき
貴人浮く藤に重ねる物語
賭ける物持つて明日へ夢続く

大阪市 富岡温子

選ばれて思いがけない重い椅子
賑やかな人で賑やか通夜の席
強がりの糸がちぎれた奴唄
幸せを計る定規を持つている

大阪市 岡田ふみ

新しい眼鏡を誰も知らん顔
てきぱきとしてたお内儀が兎にかえり
花冷えに祖母も植木も震えてる
骨納め法事の席の他人めき

大阪市 松永すすむ

手土産のつもりで庭のバラを剪る
報われることのないまま逝った母
村おこし水車も手伝う過疎の村
孫が来てそらおそろしい事を言う

大阪市 橋元美恵

姑の彩知らず知らずに選んでた
側に置く星野富弘 花の詩画
喧嘩して楽しかったよ嫁ぐ娘よ
白い髪まざってステキなイヤリング

和歌山市 青枝鉄治

許すとは言わぬ父から届いた荷
変化球投げて妻は打ち返す
海を見て納得をした井の蛙
拾い読みの知識で朝の訓示練る

和歌山市 山田高夫

その先が徐々に縮まる老いの四季
無気力を表に晒す不精ひげ
ぬるま湯を出ると冷たい風当り
足跡も無くてひたすら生きただけ

和歌山県 寺田裕美

追憶の雨に養着た亡父と牛
禅寺で藤神妙にぶら下がり
動脈に触れる話で血がさわぐ
急ぐ程もつれる足へ発車ベル

八尾市 山下美津留

わらび取り腰の痛みを忘れてる
じゃじゃ馬と添うて暮して三十瀬過ぎ
民営化無残な事故で答え出す
家形船露の五郎の舟を借る(堂島川で同窓会)

八尾市 吉村一風

酔いつぶれるな幸せが逃げてゆく
茶断ちした母に唯唯頭下げ
眼の中に弁天が居る信じよう
残雪へいつの日からか山が好き

鳥取県 江原とみお

笑顔につられ白状をしまし
描き損じばかりしている明日の絵
横にふるつもりの首を洗っておく
パトカーが隠れたとんび輪をかい

鳥取県 土橋 はるお

肩を落として息子が見合いから戻る

高い処の仕事が駄目な大工さん

電気カンナの隣の音に妬いている

鯉のぼり分相応に泳がせる

鳥取県 津村 八重子

夢すてて歛と歩んだ半世紀

老いてなお父母古里の灯を守り

少年の夢ふくります青い海

終の日の友へきれいに紅をぬる

鳥取県 さえき や え

母癒えてふたたびめくる春曆

友よ不義理をゆるされここに生きてます

冗談も忘れたことにはつとする

花の下はなしは母が癒えてから

鳥取県 上田 俊路

三Kを嗤う男がまだ独り

長続きしないが興味はすぐに持つ

予期しない金が謀反を唆す

負けて勝つ呼吸を知ってから平和

鳥取県 武田 帆雀

閑人を相手に菊を挿している

米を搗く米の白さを手の平に

美辞麗句一人いい子になっている

ヘルパーと一緒に泣いてくれています

鳥根県 北川 民子

馬鈴薯の花の白さよ啄木よ

目薬を差す天井の古いこと

ちっばけな知恵が浮かんだ青葉風

途惑いをもてあましてる針の穴

鳥根県 藤原 鈴江

孫離れやっばり心残りです

木蓮が仏に仕える顔で咲き

散り際を捧げる人のありやなし

五月かな五月の顔して歩こうよ

鳥根県 松本 はるみ

ファックスに金の無心をさせてみる

許されぬものを見た目だ洗わねば

いち日の余白いろどるほととぎす

止り木に少し悲しい歌を聞く

鳥根県 佐々木 芳正

言い訳はそれと決まった縄のれん

こんなとき父の威厳が欲しかった

愚痴ひとつ捨てに行きます母の海

こうもりも来て吞んでいた祝い酒(地方選終わる)

鳥根県 小田川 智重子

ゴミ置き場 蝶々が一羽舞うて見せ

狭い部屋迷うてみつばち手こずらせ

右往左往しているうちに歳をとり

しまい湯につかってタオル数えてる

島根県 高野律子

言葉しずか茶筌の音で朝がくる
雀二羽何を語るか小糠雨

ここだけの話が町の風に乗る
煩惱を捨ててに風いだ海がある

出雲市 金村青湖

血縁に四年に一度つなされる

未来図が見えぬボンボコリンの唄

再会へ君もロマンスグレーなり

友情の古い木がありまだ枯れず

出雲市 小玉満江

靖国の桜今年もパット咲き

連休をもったいなくも松葉杖

赤ちゃんが待合室へ笑みをまく

下校の子もつと端っこ歩きなよ

出雲市 小白金房子

牡丹背に島の訛りが売りに来る

どんな子になろうか花のランドセル

アトリエを出れば新緑目にしみる

築地松栄え大家の灯を囲む

出雲市 竹治ちかし

僕の時つ少し歪んだ尺度計

穴馬に賭ける勇氣は持たず老い

平凡な日々 酒瓶が空いてくる

偉大さを見せぬ偉大な父でいる

広島県 藤解静風

病院の窓から街が濡れている
平凡な暮しにうまいとろろ汁

帯に足らぬ妻だが一人よりふたり

三界に家がないのは男だな

福岡県 横地正好

ほたるがり捕るな逃がせと子と共に

笹舟が走る川あり児と駆ける

父の日のお祝い割引き買って来る

新年金生きてるからとこの拍手

高知市 北川竹萌

米寿越え畑見まわりの背が直い

目白鯛い今日も出かける贈与林

松の木で播きもの覗く鳥二羽

煎り揉みの手が合うてきた二十年

寝屋川市 平松かすみ

金券を当てても夫の好きなもの

条件が良いので思案するツアー

ハイハイと引き受けてから肩のこり

食堂の隙を狙って行く募金

寝屋川市 堀江光子

温かい家庭の子だと直ぐ分かる

人事に子離れせよとすすめたが

たそがれのそろそろ母の来ますころ
老いてなおお父母思う薄暮の灯

豊中市 上田 登志実

青春の息吹きと和する若葉道

ああしんど女権ますます強くなる

夫婦とも同じ場面で泣くドラマ

遠回りした人生も今や佳し

豊中市 一瀬 福一

サラリーを言い当てられてます酒

ほめようの無い子の福耳ほめておく

兄さんが貰った母の両えくぼ

二分後の死も読みとれぬコンピュータ

豊中市 吉田 あずき

春うらら寒暖計も忘れられ

すし折を家族冷たい目で迎え

由來程大層でないおまんじゅう

適齡期 親が八卦に凝り始め

米子市 川上 より子

ポケットをたくさん作り旅に出る

自分より優しい友と旅行する

満潮に平家盡くる敵島

芸術の森は落花も模様かく

米子市 金山 夕子

おかげさまアキレス腱で立っている

苺模様のスプーンに響くモーツァルト

太陽を心待ちしているトマト

宅配で届けた愛が浮いている

米子市 白根 ふみ

わらび狩り連休あけてからにする

さくらんぼ自由に向いて人恋うる

郭公はもう来ぬ朝の造成地

見放されても百度まいりを最後まで

米子市 木村 富美子

口紅を引いて負けたくない戦

のびのびになった言い訳しない仲

影武者は昼寝の時に働かす

胸躍る事をさがしに赤い靴

西宮市 秋元 てる

老いて逢い互いに明かす片思い

老いは老いの姿を見せる片思い

縫い姿 絵になる女で不仕合せ

とつおいつ母の祈りの返し針

西宮市 瀬尾 六郎太

緩と急 愛宕の山も見えかくれ(保津川下り)

昔から銘水銘酒今に継ぎ

北四島指切りげんましただけさ

えらいもんだ過労時短国際語

和歌山県 岩崎 瑞穂

主治医さん笑顔がまじる恢復期

躓いて人の心の裏をみる

自惚れて退く潮時を見失う

愛憎のもつれたがいに軋み合い

静岡県 安本晃 授

切り札が凍りついでの黙秘権
生きてゆく余罪を刻む古時計
脚本がほしくて森に向く老い路
鎮守の森緑したたる風を抱く

加賀市 細呂木 魯 木

浮草も逆流したいときもある
入院の吐息風船ふくらまず
公用文形式だけで威圧する
親子でもライバルですと芸の道

倉吉市 淡路 ゆり子

おしどりの夫婦でいるも苦勞です
いつだって理想の妻を乞い願う
退院の祝の膳の七分粥
竹光のさむらい勝つてほっとする

今治市 野村 京子

他人になる音でポストに落ちました
おたがいの寝息うかがうああ夫婦
子を思えばかりで母のめくら編
女の川修羅場を抜けて緩やかに

和泉市 岡井 やすお

実害のないとこ讓歩してサイン
島国に四方八方からの波
だじゃれ語に朝日毎日まで染まり
本物のごつごつとしたところが好き

茨木市 堀 良江

栄転が単身赴任の始めなり
たっぷりとミルクへいちごつぶしてる
性善説赤ちゃん見てたらそう思う
若力士強いだけではない人気

奈良市 米田 恭昌

アリの片棒かつぐ土産物
娘らの土産話が面白い
黙々と企業支える馬の脚
平成の童唄だよボンポコリン

吹田市 井上 照子

まごころで塊まる友を自慢する
花鉄赤いばらだけ選って切る
妻の座は溝の掃除もついてくる
売店のドリンク今日の潤滑油

富田林市 松本 今日子

屋根屋さん足で探している梯子
グアム、ハワイ 我が家の風呂がいつちよい
外出の口実探す春ウララ
毎日が子供の日ですアンパンマン

守口市 結城 君子

散り敷いた花となつても写される
向う側に着けば忘れてしまふ橋
自分史で敵を討った気にもなり
悪妻の涙は本物かも知れぬ

松江市 竹内 すみこ

湯の里で大事な人と逢っている

髪を切るもう忘れたい事ばかり

いい顔で逢おうと思う憎い人

私だけすごい深傷と思っている

大和郡山市 坊農 柳 弘

まねき猫知っているのか不倫宿

青竹を踏んで余生を聴く傘寿

故郷の訛りなつかし寝台車

朝帰り茶粥なんとも旨い味

仙台市 川村 映輝

老いの耳勝手に想像して怒る

辻褄を合わせるためにうそ重ね

連休はくらしのリズム狂わせる

箕面市 椎江 清芳

慌て者すぐ切札を出したがる

縄のれん借りを返して梯子酒

海猫が鳴いて岬に春を告げ

岡山県 池田 半仙

蒲公英の黄色が増えて白が減り

二番目も男でたんと鯉織

裏山の鶯今年はまだ聞けず

吹田市 栗谷 春子

葭切の聞きしにまさる話好き

終焉は静かな息で記したい

よしきりはあわてひと声つけ加え

大阪市 松尾 柳右子

夫のぐち飲み込んでより肥りだし

爪切ってパチンコ玉がよく出ます

マリン舟 魚の昼寝妨げる

河内長野市 植村 喜代

今はただ黙って心暖める

校門を出ると淋しい一人っ子

春うららレンゲタンポポ 蜂が飛ぶ

和歌山県 西口 忠雄

歌手の名をつけても猫は歌わない

お師匠が男で妻の趣味を妬く

お隣の奥さん好きになりました

鳥取県 幸家 單車

銀の鈴振っても神が振り向かぬ

子の絵から夢のシナリオ探し出す

耐えて来た苦労知ってる片えくぼ

大阪府 清水 利武

連休へ空も妬いてか霞降る

流鏝馬を操る男の心意気

奈良の鹿連休の餌食べすぎる

鳥取県 乾 喜与志

鱒一尾の骨までも我がいのち

人形を抱いた曾孫を膝に抱く

交通ルールのことを園児が言うてくる

鳥取県 田村 きみ子

八尾市 片上 英一

男嫌いになったわけではないけれど
般若心経上げて嫁さんお勤めに
十七回忌亡夫を忘れる事にする

岸和田市 三輪 通彦

東西南北 四方八方からNEWS
結局はカネで話がつくいのち
サーカスの唄が聴こえる酔ってくる

大阪府 榎山 隆

プライドを捨てれば頭下げやすい
責任の無いゴムまりはよく弾む
野菜まで乳母日傘で育てられ

川西市 松本 ただし

脇役の光らないけど渋い色
百年は耐えるしかない橋の桁
したたかな運鈍根の繁盛記

鳥取県 西原 艶子

節税と脱税狭い車間距離
石段の一つひとつにある浄土
信頼が平行線になった恋

尼崎市 住谷 石舟

やさしさを花は無言のままくれる
手は愛に甘えて握手ばかりする
誘惑に勝って佗しい気にもなる

鳥取市 前田 一枝

仏壇のローンも終えて三回忌
人間だけのものではないぞこの地球
税務署へ申告に行く眼鏡拭く

川西市 野村 静雄

抱きついた枝が枯れるとも知らず
逃げた鳥いるかも知れぬ山に入る
仏さまにたまにコーヒー差し上げる

倉敷市 井上 富子

全くだまっただと酒すすむ
不仕合わせ美味い不味が分かり出し
亡き母の後ろ姿について行く

鳥取市 春木 圭一郎

資産家のお倉を辿って来た茶碗
冷淡な会話を聞いている遺産
傷痕は承知の上のプロポーズ

鳥取市 岩原 喬水

正直な鏡へ文句やめとこう
欠点もあって素敵な女という
自分史へ勝ったことだけゴシックで

不都合なことは小さい声で言う
五十年子供育てた皺がある
大物になり手遅れの癌で逝き

大阪新聞
土曜川柳の会

と き 8月5日(月)
午後5時半開場
同 6時半締切
ところ サンケイビル3F
(大阪・桜橋)

兼題と選者

「川」 (当日発表)
「聞く」 水上比沙子選
「舌」 高杉 鬼遊選
「悪女」 磯野いさむ選
(各題3句・悪女のみ連記)

投 句 7月末締切
62円切手3枚を同封、下記へ

〒530 大阪市北区梅田2
大阪新聞社販売部

勲章を貰い本心も齢をとる
飲みに行くネオンに愛は無いと知る
騙されて騙して世間が狭くなる

豊中市 江口明光

先輩の形見洋蘭蓄付け
山仲間息子遭難梅里山
親王の怨は深く鎌倉宮(太平記の旅)

京都市 渡辺圭坊

聞き流す余裕を謀る耳掃除
余裕など無いけど夢は放さない
春の犬つながれたまま欠伸する

島根県 加本義良

昔話を煮詰めて母が古い始め
土壇場の決め手は母の胸にある
ハネムーン戻れば別居きり出され

和歌山市 北山好笑

第43回 西日本川柳大会

と き 9月1日(日)午前8時半開場
ところ 岡山県久米南町「中央公民館」
兼 題 (各題2句)

「財布」 泉 比呂史選
「踊る」 河内 天笑選
「男」 貞岡信太郎選
「数」 土居 哲秋選
「動く」 三崎 規正選
「青」 八木 千代選

○席題 1題 特別題 1題

会 費 2000円(記念品・昼食・発表誌)
※兼題締切11時、席題締切11時半

投 句 投句料1000円を添え、8月25日
までに、岡山県久米郡久米南
町下弓削 弓削川柳社へ

主 催 弓削川柳社

ふれあいの祭典'91

川柳祭作品募集

作 品 3題・各1句(未発表作品)
題と選者 (1題3人共選)

「米」 橋本衛門七
小川 惣郎 伊佐次無成
「像」 伊東静夢
池田南岳 中野文擴
「娘」 鳥本 泰
春城武庫坊 和田光代
2次選者 去来川巨城 小松原爽介
黒川紫香 藤本静港子
平山繁夫

応募料 1000円(定価小為替)

締 切 8月31日

応募先 加西市北条町横尾514

加西市役所 川柳祭係

自選集

久家代仕男

児島与呂志

息子等よ若葉あんなに燃えている
二十年妻と旅したことが無い
毒づいた君といちばんいい仲に
少しくらい馬鹿にならねば身が持たぬ
脳軟化 空気枕が軽くなる

黒川紫香

月原宵明

ご先祖の話などして甘酒屋
はやばやと朝顔の種送られる
街頭で立見をしとく熱戦譜(千代敗れる日)
手掬いで飲むとおいしい山の水
二、三行読むと眠たくなる床よ

工藤甲吉

藤村ノ女

大騒ぎして島の名を書いただけ
センセイは何んのセンセイカト訊かれ
ボケてたまるかとジョギングしています
昼飯は死なないほどにして済ませ
同姓同名にこだわる死亡欄

生きざまを振り返らせる万華鏡
歳のせい一期一会が深くなる
やすらぎを夫婦で知っている墓参
お隣の洗濯気になるお人好し
風の色ゆつくり流れて夏を告げ
大根の味が判ってきて弱気
蒸しタオルでふさぎ床屋が話しかけ
赤い爪 女上手に蟹を食べ
嫁の手から落ちる茶碗の派手な音
咳すれば咳で答えて老い二人
いじらしい亡娘と出合う日記読む
走馬灯くるくる消えない亡娘の姿
逆縁に耐える絆の花手桶
童話読む孫との絆深めつつ
ひとりではないと鏡が言うてくれ

本田 恵二朗

孫達も働き蜂を真似だした
香焚けば写経の筆が軽くなり
横車上手に押し合い座が円い
碁盤にらむ時だけこらぬ肩を持ち
大杯を回し呑みする米寿の宴

辻 白溪子

コーヒーが嫌いでムードのない男
君なればどうする相手の方が上
無人駅かけたい電話がそばに無い
古雑誌置いて診察待たされる
ラブレター貰うが出した事がない

八木 千代

湖面にも波なんとなく生き直す
椿谷の椿へ溺死したくなる
仮の世のまばたきほどのかくれんぼ
みぞおちの縄目も後遺症らしい
恋文はポストの外に落すべし

大矢 十郎

故郷の票はあなたの診断書
儲けたい本音 遣いたい本心
子養い いいえあなたに苦労した
またトイレ妻何気なく身構える
印鑑へはずむ為替と宅急便

水粉 千翁

報いたき古巢に命懸さねば
分け合える出会いを渡る虹の橋
腹いせという拳骨で割れぬ石
詩を濡らす小雨ときめくまま光り
松園の描く内踏みの下駄の音

野村 太茂津

鬼笑う話し昂り泣くだろう
城自慢禄高五十五万五千石
海青しほかに不満はないという
木登りもできぬ子がいる日の嘆き
無念無想 紙屑籠に盛ってある

波多野 五楽庵

山頭火 髪の乱れを如何にせん
宗達か世阿弥か月の花びらか
ほおじろの名前が出ない庭の下駄
閑伽桶を菜の花にして歩くべし
痛ましや不随の箸が揺れすぎる

金井 文秋

十程上の元気な人が理想像
他人事やない死んだのは同い年
根性がないから愚痴になってくる
若い頃はもてたでしょううれしがり
素寒貧やのによく来る銀行屋

小林由多香

叱られた足公園に向いている
腹一杯たべて口紅塗りなおす
がむしゃらに攻めると地雷埋めてある
エケケツト知ってはいるが邪魔くさい
耳に栓してひとときをバカになり

岩本雀踊子

六法を開いて探すぜニ儲け
人情が退化している寒い街
白すぎる紙に嘘が書けなんだ
遮断機がおりて少し気が変わり
花手桶 酒乱の父は赦せない

野田素身郎

初対面 話題とぎれて眼鏡拭く
懸命に三本足の犬走る
メーデーのデモ行進もなく平和
年金暮らしの肌着ここにもピンホール
健康な卒寿の母の高軒

正本水客

手ぶらで来た国賓へさくら咲く(大統領初来日)
指切りげんまん互いに嘘は言わんとこ
共同宣言 手土産のない策を練る
つつじのトンネル初夏を追いこす深い色(京長岡錦水亭)
土のかわかぬ間のたけのこの香に出合う

遠山可住

年代がいつしよで同じ涙持つ
記念碑へひとりになった杖をつき
むかしむかしが少しいばった炭火焼き
気がばりがいらぬ気安い並サイズ
蘊蓄の文字が略字を淋しがり

松川杜的

銘柄は言わず一合で足る余生
お経あげる母卒寿の声でなし
友情のほのほの咲いた金魚草
あれからの潮騒までが不倫めく
ありがたい事に手足がまだ動く

藤井明朗

看護婦は神さま病床にいて感謝
日本人カード暮らしの浪費癖
葉桜の毛虫ふたりへ妬いて落ち
話まだ明日へあずけて酒にする
迷惑を承知で贈る匂み紙

河内天笑

いつごろからか父の軒を越えている
生れ育った町がわたしの港です
まだ不良少年のこっている父だ
本音しか喋らぬ影をもて余し
谷底に落ちてでも駄洒落とばします

スタスタと歩いて山を満喫する
分け入りてせつなきまでの緑いろ
望郷よ山の煙へ佇ちつくす
たまに来てこそ 山里の静けさも
遠い日に繋がっているレール路

子を楯に離婚訴訟は卑怯なり
男なら泣くのはおよしフルムーン
化けて出るほどの情けの恋ならん
どの亀も浄土なりしや寺の池
念仏のかわりに聴いている炎歌

故郷の土が嬉しい土踏まず
才能の乏しさ饒舌まぎらわせ
開発のいじめに怒る土石流
無精髭縁起かついだ訳でなし
下積みの長さ物知りとも言われ

京静か山ふとところに眠る寺
(洛北散歩)
伝説は眉つばものの血天井
先客も黙って見ている枯山水
京のはずれに遊女ゆかりの常照寺
光悦の詩魂にけむる鷹ヶ峰

小
出
智
子

高
杉
鬼
遊

西
田
柳
宏
子

阿
萬
萬
的

第10回 夜市川柳募集

	題	選者	締切
第1回	「顔」	小島蘭幸	6月末
第2回	「流れる」	谷垣史好	7月末
第3回	「街」	石部明	8月末
第4回	「友」	高杉鬼遊	9月末
第5回	「泡」	八木千代	10月末
第6回	「ひらく」	森本夷一郎	11月末
第7回	「皿」	小出智子	12月末
第8回	「魚」	金築雨学	1月末
第9回	「己」	森中恵美子	2月末
第10回	「名前」	中尾藻介	3月末
第11回	「続く」	橘高薫風	4月末
最終回	「芸」	西尾葉	5月末

投句先 〒593 堺市堀上緑町2-9-2

河内天笑方

堺川柳会

平成3年度川柳塔勉強会

—越中八尾と宇奈月温泉

と き	9月24日(火)～26日(木)
集 合	午前9時 新大阪駅団体待合室
日 程	(2泊3日)
第1日	新大阪—城端—五箇山— 越中八尾(泊)
第2日	越中八尾—魚津—黒部— 樺月—宇奈月温泉(泊)
第3日	宇奈月—金沢—新大阪
勉強会	9月25日(魚津)
経 費	約5万円(交通・宿泊・食費ほか)
定 員	40名(先着順)
締 切	7月末日
申込先	川柳塔社事務所または 黒川紫香・川島薫云児へ

主 催 川 柳 塔 社

— 同人 吟

秀句鑑賞

— 六月号から

小島 蘭 幸

逆縁を思う紋白蝶がとぶ

野村 京子

れんげ菜の花、美しい風景の中をひらひらと舞う一匹の紋白蝶は、まるで亡き子が帰ってきているようだ。だんだん遠くなつてゆく風景の中で今は亡き子が遊んでいる。いつまでもいつまでも……

母の死へ匂いが足りぬ沈丁花

都 倉 求 芽

烈しい香気を放つ沈丁花も、母を失くした深い深い哀しみの底にいる作者には、その匂いさえ届かない。感じられないのだ。沈丁花が咲くたびに母の忌が巡ってくる。

亡母は草し西日のあたる台所

谷 垣 史 好

やさしかったおおかあさん、とてもやさしかったおおかあさん。なのに理由もなく逆らったことも今では懐かしい思い出になってしまった。西日のあたる台所に一人立っている私。

減点法で見合するからまとまらぬ

西 出 楓 楽

「理想の人に巡り合うまで結婚なんてしないわ」と、周囲の声をよそに本人はいたつてのんびり構えている。好きな人がいるのかと思えばそうでもないらしい。減点法に現代の女性氣質をみることができぬ。

夫と会うひととき魔女になりきろう

田 中 亜 弥

作者はきつと茶目つ気のある女性なのだろう。魔女という凄じ言葉をもつてきていながら、この句は明るい。手紙はおろか電話もよつぽどのがない限りかけてこない仕事一筋の夫に対して「魔女になりきろう」と言っているが、元気な顔を見るといつもの明るい妻になってしまふのだ。

膝頭抱けば恩師の声がする

藤 解 静 風

恩師山内静水は、膝頭を抱いて目を閉じ、よく瞑想に耽つておられた。句会で作句する時もそうだった。今こうして、自分も膝頭を抱いてひとり静かに在りし日の師を偲ぶ時、あの「セーサーイ」という大きな呼名が聞こえてくるようだ。

うぬぼれを流してくれる雨が降る

奥 山 美 智 子

人は誰も大なり小なりうぬぼれをもつて生きている。うぬぼれるだけの強さがないと、人生という荒波を乗りきることとはできない。

そして何度も何度も挫折しながらたくましくなつてゆくのだ。それにしても、今日の雨はしつとりと私の心の中に降つてくることよ。

あのうぬぼれはどこへいつてしまったのだろう。また少し大人になった私が窓ガラスに写っている。

相撲から野球に続く春の音

荻 野 蛟 虎 狼

大相撲春場所は、貴花田ファイバーで湧きに湧き相撲ファンにはこたえられない場所となった。さて今度はプロ野球である。わがジヤイアンツは、タイガースはと、ファンの夢は広がるばかりである。妻や娘たちの冷たい視線もなんのその、今夜もビールを飲みながらナイター中継を見るご機嫌なお父さんなのです。

コップの中のいくさ皆んなで覗きこむ

正 本 水 客

中東三句の中の一句。多国籍軍の空爆の模様を執拗に映し出すテレビ、まるでコップの中のいくさのようだ。そして戦争は終わったけれど、今もお燃え続ける油田、海を破壊し続ける流出した油、平和の灯はまだまだ遠いのです。

指すもうの頃から父を越えたくて

八 木 千 代

もう一回、もう一回と父に挑戦した指すもう。父は私にとつてとても大きな目標でした。ありがと、お父さん。

白岩文衛

東野大八

「外語時代の『バイエン』こと白岩君は、

熱血漢であり、夢多き青年であった。インドネシアから復員してきて私と会った時も、その夢を捨ててはいなかった。しかし、乞われ故郷大原町の教師になってからの彼は、故山のまるい里の中でしだいに円熟し、温厚な性格になっていった。そういう彼は次は次のような句がある。

夢捨てた男の窓に四季のうた 文衛
 (大阪外国語学校誌「老朋友」田中正三)

いつだったか、彼と出会った筆者は、昔新聞で大人気の、横山隆一のマンガ「フクちゃん」に登場する好人物の「ガンさん」の風貌を心に思い描いた。「彼はインドネシア独立運動の隠れたる偉大な闘士でネ」と誰かか

ら耳にしたこの言葉に、さもありません、といささか畏敬の念と親しみを感じたことだ。

「(大阪外語)卒業後十日目の昭和17年10月1日岡山の中部四十八部隊へ入隊。やがて保定幹部候補生隊へ分遣され、木嶋、野田君らと北支の山野で毎日訓練に明け暮れた。見習士官になった時、南方軍へ転属。昭南島(シシガポール)からジャワへ至り、インドネシア防衛義勇軍(インドネシア国軍の前身)幹部教育隊教官となる。同隊の任務終了後は、防衛義勇軍の指揮官としてマズラ島で任務に就く。二十年八月終戦。部隊を解散してジャワ本島に帰ったが、インドネシアの独立闘争と、連合軍の指令とに挟まれて筆舌に尽くし難い苦労を重ねた」(同上・白岩文衛)

昭和59年9月川柳塔社主催の中国吟行の旅で六日間、彼と終始行動を共にしたのだが、筆者は彼にインドネシア独立の敢闘体験について一切、聞くことをしなかった。お互いが硝煙茫茫、戎衣の過去は半世紀の触れるに由なき忘却の彼方だったからだ。

彼の還暦記念の句文集『出会い』は、彼六十年の生涯に去来した数多くの人たちとの一期一会の川柳記録である。この本の中で、約50余頁にわたる「インドネシア紀行」は、第33回インドネシア独立記念式典に招かれた、同地における十日間の記録である。

椰子の葉茂る南溟の地で、インドネシアという異郷の青少年たちを教導した、二十歳台の白岩文衛の青春像がそこに浮き彫りにされている。かつての日の教え子たちは、みな将官級となり、キラビヤカな新興独立国を支える立派な人材に育ち、追慕と感謝の美しい瞳を輝かせ、温く熱く手を握る。

椰子の風はたちへ返ったふところへ
 カナリー樹 若い少尉を知ってたか
 風鈴よ インドネシアの胸に鳴れ
 右の文衛の彼らとの出会いの句は、感動的である。

彼は大正10年6月21日、岡山県大原町の由

緒ある讃甘神社で生育した。実父はその神官である。劍聖宮本武蔵が生誕した村とある。

「私は今日を以て三十二年間にわたる教職生活を閉じる。この三十二年間は本当に思い出多い時代であった。私は徒らに過ぎし日をふり返るまい。私は明日をみつめて生きてゆきたい。あすの日からも、その日その日の『出会い』に、一期一会のまごころを尽し、そのこころの跡を十七音字に綴りつづけてゆきたい」（『出会い』あとがき・白岩文衛）。

この句文集『出会い』は、B6判二百七十頁の瀟洒な本で、昭和57年3月の刊行。「人生の思い出とは、所詮、出会いと別れのそれである。（中略）ふとしたことから川柳の世界に魅せられて今年で十五年になる。その間に詠み残した句は私自身の性そのまま、きこちなく、曲がないが、その一句一句に思い出があり、十五年間の私の息の痕をどめている。教師という私の本職の面でも、生徒たちや、彼らをとりに巻く社会を見る私の眼はこの川柳との出会いによって、ずいぶん広げられ、深められたとつくづく感謝する私である」（同上）。

「昭和54年1月、文衛さんを主幹に迎えて大原川柳もあの濃厚な指導と弛まない御努力

で今日、句報百部近く発行する程に成長したことは全く有難い事である。その間、地元婦人会のレクリエーションとして始まった川柳会、グルマ倶楽部の育成とグループの成長を記録した句集『川柳パス』や『びまわり日記』の刊行等、多くの功績を残された。また対外的にもあの溢れる如き温情を慕う知己の多い事は有名で、この事は昭和57年3月発刊の句文集『出会い』を読んでもよくわかる。いい人であった」（『川柳塔』悼文・土居耕花）。

昭和61年1月1日肝臓ガンのため死去、64歳であった。「思えば君と僕とは、昭和15年に大阪外語に入学した時からの親友で、若い頃の君は熱血漢であり、ロマンチストでもあった。お互いに将来への夢を語り合ったものだが、君は乞われて故郷の中学校に職を奉じ、32年間にわたってひたすら教師としての道を歩んだ。そして縁あって川柳の道に入り、岡山の川柳界にその人ありと知られ、昭和57年春、教職を退くにあたって句文集『出会い』を刊行した。このことがまた、あらためて君と僕とが川柳という太い絆で結ばれる契機となった。

君のかつての情熱は、故山の里の中で円熟し、当時、病床にあった妻と僕とは、あたた

かさときびしさがにじみ出た君の句に魅せられた。僕たち夫婦は、療養と看護の毎日を川柳であけくれ、少しまとまると君に送った。そして時折り訪ねてくれる君に添削と指導をうけるのが大きな励ましとなった。君は僕たちを川柳にみちびいてくれた恩人であり、かつ最初の師でもあった」（『川柳塔』悼文・田中正坊）。

川柳塔同人・参事大原川柳社主幹白岩文衛句碑建立は昭和61年6月29日。文衛18年の句業の顕彰碑だ。

白百合の白さ心の紋とする 文衛の故人の面影とおりの豪快な句碑の除幕式が、彼生誕の地、讃甘神社に隣接する白岩家の庭で催された。これには碑面に刻まれた文字の筆をとった西尾菜川柳塔社主幹や親交のあった橋高薫風氏をはじめ、故人ゆかりの人たちが多数、碑前に集い、記念句会の温かい盛儀をもった。親友田中正坊も兼題「岩」の選に当り、感慨深く故人を偲んだのであった。

パレットにまだ赤があり青があり 文衛
天職と思ふチョークの染みた服 〃
もう後へ戻れぬ石を積んでゆく 〃
雲の峰に書けばでっかい僕の句碑 〃

▼次号は「山内静水」

柳籠裏三篇研究（八丁）

あり、金品の受渡しは格子の間から行われたという。

勸学屋腕をまくって銭をつき

九四

勸学屋人と付き合いせぬつもり

明四宮²

佐藤〓賛。吉原妓楼大籬の格子とほとんど同じであつたよつた。

岡田〓同。

133 いろ／＼の居さまハ外科の玄闈也

青木〓外科の玄闈は待合室。本道（内科）に對して患部も傷もさまざまだから、座つた様子もいろいろで、中には横に寝そべつた者も居る。外科の待ち合い風景。

痛い事無いと外科どの針を出し
そいでとりますと外科どの平気也
一〇一七

岡田〓賛。

一七四〇

134 つんぼうで釈迦のお弟子が喉を干シ

青木〓「つんぼう」はつんばさじきの略称。舞台正面の大向うの一番遠い所で、役者の口跡もよく聞こえないところ。

主題句は、僧侶が芝居見物に出掛けたが、つんば棧敷で役者のせりふを聞き取ること、芝居の筋もよく分からないのか、大きな

131 紅葉にはうどん柳に田にし也

青木〓紅葉は真間山弘法寺で、うどんは行徳船場にあつた名物笹屋うどん。

紅葉よりうどんをほめるげびた奴

一七一〇

うどんより外にしあんの無い紅葉

拾一²⁰

柳は梅柳山木母寺の略称。たにしは木母寺境内にある茶屋にて食させたものか。

主題句は、名所と食物を結び付けただけの句。

佐藤〓賛。ただし、木母寺境内で「たにし料理」を食させたという話はきかぬ。だが、たにしは向島の名物で、

たにしの田楽喰ながら竹屋ア引

一二五四〇

とあるように、木母寺（柳）帰りが、墨田土手の茶店でたにしの田楽を肴に一杯きこしめすことはあつたよつた。「竹屋ア」は勿論竹屋の渡の船頭に舟を回せと呼ぶのである。

岡田〓タニシの田楽。おそらくクシに刺し、煮込み田楽（今のオテン風）にしたものか。

あるいは味噌田楽風に焼いてタレを付けたものか。この点はもう少し研究の余地がある。

132 骨斗カの障子はめとく勸学屋

青木〓下谷池の端、錦袋田勸学屋。この見世は間口が格子造りで、他に比較して独特であつた。看板に「萬病錦袋田、勸学屋大助」と

あくびばっかり。

佐藤「釈迦のお弟子」は「羅漢台」の暗示と思われる。そうだとすると、つんぼさじきとの関係はどうなるか。疊棧敷はいわゆる大向うのことで、羅漢台とは、位置が両極端になっている。そこで駄労働ながら、ここである「釈迦の弟子」は芝居通を以て任じる羅漢台の常連で、当日は来場が遅れたかして羅漢台が満員となり、止むなく疊棧敷へ回った客ではなからうか。「喉を干し」は「口を開けた形」つまり「欠伸」ではなく、声を枯らすことと思う。いわゆる大向うの掛声である。

つんぼうも仏も多い大当り

宮二36

七久保「釈迦のお弟子は羅漢台を表わすものではなく、単につんぼ棧敷の混雑ぶりを羅漢に見立てただけのこと。

「喉を干し」は、日葡辞書に「ノドロホス」とあり、飲食物をとらずに空にすることです。

したがって、主題句はつんぼ棧敷の客は或は各い客だから、節約して飲まず食わずに喉をからからにして観劇している様子を詠じたもの。

岡田「諸説いろいろ出たが、それだけに問題が残る句。

135 いらぬ事下女串柿を式本まけ

青木「忙しい年の市にかりだされた下女。店主が沢山の買い物をしてくれた客に「串柿をサービスしてあげな」というとに対し、二本の串柿を渡す。飾り用の串柿は一本あれば事が足りるのに、二本とはいらぬサービスであるという事か。

佐藤「醜女の深情けではないが、下女が思う男に実意を見せるのであろう。串柿は安かんざしのこと、その形が串柿に似ているところからの洒落と思われる。座五の「式本まけ」は「式本曲げ」で入質のこと、銀ながしの安かんざしを二本ばかり入質したところで、いくらも借りられまい。下女にとつては、大いに奮発したつもりだろうが、これは全くいらぬ事だ、こんなことで恩に着せられちゃかなわぬの気持ち、句の裏にあるのではないだろうか。

岡田「佐藤氏説、ご明解。おみごとな新説です。小生も教えられました。

136 淀の商人京談でぞんざへる

青木「食らはんか舟を詠んだ句。食らはんか舟は江戸時代、伏見、大阪間を通った淀川上下の三十石船の客船に、飲食物を押し売りに

きた船。「飯くらわんか」など、その言葉が横柄であった。大阪城攻めの時、徳川家康を助けた功によって、この特許を与えられたのだという。

京言葉は優しいのが通り相場なのに、淀川の「食らはんか舟」は横柄でぞんざいであるの意。

へつらわぬあきんどの来る淀の船

一五32

佐藤「贊。

くらわんか慮外者めと田舎武士

二二704

というわけで、どうも言葉が乱暴に聞こえたりしい。

岩田「贊。但し「ぞんざへる」は、「ぞんざいだ」を動詞化した「ぞんざい・る」の転かと思えます。ともあれ、「ぞんざへる」は動作・態度についての言葉らしく、「京言葉でぞんざいに喋る」というのではなく、「京言葉を使って横柄な態度で騒ぐ」というような意味かと思えます。

岡田「△ぞんざへる▽は岩田説のようにフザケル意。

きやらばく忘年句会 12月1日(日)午前11時から米子駅前米吾ビル6Fで開きます。

同人特集

夫婦百句

一九八八—一九九〇年
同人吟から抄出 編集部

黙秘権の行使ではなし老夫婦
福寿草 松に従いそろかしこ

麻生 路郎
麻生 霞乃

豊明殿 妻と伺候の菊日和
以心伝心 妻も同んなじ答だす
共白髪もう偽りの無い夫婦
忘れない文字でのひらに妻と書く
盃にこぼす話は妻が受け
病む夫婦 十葉軒にゆれる秋
夫の影にまつわりついて行く余生
僕よりも妻は長生きする家系
草矢飛ばして私を呼んだのは夫か
大正を大事に抱いて妻と往く
うつらうつらと夫の海に漂うて

西尾 朧
松川 杜的
松川 芳子
堀江 正朗
堀江 芳子
浜本 義美
浜本 ちよ
林 荒介
林 瑞枝
春城 年代

悪いこと言うたかいなと覗き込み
姉弟に見られて妻がふてくされ
花うたげ妻の疲れは本物だ
笑顔千両 晴れて夫婦の独楽まわる
性格が不一致だから夫婦です
夫婦の夢をちさい袋に入れ替える
世直しへ妻を連れ出す投票日
女房に脱ぎ慣れている兜かな
適当にどうぞと妻が拗ねて見せ
夫婦して明け暮れ何か探してる
恙なくまだまだ夫婦しています

河内 天笑
河内 月子
中原 諷人
中原みさ子
広本 文子
小出 智子
高杉 鬼遊
有働 芳仙
久家代仕男
江口 度
土橋 螢

ガムに似て味はいつしか無き夫婦
 百点の妻が時々魔女に見える
 午歳へ戌歳の妻よく吠える
 フルムーン財布は妻に預けとく
 守って下さい玄関におく亡夫の靴
 半分はもののはずみできた夫婦
 モガモボで又生き直す老夫婦
 倦怠期 夫との会話多くなり
 大袈裟に転んで妻を振り向かす
 妻の留守 一合よけい飲んで寝る
 白旗を振りつ振られつ夫婦なり
 夫婦相和しコンタクト探し出す
 ときめきもなく妻と飲むレモンテイー
 晩学の夫婦は辞書を別に持ち
 彼岸花 亡妻に聞きたいことばかり
 夫婦仲とりもっている 一行詩
 段違い平行棒の夫婦愛
 酒ぐせが出るころ妻が横に居る
 とんちんかん夫婦の会話通じ合う
 痛い痛いと言いに聞こえるように言う

長谷川春蘭	さわやかな亡夫の電波よ秋の空	沢田 千春
石川侃流洞	夫婦風ときどき糸がもつれます	高須賀金太
櫻谷 寿馬	風百態 夫婦茶碗の古い疵	吉川 寿美
小林 妻子	老夫婦 どっちからともなく眠る	松本 忠三
松本 文子	金婚へ婦唱夫随でたどりつき	奥谷 弘朗
中川 滋雀	睦まじく夫婦別々の事想う	田中紀美代
吉田あずき	金婚式 互いに禁句持ちつつけ	高橋千万子
平田 実男	妻の忌へたつぶり水を供えたり	工藤 甲吉
北野 久子	はるかなる思い出哀し夫婦箸	藤村 乙女
越智 一水	逆らわぬ妻に手綱を握られる	山田 高夫
西口いわゑ	金婚や入江静かに帆を畳む	柿花紀美女
竹内 紫鏑	せめて花一杯に妻の七回忌	田中 正坊
安平次弘道	次の世も一緒に妻も酔うてくる	鷺見 章
藤解 静風	種切れの夫婦がまんが読んでいる	小野 克枝
吉岡 美房	初恋の頃はマリアに見えた妻	波多野五楽庵
恒松 町紅	幸せな夫婦が出来る口喧嘩	児島与呂志
都倉 求芽	憎みあう日もありました共白髪	古野 ひで
遠山 可住	妻が最高 邪魔くさいからそうしとく	榎本 露児
茂見よ志子	勝率八割 夫はつねに組み易し	桜井 千秀
小島 蘭幸	聞いているのですかと妻に叱られる	矢野 佳雲

真珠婚 時効をひとつ抱いている
 添うてからも好きだと言つたことがない
 よろめいて笑い合うかな夫婦かな
 綻びを継いだり剥いだりまだ夫婦
 銀婚の夜 肉じゃがの味を分け
 銀婚のキヤリアさ妻の変化球
 すぐ馬鹿になれる夫を尊敬す
 新婦もう音痴たすけるマイク持つ
 血を流す喧嘩もなかったなあお前
 落日へ影が大きくなる夫婦
 田植すんだ処で妻と旅に出る
 早よ逝かな亡夫に浮気の虫がつく
 照れくさい言葉で妻を弾ませる
 大胆妻と小胆亭主で平和です
 桶となる妻よ君こそわが命
 独走へ亡夫が伴走してくれる
 眼鏡拭き拭き妻の叱言を聞いている
 とんとんと来たわけでなし夫婦駒
 ことごとく夫を貶す愛しよう

玉置 重人
 小池しげお
 水粉 千翁
 林野 甦光
 仁部 四郎
 森井 善居
 神夏磯典子
 石垣 花子
 越村 枯梢
 牛尾 緑良
 宮口 笛生
 福本 英子
 新家 完司
 本田恵二朗
 江城 修史
 赤川 菊野
 阿萬 萬的
 稲葉 冬葉
 林 はつ絵

一遍は怒鳴つて妻の言う通り
 ああ夫婦おんなじ時に胃が痛む
 連休は結局残る老夫婦
 大内山の薫風に会う凡夫婦
 だんだんに家具の一部になる夫婦
 生者必滅 妻を失う日が怖い
 泥舟の上で夫婦のドラマ書く
 五センチのずれがつづいている夫婦
 サクラサクラ今日は夫と手をつなぐ
 倦怠期 妻がスパイスきかせてる
 芋粥が好きなの夫婦で今日の雪
 じつくりといらちの夫についてゆく
 悪いのはわたし夫婦の溝埋まる
 おいと呼ぶ視角に妻がいてくれる
 軽く病む妻とママゴトごっこする
 夫婦茶碗こだわり少し溜めている
 後を押す亡妻の影あり余生とや
 お互いに無いもの足して夫婦です
 勸進能これは夫婦で出かけよう

内海 幸生
 奥田みつ子
 原 さよ子
 門谷たず子
 西出 楓楽
 小西 雄々
 両川 洋々
 三宅 保州
 宮崎シマ子
 井上 白峰
 田口 虹汀
 安藤寿美子
 吉岡きみえ
 川島諷云児
 岩本雀踊子
 正本 水客
 黒川 紫香
 西田柳宏子
 橋高 薫風

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、、、ろ

(7)

橘 高 薫 風

俺に似よ俺に似るなと子を思い 路郎
「この一句を生むために路郎は生まれてきた」とまで賞揚したのは後藤梅志氏である。この句は大正15年7月11日鳴尾の遅日荘（路郎居）で開かれた第五回柳談会で発表になった（私事ながら、この日の昼前に筆者は生まれた）。柳談会雑誌を見ると、楳元紋次氏はじめ十五名ほどの出席者があり、林田馬行氏が、「植物染料」についての話をされた。

八点句

重荷下ろした父の死顔

ひろし

五点句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

路郎

逢ふて戻つて父母に手をつく

松郎

四点句

欺しても欺しても男生きてる

英豆

の句が並び、以下三点二点一点の句が続く。柳談会は、この年の二月に第一回が開かれている。メンバーの一人が専門的な話をしたあと、雑詠数句を課して相互に句の批判研究が行われた。記録に「夜に入ってから頗ぶる

無遠慮な、しかも熱烈な句評を交換してお互いに得る所が多かった」とある。従来型の破った忌憚なき批評を交わしたので「多少でも遠慮をしたり、個人的に不愉快さをあとに残すような人々の間には不適當であると思つた。十二時頃まで話し込んでいた。」

今という研究会のはしりで、路郎のことだから相当、峻厳な批評をしたに違いない。

「俺に似よ」の句は、京都の川柳人が間違つて紹介したのか、「俺に似よ俺に似るなと子を育て」と記憶する人が沢山おられる。新京都社の堀豊次氏も私に次のように言われたことがあった。

「今は、子を思いになっているけれど、発表されたときは、子を育てだった。これは私がしつかり覚えているので。」

しかし、これは豊次氏の思い違いで、川柳雑誌第三卷第八号（第三十一号）に、「子を思ひ」と掲載されている。

さて、路郎はこのようなことがあつてか、文章に句を引用するのも慎重で、編集部員

にも常に厳格な指示を与えていた。必ず句集で確認すること、作者本人に訊くことを省略して記憶のままに書かぬこと、話さぬことだ。近々私の気付いたのに、

菊活けてひととき慾を忘れたり（けり）^x

清水 白柳

父の日の父は木曾路の旅にあり

（父の日に）^x 本多 柳志

揚つても揚つても雲雀に空がある

（雲雀には） 小浜 牧人

などがあり、これら助詞・助動詞のたつた一文字が大切なので、その一字に作者の個性が躍動している場合が多い。

他に大正15年の路郎の作品の目ぼしいのは、

二階を降りてどこへ行く身ぞ

すべりんこ親は涼しいとこで待ち

見渡すとユダのころをみんな持ち

で、すべりんこの句は、路郎の第一句碑（木碑）となり、戦後中島小児科診療所庭内に建つたが老朽化して今はない。

第七回柳談会記録に、「黒木英豆氏は、いかなる場合でも英豆という署名によつて句を鑑賞して貰いたいと鋭意強調せられていた」とある。路郎のいう作品の質的向上と個性派の輩出を願う指導が暫時浸透してゆく思いがする。

水煙抄

黒川紫香選

富山県 高島 五月

ミヨちゃんの虜になったボクだった
ふるさとの厠改築した便り
竹槍は幻でした草いきれ
伝言板に別れた人の名を見つけ
方言がもつれ話を解きほぐす

松山市 宮尾 みのり

セピア色の真ん中あたりナルシスト
ふっきて女くつきり紅を描く
男勝りという風評は知ってても
城のある町ゆつたりと土地訛り
ヒロインにはなれぬが笑い声がよし
看護婦と医者のお話が温かい
疲れたら菜園に来てひとり言
花いじり時は止ったままでいる
ワイーリング合わぬ人には無口です
改良花あちらの名前で帰国する

島根県 梶谷 一葉

兵庫県 森脇 和子

音沙汰の無い日リズムが少しずれ
通じ合う心へうまく笛が吹け
助手席にいる気楽さよ雨の坂
欺し合う影絵に迷いの日がつづく
向き合ってさぐりを入れる苦い過去

富田林市 池 森子

姉想いのかたちに秋も冬も過ぎ
深いところでわたし一人にあるリズム
噂が肩を叩いて風向きが変わる
一本のバラと女は満ちている
ひたすらに帰り待ってる木の根っこ
タンポポが翔び立つ訳を知ってるかい
遠まわりするときめきの刻がある
わがままが過ぎて世間に壁造る
小さい庭小さい花見る指めがね
雨が光って賃上げ闘争静かなり

佐賀県 寺中 三枝子

名古屋市 藤井高子

澄む水へその身預けて水中花
向日葵につられ陽気なりズム踏む
毛を染めて六十路の戯画に住むカラス
ペンネーム老いの血潮もまだ若い
白くなる日とてあろうに髭威張る

広島市 流 奈美子

ミルクティ―少女の夢が浮いている
星くずを拾い孫への千一夜
母の待つ港だ鳩が飛んでいる
能面になれぬ鼓動を抱いている
肩パット外しおんなに戻る部屋

熊本県 大川幸子

喉元を過ぎて忘れる単純さ
ふくれてる財布は一円玉の所為
ローン済みやつとピアノの音が冴える
のし紙を替えたと知らぬお中元
食べ方がめつ法うまい魚好き

砂川市 大橋政良

目の動き一つにさえも気をつかう
日めくりをめくる楽しい木の芽どき
足元に火がつき昼寝しておれぬ
あきらめのつくまで背中見ていよう
のびる芽にみんな自分の天がある

鳥取県 大角正道

風車回す愉快的な風が吹く
スプーンで溶かす私のわだかまり
峠から涙流したことがある
さわやかな朝は私のためにくる
電話する顔で相手がわかりそう

鳥取県 大角幸代

幸せの星を写した水鏡
牧場からまあある風がやってくる
輪の外にいる友だから温かい
おだやかな笑顔につつまれて生きる
涙を流すたびに人間らしくなる

尼崎市 的場十四郎

玄関を出てから長い立話
喉もとの熱さで男起ち上る
少年の鼓笛五月の空を突く
いい女と出合い人生弾みだす
蝶ネクタイつけて初夏の風にする

尼崎市 児玉歌子

見せしめに投げる男の遊び球
勇気ある一言があるいい仲間
銀婚の坂順調に登り切る
札ピラを切って言い訳してみる
酔った日の父に出て来る浪費癖

静岡市 沢田 きん

万病に効く薬草を煎じてる
美しい別れへ握る手の温み
格言へうなずく今日のカレンダー
真似ごとで済ませる喜寿の内祝い
美しい嘘なら許すことにする

藤井寺市 高田 美代子

流される雑魚いっぴきに気付かず
羽根ぶとん天女になった夢の中
腰据えて吞めば女に底がない
頼りない人だと思ふ破れ傘
他所ごとを考えていた馬の脚

尼崎市 森 安 夢之助

器から飛び出し海の広さ知る
玄関の鍵喫茶店で喋ってる
風に乗りに出癖がついた母の下駄
撫でられて黙ってしまった犬になる
父の橋渡る気になり歎を持つ

久留米市 鶴 久 百万両

魔女にだつて真面目に逢えばえじやないか
禁断の木の実を摘んだ罪を悔い
父逝きていつかガードも甘くなる
俺の前で妻に耳うちとは無礼
春を惜しむ男に闇が深くなる

尼崎市 尾宮 弘治

ワープロでチラシのような子の手紙
仲人をしたのが椅子を追いかける
私にも老母居るとナース言う
クレヨンで描いたむかしの絵を燃やす

大阪市 亀井 円女

盲導犬の温い瞳に神を見た
育つ孫見ては死ねないなと思う
野良猫が餌の時間を覚えてる
失札ですが人が転ぶと面白い

米子市 足立 由美子

手元から少し離れて子を見詰め
鍰広の帽子で直射させている
旅立ちに似合う帽子を買いに行く
少し場所移して案を練り直す

八尾市 向井 しづ子

連休に浮かれ遊んで古いぬ蝶
みやこわすれほめてもらって皆あげる
春や春トップのしわがめだつ春
流行にもうジーパンと決めた女

尼崎市 野瀬 昌子

顔色で母は黙って茶を入れる
里の母少し重荷になる時も
春を待つ赤い靴を買っている
スポーツに縁は薄いが相撲好き

松山市 白石春嶺

いい部下を掌握してゐるめくら判
さつそうと親をせびりに来る新車
通じ合うしぐさ巧みにこなす手話
素晴らしい眺めガイドの掌に乗せる

摂津市 木下道子

究極の味はうどんのつゆでっせ
警察の前で渋滞ひどくなり
豆のつる緑の風とよく遊ぶ
ほどほどに驚き札を尽くす仲

出雲市 岸桂子

無口でも心が光るから目立つ
方円に戻らぬ言葉吐いていた
やすらぎを求めてくぐる仁王門
不揃いな香り集めた入社式

和歌山市 玉置当代

曇りガラス拭けば視界が広がる
予防線張って心に距離をおく
春うららデートに靴も弾んでる
仏事ごとでなければ楽し旅なのに

広島市 森田文

医学書を読めばどれにも当てはまり
言うことを一日伸ばし花を見る
通夜の席数珠の自慢をする他人
風を着て単車で走る島巡り

富山市 大西桂子

時々夫おだてる知恵袋
げんまんの小指が嘘に馴れてくる
小石ひとつ握ったままの落ち椿
子へ返事言葉を選ぶ親となる

鳥取県 小西五十鈴

午後六時お寺の鐘で子等帰る
辿りたい亡夫との距離が遠くなる
寺の門くぐり仏の顔になり
雷をときどき落し父達者

大阪市 新井泰子

指メガネどんな明日が見えますか
当番の日に八重桜たんと散る
冷凍の秋刀魚焼こうか夫と居て
どん尻の扶養家族の空いばり

熊本県 岩切康子

葱坊主蜂の簪つけ晴れる
花佗し面会謝絶の扉前
いつまでも姉の意識を持たされる
樟大樹二本が消えてビル高し

枚方市 山崎彩子

私の眼を惹くように舞う揚羽
リラの香は媚薬か心落ち着かず
短命な五月の庭の花ごよみ
飼猫もせつせと夏毛に衣替え

酒田市 永澤裕子
金銭を言えば絆が脆くなり
前向きの子を追いかける老いの愚痴

東の間の夏に浴衣を縫う予約
地藏尊何を願うか缶ビール

鳥取県 西川和子

楽しくて初対面とは思えない

僕がいる心配するなと息子言い

共稼ぎ手抜き料理に馴らされる

なんにでも触れて可愛い知恵が付き

尼崎市 鈴木良征

医療費のアップにアブアブする家計

引出しに鬼灯一つ熟れている

反省のポーズで稼ぐ猿回し

念入れて立ち読みをする眼鏡拭く

鳥取県 山本正光

一言を言ってしまつて悔いしきり

花好きな癖に買つてはすぐ枯らす

喧嘩するたびに十日は口きかぬ

観光のコースの寺で景気よい

旭川市 朝倉大柏

幸福駅へ行く風船と思ひ込み

方舟が今日の地球にほしくなる

父よりも出来のいい子を父叱り

怒鳴り声で父の応援歌が届く

鳥取県 鈴木公弘
深呼吸しながら使う五十肩
自販機の冷たい音に慣れてきた
保険屋と万に一つの話する
ポケットの眼鏡を探すお父さん

東子市 小山悠泉
トレードに出し度い妻の口答え
清貧へ肩よせ合うて生きている
愛のハードル越えて少女が脱皮する
本心が見える眼鏡をさがさねば

岐阜市 渡辺杏村

氷屋の旗にフラリと引き返す

求人難プールのバイト頼まれる

デパートの涼しい場所で孫の守り

お盆には帰つて来いと母の文

鳥取県 池田寿美子

パソコンでパツと余命がわかるとは

風来坊が憎まれ役を引受ける

中途半端が威張っている寂しいね

葉桜に宇治の流れと語り合う

熊本県 高野宵草

看護婦の優しさに似ぬ注射針

何回も切符たしかめフルムーン

昭和なら今年は何年忌をかぞえ

朝刊に話題仕入れて靴を履く

鳥取県 石尾 かつ乃

孫の画く未来の町へ連れ出され
平均を出して人並だと思ひ
背を向けた女が気になる満員車
幾度の峠を越えた父の靴

静岡市 宇佐美 寿美

亡母に似た口にやさしいおみおつけ
茶畑の光る緑にむせかえる
団らんの笑いが好きな茶の間の灯
キッチンがだんだん嫁の座にとけて

姫路市 谷 清流

恋の詩下さい花のお返しに
一の矢を外してからの自己嫌悪
筒抜けの批判己を練り直す
ななめから来る矢が当る運不運

鳥取市 大坪 天涯

正体は不明やさしい声がする
勝算を一人で決めていた不覚
酒を抜くことを昼間は考へる
働いている余裕です子と遊ぶ

姫路市 松本 一郎

口だけが達者頑固に老い生きる
老妻と余白を染める彩を選ぶ
温情の更生論す猶予刑
呆け防止子がワープロを買ってくれ

尼崎市 木下 義嗣

子を抱いていつか眠った春の汽車
軍隊の経験があり早い飯
バスガイド詳しい話は本を見る
期待だけ持たせる孫の学習塾

鳴門市 八木 芳水

約束を済ませぬままに桜散る
待ち呆けもあり青春のひとつこま
童心に帰ると空がすばらしい
混浴の記憶を辿る二日酔い

岡山市 福原 悦子

五十坂越えて夫婦の歩が揃い
亀の歩で一途な愛に生きている
美しく嘘を飾ったのもいくさ
母の日にカーネーションが届く幸

泉佐野市 真崎 浪速子

上とろに限る待つてるカウンタ
走る子もいる紙芝居なつかしい
長者三代続かず浪費続ける子
口答え掌中の玉持て余し

尼崎市 山田 保蔵

タンポポが踏まれる場所に咲いている
豪勢な座敷に読めぬ軸がある
長旅を終えて寛ぐ四畳半
腹割って話して見たが通じない

尼崎市 明壁敏之

花の時季休日ごとに雨となる
許されぬ女と逢う日雨になる
手料理の後で薬をのまされる
公園の木陰で休む万歩計

兵庫県 奥野テル

つかの間の夢消えないでシャボン玉
純情な鬼で童話の中に生き
招かざる客が火種を置いてゆく
一人には独りのドラマ庭の草

寝屋川市 宮崎菜月

酒焼けと白粉焼けで終る顔
備忘録一杯にして老いの道
大勢にモテテひとりモテヌとは
ひとつこと頼んで切なし七夕飾り

尼崎市 佐野六浦

目も悪くなったと太字の辞典買う
内気だが金に目がない地獄耳
やんわりと急所へ針が効いてくる
ポケットから一つ明るい話出す

尼崎市 中澤向西

惜しいおしいと大型ごみをつんでおく
爽やかな銀杏並木の万歩計
目配せが通じて決断責めている
腹の中のぞいて見れば嘘ばかり

京都市 小林英子

花束が雨に濡れてる事故現場
花言葉のそれから少女病んでいる
新年度駅員さんにも配置替え
灰皿がすっかり小言聞いている

出雲市 森山健歩

尾灯消える迄見送った故郷の母
日本語乱すつもり省略語
ダルマに目入ると仲々会えませぬ
帰巢本能まだキャンセルの席を待つ

豊中市 三宅つえ子

待合室に無言の椅子が並んでる
片隅に古いタスキが捨ててある
寄り添うてみるアルバムもセピア色
車椅子捨て切れず持つ土の鈴

鳥取県 太田幸枝

花束の花が泣いてる事故現場
貧乏を笑い袋で吹き飛ばす
まっすぐな人が胃癌で逝っちゃった
子供からもらった夢に支えられ

静岡市 小木久子

真っ先に犬出迎える友の家
内緒事持ってまわりの眼を恐れ
肝心な事がなかなか言い出せぬ
芸なしだなんて笑わせ上手です

尼崎市 湊 修水

またしても背負うて見せるランドセル

賽銭をスローで投げてトラファン

作法などいらぬ三時の茶がうまい

尼崎市 前田 いわお

ゼロよりも怖いローンの穴がある

ネオン街昼はけだるい顔になる

迷惑な一人よがりの深情け

和歌山市 山口 三千子

メリットがないので絆すぐ切れる

一束にされる藁にも夢はある

渡英した子から誕生プレゼント

和歌山市 森 茜

待っている電話が一つかからない

スニーカー買って病に負けられぬ

淋しいと素直に言ってみることに

島根県 菅田 かつ子

ストレスを吸い取るほどに空の色

歯の白さ入歯ですかと失礼な

亡母の墓蟻一匹へ語りかけ

十和田市 阿部 喜久江

後継ぎの居ない農家の鍬が錆び

窓際の退社仕度が手ぎわよい

お茶漬でグルメの旅をしめくくり

今治市 渡辺 南奉

便利さと怖さ合鍵すぐ出来る

左遷だとみんな知ってるから気楽

花が好き花は約束忘れない

米子市 服部 朗子

選り抜いた兄の帽子は海の色

珈琲をポットに入れてピクニック

一心同体で老母を看護する

西宮市 菊地 トミエ

紅い服着て見たくなる年になり

どの窓も開けて笑いのあるドラマ

返し縫い愛の綻び防ぎたく

尼崎市 吉永 伊三郎

頂上へ回り道して御来光

折り返しまでの快調メッキ剥げ

遮断機に頭下げられ見失う

尼崎市 田中 薫

先生は綽名の方で覚えてる

道幅が広くならない家二軒

目に青葉膝には母の握り飯

尼崎市 那賀島 雅子

辛抱を固めたような太い指

はなむけに贈る言葉の短くて

歯をせせり悔いのひとつが浮かんでる

鳥取県 黒田くに子

割箸が上司のぐちもつまみあげ
好きで好きで一つの箱へ二人箸
ふと会話途切れて覗く窓の月

鳥取県 浜田民子

着地する位置に両足とどかない
台風をつれて娘が里帰り

一息を入れる番茶の香がうまい

和歌山県 田中みね

豪邸へ深呼吸してチャイム押す
天衣無縫と信じた君の泣きぼくろ

五体快調今日もやる気の割烹着

和歌山県 森三枝子

一服のゆとりヒント考える
色屋根が増えて田舎の風変る

一粒の真珠ローンで買う虚栄

尼崎市 井崎ミサ子

聞き慣れぬ声だ のぞいて見たくたる
暇になると電話して来る友がある

即席はイヤ頑張ってますお母さん

佐賀県 江口万亀子

勿体ないで溜まってしまふ紙袋
他人でよかった三面記事の男たち

六十路すぎ紅一本の身だしなみ

松山市 丹下美津子

切り抜きのコラム恩師の声を聴く
底無しの沼に落ちそう老いのウツ
春うらら老いには老いのスケジュール

高槻市 芦田静江

夏帽子リボン大きく白弾む
駅前の価千金荒れた庭

娘の年頃に父の視線がうろたえる

今治市 越智青園

鯉のぼりダムに泳がせ村祭り
じゃがいものエクボが何か言いたそ
メーキャップしたら働く顔になる

鳥取県 西村黙光

いい齢をしてと女房に笑われる
ポリュームを上げるテレビの倦怠期
標識に街の素顔が描いてある

鳥取県 大角幸恵

劇ゆえに悪女の役が好きである
「君の名は」古風な恋がしたくなる
遠くから見つめていたい人がいる

静岡市 柳沢たま

内緒事 誰かに一寸教えたい
鶯の鳴き声真似て散歩道

鯉のぼり遠く住む曾孫思ひ出す

静岡市 青柳金吾

めつきりとこの頃来ない一年生

野道も舗装されて道路なり

使わない装置ばかりの高い器具

青森県 荒田つる

年金の旅ですたかが知れてます

リバイバルソングとなれば惚けて居ず

借りに来た足にも同じ自動ドア

佐賀市 古川一徳

鏡掛け上げたまんまの倦怠期

好きだった酒が父には命とり

えらそうなことが言えるも身の達者

吹田市 山本希久子

渡り終え振り返る橋朽ちそうて

旅慣れてたった一つの旅靴

どんな夢見るだろ豪華寝台車

芦屋市 根来敬

無視された同士が風邪をなぐさめる

お天気の話だけしたボケ仲間

ライバルに席をゆずってからの渦

鳥取市 萩原美雪

男はロマン女は愛を追いかける

あいつの視野に私の姿焼きつける

同じ土俵で夫婦が夢を語り合う

豊中市 滝北博史

新しい傘買ってから降らぬ雨

昇進で椅子だけ少し立派です

こわいけど夕立みたいな父でした

出雲市 原章峰

病院のエレベーターで会釈する

鳩の糞見上げる鳩が下りてくる

小手をかざす桃源郷に亡母がいた

香川県 川崎ひかり

黄金の雲を従え日がのぼる

耳飾り女の見栄がゆれている

弱くてもスクラム組んだ歩の守り

鳥取県 山根八重

正札を値切る目もとがきれいすぎ

緊張に汗と方言顔を出す

立話疲れた背の子があくびする

新潟県 高野不二

口出したばかりに手伝うはめになり

結局は土産チョコレートに決める

女店員だからヌードを買いそびれ

鳥取県 伊吹富恵

泣かされた孫の仇をとりにゆく

天地有情 荒城の月冴えわたる

善人で都会の風は背に寒い

堺市 桜井莊次

イニシャルを毎日書いてある日記

衝動買いだつたと気付く軽い靴

天網恢恢 妻の耳にはかなわない

枚方市 森本節子

オランダ館 青い陶器の鈴を買う

水郷の漕ぎ手は明治のこく者(近江水郷にて)

ゆらりゆらり手漕ぎの舟も御機嫌か

泉南市 坂根流水

逢つたとてどうにもならぬ人を待ち

野の花は隣の地藏と仲よしで

花祭りたこ いか焼が軒ならべ

藤井寺市 田中孝子

あの人と月の雫に濡れた夜

目玉焼 手際よかつた初夏の朝

老いひとり夜更けに回す洗濯機

池田市 水木博男

禿 白髪ほぼ半々のクラス会

桃割れの写真を出して見せる妻

フルムーン話題に困り早寝する

茨木市 藤井正雄

今年また梅酒をさげて故郷の母

猫捨てに橋を越えたがひき返す

手初めは雑草を刈るボランテア

枚方市 中山おさむ

アドリブへ本音隠してある主役

加速度をつけた女をもて余す

キスシーン小指からめる夢がない

寝屋川市 井上すみれ

街の広告 本日よりが二年立つ

君の名も時代のズレには勝てぬかも

小雨決行 待つ間に激しい雨となる

寝屋川市 北岡波留吉

餓鬼大将がハンドル握る縄電車

それなりに夫に値段付けてます

当選を待ちかまえてた蟻の群

大阪市 今西静子

冗談が通らぬ相手へ肩がこる

お互いに空気になって老いの日々

大阪に住んで地下街また迷う

鳥取県 中西智恵子

弱点へ目星をつけてサーブ打つ

老いてなお妻がサインを出してくる

ユニークなお寺に招き猫がいた

西宮市 岡本道子

のら猫がゆうゆう通る隠居部屋

入園児花はなんでもチューリップ

ボケてから出て来た名前をひとつ持つ

大阪市 山北 三三三

出雲市 伊藤 寿美

寝たふりで聞いていながら寝てしまい
雁首を並べて読めぬ句碑に佇つ
気にしないいうて気にする診断書

手打ち蕎麦その手間ひまでもてなされ
末席で食べております芸も無く
すれ違いばかりのドラマ嫌になる

兵庫県 円増 純子

熊本市 遠山 夏生

宝石で飾らぬ母の手が温い

前書きに出費多端の折とある

好きだから冷たい素振りしてしまふ

一枚だけの招待券は反故にする
損をした顔に同情せぬ株屋

ごみ捨て場たんぽぽ陽気に咲きました

古傷を捨てた女の糸切り歯
ライバルの栄転送る重い靴

静岡市 永倉 柳華

藤井寺市 中島 志洋

ローマ字を覚えた孫とバスに乗る

新装のビルに気兼ねの古い靴

世話になる覚悟へ嫁と小さく居る

忍耐の時は語らぬ土踏まず
美しき微笑で攻める女文字

投票日心変わりがするおんな

ヤッホーと呼べば振り向くサングラス

兵庫県 酒井 靖子

岡山市 土居 ひでの

流されて石も心も丸くなり

クローバーの四ツ葉芽が出て胸弾む

想像で噂になっていた怖さ

人妻に夫はとつてもやさしくて

面いくつ女は彩を選びつつけ

留守番の猫がトカゲを齧ってる

相生市 中塚 礎石

京都市 山海 友熙

本物の親子の絆乳首かむ

誘われて逢うた余韻へ春の風

思い出を話す男に酒をつぎ

野仏に安らぎ求めた丸い背

表から裏まで鍵のない暮らし

どん底になれて子等の眼が温い

岡山市 後安 ふさえ

岡山市 中嶋 千恵子

雑魚は雑魚なりに泳いで来た世間

一寸した気配り老いをよるこぼせ

師を迎え握手に通う温かさ

大阪市 尾崎 黄 紅

戦友という友人が減っていく
円満解決札束で締めました
漫画本 未知の世界がそこにある

岡山県 大石 あすなろ

わたしの胸に一枚きりの想像画
来る来ない花占いは風まかせ
新しい絆に期待かけている

今治市 和田 宏

春眠を誘う静かな波の音
叱られて叱られて今日初舞台
明日買うつもりの株がまた上がり

羽曳野市 麻野 幽 玄

今君は何考えている雨の午後
庇ってくれる人ばかりでないすさま
花束の見舞へ老人はしゃいでる

香川県 木村 明 人

過疎の村忘れず咲いた山桜
早乙女の姿も見えぬ機械植
本心はうちのカーちゃん美人です

和歌山市 山田 博 章

最終兵器 妻が無言で攻めてくる
公園に犬だけがいる塾通い
飽食の空瓶が着く北千島

鳥取県 山内 芳 江

子供より他に宝は何もない
温室で季節はおれの芽を育て
子供より親が競争意識もつ

河内長野市 大西 文 次

一億の創生金で村が割れ
挺子では動かず金でなら動く
大胆なポーズ見て見ぬ振りをする

柏市 上鈴木 春 枝

賽銭へ忘れてしもた小銭入れ
試着室 鏡が妥協してくれぬ
本音など書いてはいない日記書く

広島市 名和 喜一郎

先生が指しそうだから目を伏せる
見なれない薬夫が飲む不安
一合が誘いとなった二日酔い

神戸市 岩田 信 義

定年の覚悟ができた名刺入れ
お手伝いしますと役を押しつける
スナップの二人の距離が近過ぎる

鳥取市 加藤 二 代

地球儀がいくさの匂い抱いて暮れ
暑い部屋真冬の絵でも飾ろうか
ヤドカリが新居をさがす旅に出た

今治市 渡邊 伊津志

買い過ぎが食み出しているゴミの山

経歴が邪魔をしている二度の職

歯の感じ匙に伝わる離乳食

芦屋市 黒田 能子

梅雨の入り買ったばかりの傘をさし

私より大人喧嘩もボヤで済む

看病という孝行で母は逝き

静岡市 浅子 まつゑ

小銭入れだけはふくらむ神参り

噂消え七五日経ったかな

どうしても真似をしている影法師

広島市 中村 要

一人居の空しさ月を友とする

無理矢理に合わせた靴に噛み付かれ

チンジャラで儲け飲み屋に撒いてくる

大阪市 川原 章久

お手付きで済まぬ不倫の跡始末

露の臺慌てる短い蝦夷の春

緑濃い紅の森に妙技沸く

出雲市 島重 昭

鉛筆のとってもみにくい闘争心

利子つけて返してやりたい恩もある

いい経験してはすり傷なでている

箕面市 岩津 ようじ

孝行もくたびれてくる長寿国

七転びのままのダルマの落ちこぼれ

会議とは名のみともと喧嘩腰

富田林市 山原 昭水

二日酔い 二日間だけ禁酒した

海外で日の丸を見て元気である

外科医師が風邪をこじらせ玉子酒

米子市 木村 はるえ

水ぬるみメガカの学校始まった

両の手で話す私の夕餉です

アデランス帽子のようにのせられて

羽曳野市 芦田 絢子

回り持ちの役だがやはり気が重い

高望みしないしないと嫁かず居る

一人の部屋にジャスミン香りすぎ

豊中市 井上 直次

八百屋さん消費税もザルに入れ

中身より豪華な箱にする土産

慌てないことに徹して九十翁

静岡市 三浦 つね

簡単でできそで出来ぬ人の世話

知らぬ間に伸びて居るのは爪許り

遺産分け金の指輪が一つだけ

姫路市 福本好花

一円を財布の中で探してる

家業継ぐ息子と決めたのが誤りで

ばあちゃんに靴にちり紙つめて履く

鳥取市 中居武士

子供会 同じ数だけ親も居り

渴く身にナース優しく点滴し

愛用のスプーン靴に空の旅

和歌山県 三原三究

少し角立つのは覚悟正論を

人欺すことができずで商売下手

万歩計見て近道を帰るとし

熊本県 増田一乗

見舞して五日目不帰の客となり

移る身にこれが最後の散歩道

嬉しさは引越し手伝い多過ぎる

兵庫県 北川とみ子

ネクタイの結びおそわる子の背丈

もう少し燃えたくきりりと結ぶ帯

言い過ぎの愚痴が廁で渦を巻き

吹田市 西岡豊

暖かい窓全開の路地に住む

抱き合ったチークダンスは酔うてはる

樽割ってめでためだの祝賀会

岡山県 牧野秀香

隣から牡丹の香り風に乗り

現代っ子忍耐なんて知らぬらし

出る釘を打つ金槌を持つ片手

富田林市 浦田トシエ

川柳会 義務教育のように出る

世の推移言わず語りの古柱

カボチャ 茄子植えて安堵の雨となる

奈良市 井上大

漬物のようには売れぬ君の名は

銀ブラのゴルビー夫人も妻の顔

幸せのリズムのように米をとぐ

岡山県 後安江山

曾孫を抱かせてくれて歩くなと

古里の噂をのせて白い雲

字余りも字足らずもある日記帳

静岡市 大村正雄

唄 踊板前兼ねて宿の主

そろそろと押され出てく心太

セピア色伝う明治の真面目顔

岡山県 平田たけよ

たんぼぼの綿毛行く先いわずとぶ

野心などさらさら持たぬさやえんどう

人並にたまにはもめる嫁姑

静岡市 増田 ふみ
雨上がり部屋一ぱいに風を入れ

五月風園児の声も乗せて来る

岡山市 富坂 志重

旅プラン読んで心のためをする

指切りの指がそむいてばかりいる

唐津市 入江 喜久亭

待つ人が来ぬ港町 夕茜

公園のベンチでいつも独りぼち

東京都 山口 新子

お手製の三人官女に亡母が住む

束の間の夫婦きどって耳掃除

熊本市 北川 一進

スタートの前は自信のインタビュー

乾くのも早い五月の晴れた空

鳥取市 田賀 八千代

手鏡に妻という顔うつさない

口紅を引くと女が動きだす

広島県 森川 抜智

海外旅行嫌いで露天風呂が好き

氣候異変 人の頭もまた異変

池田市 木村 一笛

威風堂々六隻のマーチ湾岸へ

駕籠かきはいつも寅さん熊さんか

鳥取県 石谷 美恵子
理想には遠い異性と今日も逢う

反骨の芽は迷わずに天を向く

鳥取県 美浦 美代子

父の靴より大きい靴に子は育つ

花束をもらった事が無い雑魚だ

姫路市 山崎 治夢

又一つ思い出消えるビルが建ち

風青いと表現をする風流人

和歌山市 木村 親路

やめ暮し腰手拭いが黒くなり

衝動買い大きな悔いとなる予感

羽曳野市 徳山 みつこ

いくらでも騙されたくて見る手品

ひめゆりの塔声もなく手を合わす

河内長野市 柏木 靖子

帽子から出た鳩一瞬考える

仕舞風呂ホッと私に戻る刻

唐津市 浜本 治幸

躓いた敷居老化に赤信号

騙されておこう結果が良いならば

松江市 佐野木 みえ

梅雨晴間 白いシーツの翻り

酒の力借りて本心聞いてみる

鳥取県 乾 隆 風
のんびりと無駄花つける南瓜です
勝算がないから地団太はふまぬ

奈良市 米 田 芳 子
様々な出会いのあつた日の疲れ

奈良町へ庚申さんに招かれて

香川県 工 藤 吟 笑

近付きになったはスキーに行つてから
薄味にして気兼ねない老い二人

静岡市 大 石 た き

正直に写す鏡に媚びて見せ

ころんでも起きるだるまの意欲真似

静岡市 片 平 静 代

いい出会い突然肩を叩かれる
黒粋の顔が照れてる褒め弔辞

池田市 岡 本 吉 太 郎

連休をコップ酒にて留守樂し
病室に婿も折つたよ千羽鶴

米子市 小 塩 智 加 恵

別居です若い女は軽く言う
戸締りが気になりだした旅の空

大阪市 森 崎 忠 緑

愉快哉 対向車線渋滞中

地球からの逃げ道だった虹の橋

岡山県 江 口 有 一 朗
前向きの志向老いを忘れさせ
いざという時駆けつけてくれる友

唐津市 山 口 ふ さ 子
肩に散る花一ひらの春は逝く
黒一色モダンにまとめた美人妻

鳥取県 今 本 早 苗
子どもから学ぶ素直にありがと
日曜になると早起きする子供

鳥取市 谷 口 百 合 子
お砂糖の数でスプーン迷い出す
スプーンの裏騙された顔写る

大阪市 清 水 絹 子
白黒をつける気のない共白髪
宮参りにしふかめる姑と母

大津市 も ち づ き 遊 美
行楽日バスも電車もくつたくた
マンションに変わり駐車場減るばかり

唐津市 福 島 紀 一
荒皮を剥けば竹の子玉の肌
どんたくや大きな通りで振りを見せ

鳥根県 松 本 聖 子
幸せて人の苦勞を計りかね
目標があるから難病耐えており

鳥根県 松 本 聖 子

米子市 中井 ゆき

よせ合つた肩が少々重くなる

とぐ音がリズムに乗らぬ米二合

鳥取県 谷岡 寛陽

どん底で人の情けにふれて春

道祖神あなたの笑顔真似します

島根県 児玉 幸子

初夏の日に一日動く茶摘みの手

同窓会つきぬ話に夜がふけて

岡山県 森下 正子

それなりの成果はあつた達磨の眼

粗末でも家族揃つて囲む膳

静岡県 中西 雅

入院の友を見舞つてはげまされ

れんげ草やがて田起しされる運

寝屋川市 坂上 高栄

年頃か笑い袋がゆるみだす

すれ違ふ女の着物の値踏みする

出雲市 富田 蘭水

逝つた父桜吹雪の地に埋まる

断ち切つた思い出の地に風かおる

岡山県 伏見 すみれ

母サンの味噌汁甘い快復期

和の中へ離音入れるので困り

長崎市 岩崎 和子

母となる夢がふくらむ岩田帯

騙された方が幸せかも知れず

鳥取市 近藤 秋星

母の日に亡母の夢見た哀しきよ

母逝つてからは故郷が遠くなり

豊中市 田中 道胤

減らず口聞かされ見舞の客安堵

真夜中の電話心配が先に立つ

広島県 岸田 武

ふと別の風に乗りたいふらり足

終いには裸踊りをしたそうなの

大阪市 乾 哲静

手のかかる夫の連休持て余し

外人のお口に合つたすしの味

宇部市 中村 三良

反省会のあとの勘定また反省

手の鳴る方へ寄つてしつかり払わされ

島根県 福岡 博利

入試事件どこにもあろう運不運

無人駅の桜もけんめいに咲き

兵庫県 中野 とよ子

お化粧も命のひとつパフ叩く

冗談が通じぬ人で肩がこり

岡山県 杉本 伊久栄
パチンコ屋何時も満車の駐車場
退院の許し久々紅を引く

兵庫県 西井 つや子
老いの血が燃えて踊りの輪に入り
軍歌哀し亡夫の歴史がよみがえる

唐津市 野崎 ハル
別府の湯 夢玉手箱夢気分
路地裏の屋台昼間は眠りこけ

大阪市 家村 高雄
不器用な子供に育つ玩具箱
停年に用のないのに着替えてる

鳥取県 中藤 俊子
波滞の車窓におどる鯉のぼり
音もなく肩たたいたらよその人

橿原市 西本 保夫
気の強い女の涙をじっと見る
年金の暮して敵は作らない

大阪市 平井 露芳
知り過ぎてそっぽ向かれた君の名は
外遊でやたら名を売る元首相

八戸市 島田 昭治
三歳の孫が可愛い反抗期
一年生後ろ姿も光ってる

姫路市 福島 姫女
スニーカー万歩に構え弾ませる
何処見てもつつじ 若葉が目によさし

八尾市 秦 正子
指切りの孫へソクリ追いつけず
厄年に天中殺も加勢する

大阪市 喜多 佐津乃
予定表気ままな友に流される
受け取ってくれる我が子に愚痴譲る

池田市 林 すて
道聞けばついそこまでとついてくる
地下鉄階段休み休みの寺参り

泉佐野市 大工 静子
亡き人に言うを忘れて未だ胸に
姉生きよ妹生きよと笑い合う

大阪市 小糸 昭子
行く先を指示してくれる処方箋
目線まで考えている経営者

大阪市 武田 昌三
惚け初め妻と富士見る軽い旅
希少価値 二人羽織の芸が生き

姫路市 服部 一典
同じこと他人にすれば感謝され
ペットまで缶詰食べて美容院へ

和歌山県 吉田 武治

ほどほどにしろと散歩の細い足

根回しが出来たと課長目が生さる

羽曳野市 福田 悦子

席ゆずる優しさおばあちゃん子だろう

当選の確率現役にある強味

羽曳野市 山本 たけし

涸びて漸く悟る人生譜

どうせまた刺身のつまになる私

東大阪市 安永 暁子

おにぎりもって青葉若葉に会いに行く

豆ごはん上手に炊けて底がみえ

東大阪市 松山 隆

くじ運に月十枚の夢見料

万歩計 尺取虫に笑われる

東大阪市 大平 太一郎

老いて尚強く明るく天の声

雑草を争った世がまだ憎い

唐津市 野田 旭恒

飲む程に四方山話に花が咲く

いつになる北方領土の里帰り

島根県 今川 三津江

雑草も取るまい地球の財産だ

武勇伝 二度も三度も聞いてあげ

大阪市 平山 登代

花みずきホテルの庭に咲き誇る

母の日に娘は花を空の便

松江市 松浦 登志子

一周忌おえると肩に三周忌

新生児 手首足首名札つけ

十和田市 小笠原 敏夫

相撲界 新時代の波が寄り

病室で子供の自主性育つてる

和歌山県 上岡 正直

青臭いトマトの味も匂の味

あれこれと試してみても出来ぬ歳

鳥取県 谷口 侑里

男の背にはつらい事など秘めてある

じいちゃんの竹とんぼには孫が負け

島根県 岩田 三和

春ひとり歩く男にさくら散る

よいしよして隣にすわる上の席

第6回 国民文化祭文芸大会 川柳募集

課題 「水と緑」「広場」「醬油」「暖流」「空港」

応募料 1000円 締切 7月31日(各題2句)

送付先 千葉市亥鼻2-5-3 千葉県庁亥鼻別館

水煙抄

秀句鑑賞

—六月号から

奥山 美智子

さよならをしたのに帽子そばにある

大角 幸代

帽子掛けには、いつものように亡父の愛用の帽子が掛けてある。ひよっこり帰って来そうだ。亡き友や恩師からの便りも懐かしい。やつかいなのちをくれた父と母

高田 美代子

命ほど厄介なものはない。父母からいただいたかけがえのない宝物だから、何よりも大事にしなければならぬ。

割り切れれば噂も空へ抜けてゆく

沢田 きん

大らかな心を持つと。誰にでも噂はあるものだ。

不運かも知れぬ男を追いかけろ

野瀬 昌子

「不運かも知れぬ」と言い切ったところに愛の深さを思い知る。厳寒のシベリアへ「恋の逃避行」をしたという、美しい女優岡田嘉

子さんがいる。ドラマを地で行く話である。

花の里 見降ろす月が動かない

宮崎 菜月

壮大な眺め。そして想いも深く深くなる。

真つ当に生きて悔いなく見る夕日

玉置 当代

爽やかに人生を歩んできた喜び。今日も無事に終えて、夕日が祝福の緞帳を降ろしてくる。

思い出は奇麗のままて鍵をかけ

木下 義嗣

遠い日の思い出、初恋などはいつまでも美しい。ともすれば孤独になりがちな心を温めてくれる。

本心は駆け込み寺にだけ明す

山崎 彩子

本心はめつたに明かさない。これは人間の意地かも知れない。駆け込み寺もそう気安く入れる所ではないだろう。

強い事言えぬ弱みを握られる

前田 いわお

先手を打たれた痛さ。でも、この句には相手への信頼感と安堵感がある。

要らぬ嘘つかねばならぬときもある

根来 敬

嘘は言い方で毒にも薬にもなる。美しい嘘は許される。

偶然にしては物事運びすぎ

北岡 波留吉

たまにツキの良い時がある。でも、あんなりうまくいき過ぎると、ふと怖くなる。

風ぐるま風強すぎて回らない

中塚 礎石

なに事もほどほどにしたいたいものだ。

二度三度積んでくずした夢の跡

奥野 テル

若い日の夢は忘れられない。本棚やアルバムから、ふと転がり出てくる。

雑踏の中に自分を消しに行く

上田 俊路

人ごみの中へ、自分を忘れに行くのであるが、かえってすれ違ふ人々と、自分とを置き換えて見てしまふ。

峠道待っててくれる人が居る

中井 ゆき

けわしい峠道で付き添って下さるすばらしいお人。幸せな明日が見えてくる。

村中がみんな見に来る過疎の嫁

伊藤 寿美

大勢に押され妥協のバスに乗る

白石 春嶺

ライバルのお辞儀がとても美しい

木下 道子

峠いくつ越えてまあるい風になる

清水 悠貴女

言い訳をしない男で憎めない

大西 文次

全日本川柳愛知大会 秀句

6月9日 名古屋市公安局

「探す」 青木 晴風選

断崖に来てからさがる手を探す 寺井 光生

人間を探すと釈迦の掌に触れる 江尻 麦秋

「瓶」 定本 広文選

瓶も女も並んでいるとおとなしい 上野多恵子

自画像が破れボトルと夜を明かす 仁木 弘悦

「本心」 山崎 鮮紅選

本心は言わず外堀埋めてゆく 塩沢はやせ

本心は玉虫色の旗を振る 岩井甲之介

「学ぶ」 山本 翠公選

曼珠沙華いのちの赤を学びとる 辻 由紀子

生きる智慧学ぶときどき血を拭いて

「風景」 池戸 楨恵

藤本静港子選

B面の風景飢餓の子が群れる 梶山三重子

仕事美人を絵にしてノッポビルの景

「信仰」 保木 寿

坂本 雨山選

二合炊く飯を仏と別けて住む 田中 明治

信仰の始めは母の子守唄 永田 松風

「緑(みどり)」 鈴木 寛六選

ちぎり絵の老母は緑の風と住む 吉田 紫水

子の絵から緑が消えるのが怖い 中嶋洋之助

第15回茗人忌川柳大会(8月25日)

ご来会お待ちしております

うみなり川柳会

鳥取市相生町3丁目204
電話 (0857) 23-4672

第43回

西日本川柳大会

・九月一日(日)

ご来会を心からお待ち
しています

岡山県久米郡久米南町下弓削

弓削川柳社

会長 濱野 奇童

副会長 山田 止水

恒弘 衛山

事務局 長谷川 紫光

川柳たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町田中

竹原川柳会創立35周年 }
学生句集「竹の子」第二集発刊 } 川柳大会
山内静水追悼 }

よろしくお願い致します

会 副
計 会
長

山石田藤古古岩岡古森時岩小
内原村解田田本本谷井広本島
ほか房淑新静比呂太文清節菁一笑蘭
同子子造風子虚晴水夫居路子幸

お暑いことで……………

夏バテしんさんらんに

秋、11月10日(日)は、満11周年の記念大会です。

皆様のご支援を心からお待ち申し上げます。

川柳塔鹿野みか月

☆事務局 〒689-04 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279 中原颯人方
電話 (0857) 84-2100

暑中お見舞い申し上げます

翠 洋 会

橋高薫風
高杉鬼遊
山根いつを
明石幸子
阿山みよ子
井上照子
稲本凡子
上田佳秋
上田登志実
内田結実
梅田宣司
奥田みつ子
片上英一
北田綾子
栗谷春子
小池しげお
児玉蛙
坂本仙吉郎
清水絹子
白石章子

園田文子
神保拓生
末次真
住谷石舟
高杉千歩
田中正坊
田中透太
寺井東雲
中西兼治郎
西出楓楽
西山幸
藤井正雄
藤村宏子
古谷ひろ子
堀江良江
堀江光子
松永すすむ
横山為子
米田恭昌
渡部さと美

暑中御見舞い

申し上げます

平成三年 盛夏

うぶみ川柳会

鳥取県湖山町

私たちも頑張っています

一人歩きも地につきました

どうぞ御鞭撻を

お暑うおま

平成三年 盛夏

笠	奥	松	竹	藤	小	川	辻	松	阿	黒	正
嶋	山	川	内	村	池	島	川	川	萬	川	本
恵	美	芳	花	メ	し	諷	白	杜	萬	紫	水
美	智	子	代	女	げ	云	溪	的	的	香	客
子	子	子	子	お	お	児	子	的	的	香	客

暑中御見舞申し上げます

川柳塔まつえ吟社

恒	柳	舟	原	竹	佐	福	浦	安	門	原	松	金	吉	園	久	小
松	楽	木	長	内	野	間	邊	食	脇	原	本	村	岡	山	家	西
町	鶴	与	三	寿	木	芳	静	友	静	煩	文	青	き	多	代	雄
紅	丸	根	三	美	み	枝	江	子	恵	惱	子	湖	み	賀	仕	々
		一		子	え					児			え	子	男	

暑中お見舞い申し上げます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市中央公民館
(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西5分)

事務局及び投句先

〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ

西	門	奥	奥	上	朝	秋	黒
口	谷	山	田	田	山	元	川
いわ	た	美	み	佳	千	て	紫
ゑ	ず	智	つ	秋	世	る	香
	子	子	子		子		
吉	山	山	丸	藤	春	春	林
田	崎	片	山	村	城	城	
笑	君	紀	よ	↗	武	年	は
女	子	雄	し	女	庫	代	つ
			津		坊		絵

キーワード

川柳こぼれ話

田中正坊

昨年四月号に「花百句」、同十一月号に「四季百句」として過去三年間の同人吟の中から各百句を抄出して掲載した。本社の同人がこの記事を六人の俳人に見せたところ、掲載句の一〇〜二五%が「俳句といえる」句であるという意見が寄せられた。そこで、「季語の入った川柳」を特集した狙いをただしてこれしたが、編集部としては、意図的に「俳句」めいた川柳を列挙したわけではない。「季語」にこだわるつもりもなかった。たまたま「花」「四季」といったテーマの関係で、結果的にそのように受けとられることになったものだと思う。

ただ特集との関連から、十一月号のこの欄に私が「川柳と季節」について書いたが、その表現が適切でなかったためか、ここでも川柳の作句に「季語」を使うことを奨めているように誤解され、例示した歳時記まで買

ろえた人がいるという話を聞いた。私は、川柳はあくまでも俳句の亜流であってはならないと思っており、あの文章では、川柳でも季節にかかわる言葉が多く使われているという事実を指摘し、使うからにはその言葉を正しく理解し、季節的に異和感を与えない作品を発表してほしいと望んだまでである。

ところで俳句の世界では、歳時記をあたかも「聖典」のように尊重する、いわゆる「伝統俳句」と、無季もふくめて季語にこだわらない「現代俳句」の二大潮流があるが、最近、季語についての考え方がかなり揺らいでいるようである。門外漢がこの問題に深入りすることは避けたいが、金子兜太も特定の季語が「詩語」へとその性格を変えていると述べているし、比較文学論を専攻する俳人の夏石番也は、季語を「詩的の中核語」として規定し、コンピュータ用語として使われている「キーワード」を季語に置き換え、キーワード別に秀句を編集した「現代俳句キーワード辞典」を刊行している。この試みは、なかなか面白いと思う。

さて私は、本誌の昭和六十二年九月号に、「季語」と「句語」と題する一文を書いている。俳句における「季語」と同じように川柳で多用されながらも、常套語あるいは慣用

語として否定的に扱われている特定の言葉にスポットをあて、「句語」と名づけてその性格・役割を論じた。これは柳界の一部で注目されたらしく、当時の『川柳新聞』にはほとんど全文が転載された。読み返してみると、かなり以前のものだけに論旨に不十分な点が多いが、私の言う「句語」と夏石番也の「キーワード」とは、その発想においてかなり共通するものがある。

その文章の中で、私は「句語」としての性格を持つと思う言葉をとりあえず「人間」を中心として一〇〇語を示したが、『キーワード辞典』では二四五語を挙げている。それらの言葉はあらかじめ決めたものではなく、昭和年代に出版された個人句集四一五冊の秀句中から抽出したとしている。中には、「アヌス(肛門)」「魔羅」「三島由紀夫」など、どうかと思われるものもあるが、全体としてはおおむね適切ではないかと思う。

どうやら「季語」の弁解にはじまって、『キーワード』の紹介でおわりそうだが、季語にこだわっていない証拠に五月号に「母百句」を特集し、本号に「夫婦百句」を編んでいる。私はキーワードよりも、山本健吉の「基本季語」を借用して「基本句語」とでもよび、しばらくはそれを追いつづけてみたい。

銀河系

河内天笑選

米子市 八木 千代
脱ぎ捨てたものが絡んで歩けない
ひとり生き抜くにこれほど水を汲む
旅人として詫び状を書けばかり

鳥取県 新家 完司
さわやかに生きたいけれど欲がある
真夜中に金を数えるのが好きだ
拳銃が欲しい わたくしを撃つ拳銃が

青森市 工藤 甲吉
理想論承つて置きましよう
失礼にあたるジョークが出てしまい
西宮市 奥田 みつ子
咲く前のふるえるバラを見ています
失敗をして人間が見えてくる

鳥取県 土橋 はるお
夫婦げんかに軍配はあげられぬ
銭を喰う子供がなけりや淋しいぞ

米子市 林 荒介
木の椅子が醸すわたくしだけの音楽
逆光にはつきり判る腰の位置
松原市 小池 しげお

火遊びとわかり男の手を離す
忘れないように近道して帰る
和歌山市 後藤 正子

まだ揺れているブランコを静めよう
ながく曳く影を愛しいとも思う
倉吉市 淡路 ゆり子

五月晴れ視野いっぱい丸を描く
振り上げた小石をそつとポケットに
米子市 田中 亜弥

手話少し覚えて母の耳がわり
喜びがはちきれそうで分けてあげ
和歌山市 古久保 和子

連休のプラン渋滞入れ忘れ
愛嬌のポーズ覚えた象の鼻
柏市 上鈴木 春枝

聞き役がない女の立ち話
肩書きの数だけ持っている仮面
和歌山市 田中 みね

子の自慢もいいがご主人お大事に
現実に戻りそこねたシンデレラ
岡山県 小林 妻子

メーカーキャップの上手さ信用してしまふ
そこそこに貰うてゴルフなど覚え

大阪市 神夏磯 典子
年いちど人おどらせて散る桜
贅肉を取る音楽かジャズダンス
海南市 三宅 保州

散髪をしたのに知らん顔の妻
板挟みにされたら燃えるほかはない
鳥取県 江原 とみお

エチケツトにこだわると銭もうからぬ
裏通りへくると磁石がうごきだす
砂川市 大橋 政良

自惚れが訳なく反旗握らせる
愚痴ぼとりぼとり緩みが来たようだ
熊本県 高野 宵草

無駄話聞きつつ用は何だろう
好きそうなお姑さんの丸い鼻
米子市 沢田 千春

もう少し早く歩けと影が言う
春風にスキップしたい花の道
芦屋市 根来 敬

見せまいとなさる心に隙があり
束縛のない一日をもて余し
米子市 石垣 花子

出て行けと言えは出て行きそうな妻
一度でも打たれる杭になつてみたい
大阪市 榎本 露児

しんとして新生児室白ばかり
子ら巢立ち勉強机だけ残る

弘前市 波多野 五楽庵
駅までは送って行かぬことにする
米子市 新 正子

風向きが味方強気になる火の粉
米子市 政岡 日枝子

結び目の脆さをライバルは見抜く
堺市 中川 楓

気どるあなたがどんとん透けて見える
和歌山市 山田 高夫

言い足りぬ別れに風が吹き抜ける
和歌山市 堀端 三男

単細胞ですぐに白黒つけたがり
唐津市 野崎 ハル

風のようにあの海岸を走りたい
鳥取県 近藤 秋星

手を上げて妻が呼んでる春の宵
姫路市 大原 葉香

月昇るついて行きたい美の世界
米子市 中井 ゆき

牡丹園 千年前の人に逢う
枚方市 森 本節子

この時間みどりと犬と私だけ
姫路市 中塚 遊峰

ウインドは疲れた私じっと見る
松江市 竹内 すみこ

髪切って私の春に別れよう
松江市 竹内 すみこ

その時は大きいつづら選ぶかも
寝屋川市 江口 度

河内長野市 植村 喜代
思い切り走ってみたい犬の夢
八尾市 山下 美津留

蝶々のようにひらひら娘は嫁ぐ
倉吉市 渡辺 菩句

もう二度と逢えない雲にさようなら
兵庫県 北川 とみ子

戸惑いが消えて握手が強くなる
鳥取県 さえき やえ

アクシデント長いくさがはじまった
尼崎市 春城 年代

車椅子老夫が押ししている世界
七尾市 松高 秀峰

姑さんが知らないふりをしてくれる
鳥取県 上田 俊路

シャッターを切るたび変わる風の彩
羽咋市 三宅 ろ亭

看板をあげると度胸ついてきた
静岡市 片平 静代

あまい水さがして螢帰らない
鳥取県 榎 みどり

残されて一人の余生はしり出す
大阪市 尾崎 黄紅

それ以上訊かないことにして酌いで
大阪市 山北 三三三

父の風邪母にうつしてから治り
広島県 岸田 武

いさかいの火種を酒が煽り出す
広島県 岸田 武

唐津市 山口 高明
闇からの声がわたしを眠らせぬ
岡山県 松本 元江

脇役に徹する修業積んでます
吹田市 栗谷 春子

好き嫌いなぜか変ってきて楽し
岸和田市 清野 こう

ぼつぼつとたがが緩んで医者通い
大阪市 渡部 さと美

君はまるで気流のように掴めない
今治市 越智 一水

聞き流すことから人が出来てゆき
和歌山市 山川 克子

男には男のロマン抱いて酒
出雲市 板垣 夢酔

医者からの切腹の刑逆らえず
弘前市 村田 善保

一期一会 今日一日に持つ想い
広島市 名和 喜一郎

ききわけがよすぎる友でもの足りぬ
出雲市 園山 かおる

ついて来た妻はピエロの顔でいる
和歌山県 寺田 裕美

急がねば鱈がくさる長ばなし
川西市 松本 ただし

三叉路に丁半がある男坂
寝屋川市 平松 かすみ

呆けたとは言わず童子と思いましょ
寝屋川市 平松 かすみ

箕面市 椎江清芳
足音に慌てる蟹を笑えない

西宮市 西口いわゑ
名人の微妙ないびつ貴ばれ

羽曳野市 吉川寿美
世渡りのお面なん度もつけ替える

尼崎市 明壁敏之
真つ直ぐな妻の意見が押しにくる

鳥取市 小谷美つ千
愛ひとつこころにとどめおき候

岸和田市 三輪通彦
但し書つけて逃げ道あけてあり

和歌山市 福本英子
助手席の合図無視した罰当り

有田市 生馬芙美子
親しさの中から洩れて行く秘密

鳥取県 美浦美代子
口紅に病かくして逢いに行く

鳥取県 西原艶子
エチケットのおさらいをして逢いに行く

倉敷市 井上富子
無人駅 私が捨てた過去がある

今治市 渡辺南奉
紅色に弱い男で善人

鳥取市 春木圭一郎
いさぎよく負けて明日へ力貯め

姫路市 福本好花
かましい雀とうまく息合わず

岡山県 江口有一朗
嘘一つ入れて出方を試される

豊中市 田中正坊
花生けて脇役となるクリスタル

名古屋市 藤井高子
あちこちと部品もきしむ余命表

倉敷市 田辺灸六
同姓同名中味全然違います

広島市 中村要
ストレスの薬が効いて二日酔い

富山市 舟渡杏花
じゃんけんの重さを知って昏れ残る

高槻市 川島諷云児
憶測でものを言うからもめてくる

兵庫県 奥野テル
裏話聞けば許せる気にもなり

藤井寺市 高田美代子
偶然が三度続いて怪しまれ

唐津市 中村弘
良識と義理が戦う投票日

大阪市 塩田新一郎
賽銭の行方をちよつと考える

出雲市 島重昭
うるさいが頼れる妻がいてくれる

出雲市 竹治ちかし
突然のことで本音が出てしまい

静岡市 柳沢たま
卵産む亀の涙を見てしまふ

和歌山県 三原三究
突つ張りが支えてくれた青春期

米子市 小西雄々
体臭を忘れぬ人の墓に佇つ

兵庫県 中野とよ子
逃げるなよ薬一本にすがる恋

和歌山市 青枝鉄治
貧乏神わが家へフリーパスで来る

堺市 米谷紫江
いたわりは時に差別と誤解され

藤井寺市 中島志洋
寄り添ったアベック襲うホームラン

岡山県 富坂志重
好きでない男が力貸すという

寝屋川市 坂上高栄
知らん顔するのも処世術のうち

堺市 近藤豊子
当選をしてからお声遠ざかり

宝塚市 丸山よし津
自販機は乾いた音で産み続け

岡山県 土居ひでの
定年へあと幾日の靴みがく

寝屋川市 堀江光子
割安の宅地いわくがありそう

八尾市 片上英一
ログハウス電気水道引込可

東大阪市 大平太一郎
値を聞いてから改めて句の味

唐津市 仁部 四郎
兵庫県 遠山 可住

開発のツケを流して川無口
鳥取県 乾 隆風

ボケ防止などと子守をさせられる
羽曳野市 徳山 みつこ

不公平に耐えて一円玉の旅
羽曳野市 田中 透 太

子を産まぬ女が増える均等法
大阪市 亀井 円 女

世界は一つ何と白々しい言葉
鳥根県 加本 義 良

医療費タダ記念に風邪をひきました
姫路市 服部 一 典

子供まで経済大国成人病
東大阪市 今岡 貞 人

年金で外側だけは優雅なり
堺市 高橋 千 万 子

用向きを聞きたい程の渋滞車
静岡市 渥美 弧 秀

帰省の子 兎小屋には落ち着けず
橋本市 岸本 木 魚

億と言う税が払うてみとうなり
竹原市 信本 博 子

マンションの二重ロックへ住み移り
大阪市 津守 柳 伸

お土産は宅配になる母の旅

寝屋川市 岸野 あやめ
今治市 月原 宵 明

ボス猿の落ち目を人の世に重ね
熊本市 遠山 夏 生

土器に濁酒甘し花に酌む
鳥取市 武田 帆 雀

紅生姜だけあればよし独り酒
茨木市 堀 良 江

若者のまちに变身
嵐山 奥谷 弘 朗

太陽が照らしてくれる部屋がある
有田市 松井 かなめ

花の下ラーメン食べて楽しそう
香川県 木村 明 人

筈の心やがては天を突く
米子市 林 瑞 枝

太陽のころろ他人と人文字に
大阪市 板東 倫 子

シャンソンが好きわからないままに好き
奈良市 米田 恭 昌

ハネムーン下駄もはしゃいだ音になる
鳥取県 西川 和 子

ミュージックオン機嫌よく飲んで
広島県 田村 新 造

海峡を渡れば変わる国なまり
鳥取市 谷口 百合子

のびのびと生きる野花に触れてみる

香川県 川崎 ひかり
黒石市 相馬 一 花

エレベーターみんな仲よくドアを向く
守口市 森川 まさお

散髪をして連休をごろ寝する
寝屋川市 宮尾 あいき

天国でたんとおさがり印度の児
岡山県 千原 理 瑛

深緑の山ふところに句碑三墓
岸和田市 古野 ひで

母の日に亡母と出かけた石切さん
鳥取県 林 露 杖

鳴砂の浜に泪を埋めて来た
鳥取県 伊吹 富 恵

花曇り鐘の余韻に花が散る
姫路市 山崎 治 夢

若葉風山の媼と蕨採る
箕面市 岩津 ようじ

日本に生まれた木の芽あえ
佐賀県 寺中 三 枝 子

テレカード パリトンの君恋しくて
八尾市 高杉 千 歩

ツゴイネルワイゼン今夜はひとり酒
茨木市 藤井 正 雄

倉敷の柳の奥の喫茶店

▼投句は、川柳塔用箋またはハガキに3句
毎月15日までに川柳塔社事務所へ

首香のむ

小出智子選

タンポポを吹いて老後を任せよう

ゴールデンウィーク私は眠り姫

女には女の話午後三時

原石のままの私で終るかも

門限の娘の目しっかり見て叱る

始めての身ごもる思い柿の花

胸の奥に下ろさぬ旗が一つある

ぼろぼろの心に化粧して出かけ

探しあぐねて探しあぐねてまだ一人

人並の生活と思うゴミの高

あこがれた水入らずだが退屈だ

豆ごはん豆も小さい我を徹す

親の恩 万分の一子に返す

子供の日母の日などと罪を積み

姉の病気を気遣う雨期が近くなる

肩撫でる風の心を読みとれず

わたくしの老いみるように母の老い

句読点ひとつひとつがほろ苦い

思い出は甘く夏柑種がある

堺市 高橋千万里

大阪市 新井 朋子

寝屋川市 宮崎 菜月

姫路市 中塚 遊峰

芦屋市 黒田 能子

姫路市 福本 好花

寝屋川市 堀江 光子

島根県 松本 文子

堺市 鈴木 可愛

羽曳野市 吉川 寿美

羽曳野市 芦田 絢子

和歌山市 西山 幸

出雲市 吉岡きみえ

堺市 小西 小雪

松原市 佐藤 奏月

富田林市 片岡智恵子

和歌山市 木本 朱夏

和歌山市 古久保和子

出雲市 園山多賀子

辿りつくくと小さな亡母の膝だった

書き終えてまだ行間にある渴き

ころあいを計って投げてやる浮き輪

避けている話題がひとつああ夫婦

やさしさに会い辛抱がせきをさる

一人芝居をやっている鏡の間

微笑みの奥へ心配一つ秘め

はは方の花になろうと姉妹

幸せでしようね 手毬が帰らない

ややこしい話アンテナ引つ込める

また君の自慢話が鼻につく

樹々みどりドラマを秘めているように

面白くないがニュースは聴いている

いただいた性いっばいに咲かす花

呼び捨てにされて気付いた老いの耳

六十路来て素手と素足を愛おしむ

ひたすらの人生屈折多過ぎて

旅に出ようと言うのは何時も女から

一人で見る花はわたしに語りだす

さみしげな母の言葉が掌に残る

女でも吊橋ぐらい揺すれます

森に来て木の伸びる音聞いている

目の前が真っ白になる花粉症

ある時は凜と答えを出す柳

鳥取県 小西五十鈴

和歌山市 後藤 正子

和歌山市 桜井 千秀

富山市 舟渡 杏花

西宮市 西口いわゑ

寝屋川市 井上すみれ

神戸市 能津 さち

鳥取市 小谷美つ千

米子市 新 正子

和歌山市 山口三千子

和歌山市 田中 みね

西宮市 奥田みつ子

大阪市 北川 弘子

鳥取県 西原 艶子

松江市 浦辺 静江

名古屋 藤井 高子

大阪市 松尾柳石子

藤井寺市 高田美代子

青森県 福士 トキ

米子市 服部 朗子

兵庫県 北川とみ子

米子市 石垣 花子

松江市 竹内すみこ

尼崎市 春城 年代

富田林市 池 森子

新品の帽子で少し浮かれてる

苦と楽を丸めて話すいい笑顔

桜もちかしわもち しなやかになる

迷わずに母が手を打つ方に行け

友逝きて念珠の触れる音悲し

老醜をいたわりつつも化粧する

花が好き花の話を厭きませず

返品がかさなり嫁の名を借りる

淋しさを隠す笑顔がむつかしい

連れ舞いの山ふところに句碑を抱く

広辞苑を重く思ったことはない

散歩径今日また知らぬ花に逢う

一行の日記にうれしさが溢れ

こぼれ種小さな庭を花で埋め

車椅子だから坂を登りきり

眼に触れるものみなうれし五月晴

やがてこの年になつたらわかるでしょう

這い出した孫にならって這つてみる

破れてきた使い古しの知恵袋

姑が時々昼の月になる

おみやげの筍 三日ほどつづき

よしきりの鳴きやみ話つづきする

ぬるま湯の中で幸せうたえない

来年は厄年という娘にあわて

ひと眠りさせてもろうてからの知恵

米子市 政岡日枝子

兵庫県 酒井 靖子

米子市 金山 夕子

米子市 茂理 高代

有田市 松井かなめ

倉吉市 淡路ゆり子

兵庫県 円増 純子

米子市 小村てい子

大阪市 稲本 凡子

岡山県 土居ひでの

大阪市 西出 楓葉

姫路市 福島 姫女

兵庫県 中野とよ子

姫路市 丁坪サワ子

出雲市 石倉芙佐子

岡山県 千原 理瑛

茨木市 堀 良江

堺市 米谷 紫江

大阪市 本間満津子

鳥取県 西川 和子

堺市 近藤 豊子

守口市 結城 君子

米子市 光井 玲子

倉敷市 小野 克枝

柏市 上鈴木春枝

手品師が私の心抜きにくる

信じ切つてる目には優しい目を贈る

千秋の思いを托す揚羽蝶

知らぬ顔ばかりでホツとするベンチ

走り出すバックミラーにうつる母

いい人と言われストレス溜めている

聞き役にまわつてまいる膳になる

梨が気にかかると今朝の霜注意

席ひとついつでも母の膝にある

木や草とつぶやき合える年になり

花ぬすつとの気持が分かる咲きかかり

墨染めにかくした僧のお人柄

札束が泳いでいます鯉の池

美容院ついでに憂さも捨ててくる

来世では妻になんぞになるものか

今も昔も花は変らぬ色で咲き

羽曳野市 徳山みつこ

京都市 山海 友照

八尾市 高杉 千歩

堺市 桜沢あかり

岡山県 富坂 志重

和歌山市 榎原 公子

広島市 森田 文

吹田市 栗谷 春子

兵庫県 奥野 テル

八尾市 向井しづ子

大阪市 渡部さと美

有田市 生馬芙美子

竹原市 信本 博子

香川県 新川マサエ

唐津市 浜本 ちよ

岡山県 松本 元江

ゴシックの一句目、老後というと平凡になり勝ちなものを少女っぽくいつて暗さがない。「タンポポを吹いて」がこの句のいのち。二句

目、この作者はまだ高校生と聞く。この句にしても初々しさがある。

ゴールデンウィークを何処へも出かけずに居たのを「眠り姫」であつ

たと表現している。今の若さでなければこんな句は作れない。三句目

この句の着想はごくありふれたことなのに、それを意味あり気につ

てのけたところがよい。この場合の「午後三時」は動かない時間。四

句目、まだお目にかかったことはないが、原石どころか、川柳の集ま

りの中で磨かれている。とても素直で共鳴させられる。

投句先 干544大阪市生野区勝山南1-18-10 小出 智子

ひみこさろん

ある朝の記憶

桜井 千秀

三人の職人さん達は一台の荷車の引き手・後押しに分かれ、早朝の静寂を破って急ぐ。その後、父と母、そしてずーと遅れて私。

かなり手広く営んでいたラジオ商、当時は流行の先端を行く商売だった。それが父や職人さん達で考案した電気炬燵が、ある電気メーカーの特許品と寸分違わなかったため、大量生産した商品は捌くことができず、結果止むなく一家三人の逃避行、小学校六年になったばかりの五月のことであった。

ずーと遅れて歩く私は、懐に袋に入れた小猫を隠していた。はじめはもじもじしていただけだったが、時が立つにつれ「ウーウー」と呻き声をあげだし、それを父母に悟られまいとだんだん遅くなる步調。父母はそんな私に気付くだけの余裕がないまま、やがて玉造

の駅。辺りはまだ朝霧の中に包まれていた。職人さん達は手早く荷物の送り出しや切符買い、最後の別れを惜しむ間もなく改札口。

「あれっー猫連れてきたの」ときつい口調。「だめだめ、おっちゃんら飼ってやるから」と引つたくらんばかり。私はしゃくり上げながら「もう一回だけミイの顔見せて」と袋の口を開けた途端、ミイは飛び出し、ホームの彼方へ走り去った。「ミイミイ」と泣き叫ぶ私。

今でも玉造の駅に立つと、五十年前か前の自分の絶叫がこだましてくる。そしてこの町の片隅で今もなおミイの子の孫のまたその孫が生き続けている。そんな気がしてならない。

犬と私

岩本 笑子

昨日、長女が犬を買って来た。娘に弱い夫と二人、日曜日一日つぶして広島まで出て買って来たのだ。家族の中で、私だけ反対したのだが、押し切られてしまった。シベリアンハスキーという種類のこの犬、まだ名前が付いていない。犬小屋もまだ。しかし夫は張り

切って、娘と二人で小屋作りにとりかかっている。「ああでもない。こうでもない」と、娘との会話を楽しんでいる。次女はクールなのか、あまり犬には関心を示さない。双生児なのに、少し性格が違ふようだ。

「中二の娘、これから五年十年と、この犬の世話が続けられるだろうか」と、一人ぼやいている私。内心おだやかではない。

「どうして犬が好きなん？」と娘に聞いたら、「どうして川柳が好きなん？」と聞かれてしまった。本当に、どうしてなのだろう。高校二年生の時から、細く長くと続けてきた川柳だが、どうして川柳が好きなのか、一瞬、考えこんでしまった。川柳塔賞もいただいた。川柳塔の同人にも名前を連ねることができた。各地大会へ行き、多くの川柳人の方に声をかけてもらった。もう理屈抜きで、川柳が好きなのです。もちろん主人の次ですが。

この記事が載る頃には、名前も付き、小屋もでき、私が一番にかわいがっているかも知れません。

初めて我が家で犬を飼うことになり、その一コマを紹介しました。

ひみこさろんは、女性同人のページです。

理瑛・元江句碑 建立と句集刊行

小林 由多香

川柳仲間には仲のよいことで知られている理瑛さん、元江さんが肩を並べて句碑を建立され、同時に二人でつれづれ句集『風と花』も出版、よろこびを倍にされた。

五月十五日午前十時半から小雨の中、前泊組の橋高薫風理事長、寺尾俊平、田中好啓、河内天笑・月子夫妻、上妻炎志、由多香各氏のほか、町教育長、特に親しい柳友、親戚の方々三十名が出席、天笑氏の司会により除幕式が行われた。時折、老鶯の美声も聞かれる静けさに心を洗われながら薫風、俊平、由多香、教育長の祝辞に続いて、友人で婦人会長の中島茂子さん、柳友の土居ひでのさんの手で二基の句碑が除幕された。

西尾菜主幹の筆になる

やすらぎは山のみどりと空の蒼 理瑛

この里に一会の絆結び合う 元江

お二人にふさわしい句が、くつきりと読みとれ、そのすばらしさに拍手が送られた。こ

両名の感激の微笑みが印象的で、好啓さんの観世流謡曲による二句の朗詠がおめでたさを一層深くした。

理瑛さんの謝辞の後、全員でお祝いの乾杯をし、句碑を囲んで和やかに記念撮影、除幕式が終った。句碑もすばらしいが、建立された場所の環境が実にすばらしかった。

大原町でも特に観光客で賑わう武蔵の里、武蔵神社から因幡街道で因州鳥取から幡州へ通ずる、江戸往來の道であった釜坂峠へ向けて徒歩二十分の所に「一貫清水」がある。年中絶えることのない清水があり、この道を通る旅人の喉を潤してきた。「この水は一貫文の値打ちがある」と言われたことからこの名



句碑と理瑛・元江さん

があるという。今でもこんなと湧いておりとてもおいしい。この水でコーヒータてて繁盛している喫茶店も大原町にある。

一貫清水のすぐ右に、理瑛さんと元江さんの師であった白岩文衛さんの句碑が地元有志のみなさんによって建てられている。

一貫清水 武蔵は里をふり返り 文衛
お二人の句碑は、この句碑に添うように清水の左に仲よく建てられている。

折角の機会でもあり、白岩文衛さんの自宅庭にある
白百合の白さ心の紋とする

と、公会堂のわきに建立の土居耕花さんの
次の世があつたら妻よまた逢おう

の句碑にも案内してもらい、ひととき両氏を
恵んだ。

武蔵の里研修センターで開かれた祝宴も上妻炎志さんの乾杯で開かれ、終始和やかに、さながらカラオケ大会かのように自慢の喉が披露され、特に理瑛さん、天笑さん、さらにカラオケ喫茶の店主など、出席者をうならす熱演が続けられた。

句碑だけ、句集発刊だけでも大変な仕事なのに、両方同時に成し遂げられたお二人にもう一度、おめでとを申し上げ、今後のご発展・ご活躍をお祈りしたい。

七夕

西山 幸選



願い事高く結んで星祭り
 七夕へ無邪氣な願いよく届く
 織姫も彦星も子は信じない
 星祭りことしの業を焚き清め
 牽牛に逢えない織女星も居る
 単身赴任牽牛織女めく暮らし
 七夕へ願いは未だ山とあり
 七夕の色紙へ忍ぶ恋がある
 七夕の記憶が淡い数え唄
 そのかみの織姫老いて笹飾る
 七夕に誓った夢も色褪せる
 七夕の絵筆がにごる世の移り
 七夕へ施設の子等のつるす夢
 商戦に七夕祭り使われる
 七夕の願いいくさのない地球
 七夕の笹も折れそな願い事
 七夕の星も一会の相聞歌
 七夕へ赤いほおずき供えます
 年がいてもなく七夕に夢を書く
 天の川亡父母がいて師もおわす
 欲張った笹七夕の吐息さく
 七夕にブラネタリウム夢がある

有一朗 七夕の夜の雷はやきもちか
 公子 織姫になれぬわたしの一人旅
 枯梢 七夕のきれいな里に妻と老い
 富喜子 七夕に語る一夜は短すぎ
 白光子 反核の願いもこめる星祭り
 通彦 来年の約束はせぬ天の川
 いわゑ 七夕の夢は大きいマイホーム
 螢 五色の短冊五色の願い秘め
 重人 住
 宵明 天の川ことさら光るふたつ星
 三男 錆びついた都会見つめる天の川
 和子 織姫のように逢う日待っている
 雀踊子 七夕に女の始末考える
 隆 七夕に逢いたい種火ひとつ持ち
 大柏 人
 清芳 七夕もわたしの恋も雨ばかり
 寿恵子 地
 艶子 童話から覗く七夕美しい
 蘭水 天
 理瑛 七夕に白い願いが一つある
 達子 軸
 浪速子 七夕や恋は決して諦めぬ

七夕へ想い届けるふみ書こ
 会いたしと書く七夕の星の下
 七夕やまだこの村は嫁飢饉
 七夕も今なら平和祈る星
 七夕の星と語るか平和論
 七夕や来世を誓う人が居り
 織姫の涙でくもる天の川

姫女 佳雲 風云児 典子 洛醉 木魚 正敏 浜声 文子 可住 彩子 鉄治 恭昌 シマ子 結実 ただし 温子 しげお 京子 みつ子 たつみ 新 正子

斜め

鷲見 章選



バイアスを生かして春のワンピース
 斜めにも八重にも折って千羽鶴
 野火の舌斜めに土手を這い上る
 浮世絵の雨は斜めに降るときめ
 斜めから見てもやっぱり齢はとし
 よしず張る居職の背へ陽が斜め
 斜めから見ても正面でもすてき
 斜めから世相を見れば黒と白
 好きだから斜めの席にそつと居る
 斜めから見ると手筋がよく判り
 斜めに傘から走る風の街
 木漏れ陽が斜めにうまい握り飯
 斜めから見れば淋しい紳士だな
 傾斜した思想が寒いテモの列
 御機嫌が斜め昨夜の根が深い
 斜めから見れば世間が透けて見え
 斜めに行く方法がある向い風
 結論を急ぎ斜めに読んでいる
 斜めから世間を見てるあまのじやく
 影法師斜めに夏の陽が沈む
 壁の絵が斜めになつて不安
 悪役の顔は斜めにキズを描き

公子 好花 章久 露児 典子 勝美 艶子 悟郎 彩子 やすお 良江 博章 たず子 重人 多賀子 哲静 不二 俊路 杏村 元江 浜声 明水

路 集

善と悪斜めに歩くことにする
朝刊を斜めに読んだ靴すべり

結論を斜めに避ける北の島

命拾った背に斜めの手術創

ご機嫌が斜め無風の鯉のぼり

袈裟斬りに来たライバルを打ち返し

斜めから手を貸す友がいてくれる

余生とや階段斜めに上ります

人生を斜めに見てる万華鏡

日本海雪へ構える屋根の斜度

斜め読みして読書にも飽きる

夏帽子斜めに抜けた風の街

人生を斜めに生きる術も知り

斜めから飛んで来る矢は毒矢かも

哀しみを斜めに切って生きている

住

斜めにも注意 二の矢が飛んでくる

斜めから自信の顔が主張する

高層化ビサの斜塔を唾えるか

斜に構え女しぶとく世を渡り

傾斜する愛は一途なものを抱く

人

はすかいに回り続ける夫婦独楽

斜めから見れば情けの濃さ薄さ

地

斜にも縦にもなって無位無冠

天

斜にも縦にもなって無位無冠

軸

陽の恵み斜めに路地の君子蘭

蝨 度

正敏

有一朗

正子

シマ子

みつ子

杜的

雀踊子

南奉

枯梢

京子

ふさ子

三男

文子

雄々

諷云児

保州

ちよ

寿美

鉄治

あやめ

山本玉恵

泣 く

高杉千歩選



祝い酒矢つ張り父は泣きました

泣き言は言わぬと決めた帯の芯

不似合いな鬼が泣き言ばかり言う

はばからぬ声が泣く子を叱ってる

泣くことを止めねば母は戻らない

泣きことは一字も書かぬ母の便

空涙とはつゆ知らず騙される

泣くことも減って日記が遠ざかる

廃線となってレールが泣いている

泣き上戸せっつかくの酔い醒めてくる

泣きに来た里でよく食べよく眠り

泣き言を言わぬ男について行く

泣く子には勝てず年金持ってゆく

貰い泣き出来るワイフの処世術

お隣も同じ泣き事のぞかせる

お位牌へ泣きことを言う癖がつき

泣かされたつらさ私だけではない

もう泣かぬ女になって貯めている

お隣のポチが泣くから六時だな

テレビドラマも母さんは泣いてはる

泣く時は悲しい時と限らない

美しくドラマのように泣けません

泣くよりも先に手を出す形見分け
思い切り泣けたらどんなにいいだろう
本降りに花は泣き泣き散り急ぐ
泣く奴があるかと自分も泣いている
泣いた子へ臨時停車の縄電車
泣き顔にごめんなきいと書いてある
母が泣く姿を知ってから大人
思い切り泣けば明日が見えて来る
泣き顔は見せぬピエロの紅の彩
泣かされたあの子に預けている余生
どう泣いてみても火の粉ふりかかる
暗がり泣いて泣いて笑顔で戻って来
泣くことがまだ許されぬ崖つぶち
泣き言が郵便受けに入っている
司会者も泣いて番組盛り上げる

鉄治

良江

弧秀

多賀子

ただし

博章

ゆかし

ゆり子

清芳

サワ子

妻子

紀一

文子

はるお

正敏

保州

諷云児

蝨

高夫

薫

しげお

希久子

門谷たず子

野仏のよだれかけにも泣いた跡

泣き真似の九官鳥に騙される

軸

ハル

みつ子

正子

初歩教室

題一耐える

辻 白溪子

今月の題「耐える」は、生活の苦しみに耐える句、特に母が耐える句が多かった。

耐えること風化させまい老いの意地 芳水
(意地で耐え抜いて年寄妥協せず)

耐え合つて尖りもとれた夫婦箸 洋
(夫婦箸耐え合つことに慣れている)

耐える為の仮面干してる日曜日 章久
(粗大ゴミと言われ日曜耐えている)

耐える事覚えた入社半年目 治夢
(耐える事すぐに覚えた新社員)

楽しそうに見えて耐えてる檻の中 好花
(耐える事にすっかり慣れた檻の虎)

老松は大正 昭和 意地で耐え タミ
(風雪に耐えて古木の丸い艶)

大正は明治と昭和の渦に耐え 幸夫
(大正の生れで少うし耐える事を知り)

贅沢で耐えること忘れてる 織
(贅沢に慣れすぎ耐えるのを忘れ)

バリウムに耐えて検診してもらう 志重

(バリウムの不味さに耐えたレントゲン)

春一番ペンペン草が屋根で耐え 春風

(雨耐えてペンペン草が屋根で伸び)

耐えた事知っているのはうちの猫 昭子

(耐えて来た暮しを猫も知っている)

分け合つて耐えた時代の友が逝き 高雄

(苦勞耐え抜いた仲間がひとり減り)

三浪の苦難に耐えてサクラ咲く 和枝

(三浪に耐えて続けるアルバイト)

下積みに耐えて永年古希迎え 明吉

(下積みに耐えて古希までした勤め)

耐え忍ぶことを学んだ背が丸い 敬

(背を曲げてじつと叱言へ耐えている)

耐えてきた母は一度も口にせず ふさ子

(耐え抜いた母の口から出ない愚痴)

戦争と言つ字を耐えた顔の皺 ひさ子

(戦争に耐えた苦勞が皺に出る)

反論をたたく構えて耐えている 美葉

(反論をしたいが暫く耐えておく)

ただじつと耐える学卒に追い越され 保夫

(学歴の差に追い抜かれ耐えさされ)

玉音に耐えて築いた現世代 秀香

(敗戦に耐えて平和な世に変わり)

耐えている証に顔が物語る 友子
(耐え抜いた証が出る顔の皺)

経済大国過去の忍耐継せるのみ ちず子
(耐えた過去忘れ平和に戻る国)

もたれ合う背があるから耐えられる 静子
(信じてる夫いるから耐えられる)

過ぎ去れば耐えた苦勞も語り草 志華子

(耐え抜いた過去を楽しく語り合い)

耐えて尚耳疑つた戦時中 太一郎

(耐えぬいた今日の私に桜咲く)

耐えぬいた今日の私に桜咲く とよ子

(修業耐え抜いて免許がやっと取れ)

逆境を耐えた証の妻の指 金吾

(耐え抜いた苦勞が見える妻の指)

数数のしきたり耐えて国の母 君江

(しきたりに耐えて旧家の嫁に慣れ)

離婚する心子供で耐えている 侑里

(子が一人居るので離婚にならず耐え)

耐えに耐え此の年までも生き続け 一枝

(耐え続けた暮しへ古希がまだ元氣)

耐えることまず第一と婚養子 杏村

(耐える事に慣れて養子は逆らわず)

耐え忍ぶ事を覚えた戦中派 杏村

(耐え忍ぶ事を戦時派まだ覚え)

一息を耐えて越せたら楽に成る 民子

(耐え抜いて手術の痛みやと取れ)

古い家住んで耐えてるいじらしき 姫女

(父の代から耐えている古い家)

七転び耐えて八起きの春をみる 彩子

(八起き目へ耐えた努力が実を結び)

リハビリー頑張り通した汗をふき 春子

(汗を掻きながら耐えてるリハビリー)

親と子の耐えねばならぬ別れあり ますみ

(子との別れ耐えねばならぬ訳がある)

幾山河耐え来た遍路鈴の音 高栄

(お遍路の鈴耐えて来た山と川)

風雪に耐えて春待つ冬木立 絢子

(風雪に耐えて古木も新芽出す)

音痴にも下手にも耐えているマイク 和子

(下手だなあと音痴へ耐えているマイク)

若い日の苦境に耐えた服すてず 静江

(苦勞耐え抜いた服です大事がり)

本当の愛と耐えてる平手打ち 美代子

(平手打ちに耐え本当の愛と知る)

辛抱に耐えた細腕よく動き マサエ

(辛抱に耐え抜き母の細い腕)

耐えること知らずふくらむ欲の皮 みつこ

(欲深い女で耐えた事がない)

父さんも耐えているのか古靴 忠禄

(セールスに耐えてる父の古靴)

本当の愛をさがして耐えている 清流

(本当の愛にしたくて耐えている)

塾通い遊び盛りが耐えている 登代

(遊びたいのを耐えて来た塾通い)

接待のゴルフで耐えて腕を上げ 桂子

(接待に耐えたゴルフが好きになり)

微力とは申せ耐えてる向上心 軒太楼

(目的があるから黙って耐えておく)

限界の頂点で尚耐えている 公子

(耐え難い事を知っているお酒)

耐えているそれより能がない暮し 昭治

(耐えている暮しに慣れて愚痴にせず)

耐えていた膝関節が謀叛する 富喜子

(関節の痛みに耐えた冬を越す)

耐えるなどいやと女の紙風船 しづ子

(風船へ不満ぶつけて女耐え)

この年でまだ出来ませぬ耐える事 円女

(そう若くないのに耐えるのが苦手)

貧乏で貧乏性で生き耐える 幸枝

(貧乏へ耐え抜いている母子家庭)

姑に耐え嫁にも耐えて今日の幸 一乗

(嫁姑互いに耐えて仲がよい)

嫁で耐え姑になっても耐え忍ぶ 喜代子

(嫁さんも姑も耐えていると言つ)

慈悲深く耐えて立ちます大師像 喜子

(慈悲深い仏にすがり耐えています)

耐えることのみ多かりし手をとりに 隆雄

(年金の暮しへ多い耐える事)

耐え抜いて九回裏の逆転打 溪声

(耐え抜いて九回裏に痛打浴び)

下積みに耐えて射止めた主役の座 春枝

(下積みに耐えた主役の芸の幅)

耐えて来た暮しようやく家建てる 友照

(家建てるプランへ耐えている暮し)

耐乏の思い出つきぬ終戦日 方子

(焼跡へ小屋建て耐えた過去がある)

宮仕へ耐えた月日の首洗つ 暁子

(毎日を耐え続けてる宮仕へ)

土俵際耐えて打つちやる技の冴 辰男

(うっちゃれる自信が耐えた土俵際)

着想と表現が巧みな句 公子

家風から耐える女が消えてゆく

古漬けがあぐらの石に耐えている マサエ

重すぎるのれんに耐える古希の坂 ますみ

単身赴任信じてるから耐えられる 侑里

波風を耐えて六十路の峰に佇ち はる子

私句

監督も投手も耐えているピンチ 白溪子

野次に耐え慣れて演壇水を飲む //

題「宅配」 7月15日締切(9月号発表)

宛先 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-19

辻 白溪子

本社 六月句会

六月七日(金)午後五時半
メNZブファツションセンター

梅雨入りが報ぜられたのに晴天がつづき、早や夏の訪れが感じられる七日、出席者は八十九名、司会の奏月さんが選者にあたったため、しばらくぶりで天笑氏の進行が始まり、まず、兼題の「乗る」が「来る」に変更されたことについて弁明。また、このほど句碑建立・句集刊行を行った千原理瑛(岡山)さんが席題の選にあたった。

「おはなし」は野村太茂津氏。いま話題を集めている雲仙の火砕流による被災について触れ、「寝転べば畳一帖ふさぐのみ」の路郎の句を引きながら体育館に身を寄せ合っている避難者の生活に思いをさせた。結びに、来年の全日本川柳和歌山大会に対する協力を要請した。

月間賞は小出智子(大阪市)さん。

(進行)天笑 (受付)美房・凡九郎

(記録)射月芳・月子

席題「枝豆」 千原理瑛選

枝豆の青さと握る大ジョッキ
とりあえず枝豆をとる大ジョッキ
枝豆へ意地がからんでゆくビール
枝豆が昔むかしを語る
枝豆を前に別れが言い出せず
枝豆をぬく麦笛を吹きながら
妻不在枝豆あればそれでいい
枝豆を添えて母から故郷便り
母さんの鬱枝豆をゆですぎる
枝豆があれば機嫌のいいビール
常連に出す枝豆のひと掴み
枝豆の花知らねども酒の友
枝豆で足るひよつとことおかめです
枝豆が美味しい妻も大ジョッキ
白いめし枝豆ちらす季節膳
冷凍の枝豆チンを出され
枝豆で友情温めているビール
休耕田枝豆だけは植える父
枝豆でいいよとビール抜きながら
積乱雲のようビールの泡と枝豆と
枝豆とビールで女よく喋る
殿方よ枝豆の値をこ存じか
たかが枝豆ぐらいいに意地になつて
男と女の会話 枝豆生きている
涙ひとつぶ枝豆いくつもの想い
薄味に馴れて枝豆好きになる
飲まないがおやつがわりに老いの膳

笛生 年代 だし 文子 みつ子 度 恭昌 憲太郎 奏月 元江 柳弘 寿子 月子 トメ子 白浜子 紫香 達子 萬的 三男 智子 吐来 太茂津 千歩 勝美

枝豆であまとりあえずとりあえず
妻の留守枝豆たんとゆてである
枝豆は母の味する塩かげん
黒い枝豆 丹波篠山よいところ
枝豆に妻の小言も添えてある
佳

欲の数だけ枝豆の殻がある
食い意地を張って枝豆空にする
枝豆が育って夏の陽がまぶし
色即是空 枝豆と缶ビール
弾かれた枝豆飛んで雲隠れ
人
枝豆とビール五臓六腑踊り出す
地
白魚の指に枝豆つままれる
天
枝豆を口でしごいて男なり
軸

どれ程の量を食べたか殻の山
兼題「港」 佐藤奏月選
いろいろなドラマへ港知らん顔
教会のチャベルが聞こえてくる港
港町 他人の手相を見て生きる
マドロスの夢を育てて居る港
荒れる日は港やさしく抱いてくれ
空港で終ったものを確かめに
台風は紀州の港こいしがり
逞しい男を港待ちつつけ

ダン吉 シマ子 美房 太茂津 諷云児 だし 文秋 元江 杜的 眉水 悟郎 利武 眉水 理瑛

典子 寿美 弥生 頂留子 満津子 文子 トメ子 美房

海猫を迎えてくれる港町

三百六十五日 祈り続けている港

二度同じ港に帰るのはよそう

港の灯を見ると無口になる男

少年の夢を見つめている港

へばりつくような漁村がある港

逢えばもう別れを思う港町

二階から港が見えたのは昔

港までわざわざ泣きに行ったとき

昔ばなし残る港の裏通り

椿咲くはるの歌で知る港

疲れ果ててやつと母港に辿りつく

コンパスを失くして港に帰れない

後悔はすまい港の灯が笑う

傷心を迎えてくれた港の灯

船歌が聞こえる海のない港

寒流に押しされ港のない女

立ち寄れる港を持っている余裕

鳥の来る港に四季の唄がある

窓開けて淡谷のり子が見た港

自由化の波押し寄せてくる港

肩寄せてタンカー眠る港の灯

風待ちの港で読んでいる漫画

住

港に佇つ若さは今も持っている

港から使い走りのくる夜更け

漁港あれと蟹は横に這う

父帰る港に揺れるものがあり

泣きたくて母の港を呼んでみる

天笑

正子

温子

達子

ダン吉

紫香

美房

勝美

理瑛

雀踊子

笛生

道胤

道胤

理瑛

恭昌

武庫坊

森子

ちかし

美代子

射月芳

智子

はつ絵

幸

吐来

月子

悦郎

恵空

一風

人

酔うても足がきつちり向く港

地

シャンソンの聞える港で出会う過去

天

いつからか男嫌いになる港

軸

火碎流の話で港ねむらせる

兼題「弱い」

西出楓楽選

雑魚だから弱い同士が群れたがる

大声で弱さをカバールしています

弱いのが強そうな髯生やしてる

泣きばくろ情けに弱い女です

合掌の中で弱虫すりつぶし

か弱さを武器におんなは強くなり

気の弱さ庇うつもりサンクラス

弱いのには上原謙か老いなのか

おとなしい相手弱いとみた誤算

花びらを数えて弱い恋が閉じ

人間は弱くて銃を持ちたがる

肩書きを並べてものを言う弱さ

ハイヒール履いてひ弱な土踏ます

人間の弱さを思う多数決

足腰の弱さを口がカバーする

美人だがお脳が少し気にかかる

勝負師が弱気になった乱気流

なぐさめに弱い女のアイシヤドー

弱点を妻の笑顔に救われる

柳宏子

楓楽

透太

奏月

やさしいだけです弱い男じゃありません

左前そろばんまでが弱い音

弱い弱いと言つて長生きしています

弱腰に付けこんでくる星条旗

子を産んで女 弱さを脱皮する

納豆に弱い男の河内弁

寶石に女の弱さくすぐられ

すうとんでおひる済ましている弱気

地獄にわたしの弱み鬼が居る

落日にわたしの弱み覗かれる

弱虫が拳ふりあげたら怖い

気の弱い男は傘を持つて出る

住

強がりと言つと弱さが前に出る

自画像もときどき弱音吐いている

男とは強いと思いたいのだが

オアシスを見てから男 弱くなる

どう足掻いても運命線が弱すぎる

三面鏡わたしの弱味知りつくし

泣いたこと有るから弱い方につく

弱いからかごめかごめの輪の中に

すぐ涙出すから弱いわけでない

メンバーに添わぬが数で入れておく

兼題「メンバー」 春城 武庫坊選

メンバーに添わぬが数で入れておく

メンバーに添わぬが数で入れておく

メンバーに添わぬが数で入れておく

メンバーに添わぬが数で入れておく

メンバーに添わぬが数で入れておく

みつ子

章久

松芳子

ダン吉

路児

度

重人

風云児

美幸

奏月

岳人

元江

幸

智子

美房

冬葉

愛論

満津子

森子

楓楽

奏月

奏月

奏月

奏月

奏月

奏月

奏月

奏月

奏月

メンバーの一人は葬儀委員長
 メンバーが良くて退けない時がある
 メンバーに推薦されてから落ち目
 同じ趣味持つメンバーで輪が温い
 メンバーを外れてバット重くなる
 二日酔い同士で今日の酒をくみ
 メンバーが一人揃わず縄のれん
 メンバー表交換勝ったなと思つ
 メンバーの一人に煮え湯飲まされる
 メンバーが揃つて酒の味が出る
 肩書を外して酒を酌むメンバー
 紅一点のボールよく飛ぶ河川敷
 メンバーの一人不協和音がうけ
 外人が居ぬメンバーで勝てました
 メンバーの紅一点が和を乱す
 メンバーの阿呆に妻も引込まれる
 釣好きの仲間が妻をこき使う
 メンバーの情け折り込む千羽鶴
 メンバーに勧誘されるうちが花
 メンバーを外れてからの風当り
 メンバーにもて家では粗大ゴミ
 秀才がいてメンバーが揃わない
 合鍵があるメンバーの不祥せ
 メンバーにライバルがいて寒い風
 メンバーにこつもりも居る鳩も居る
 鴨になるメンバーばかり選つて
 車座になれるメンバー温かい
 生き残る戦友のメンバー表がある
 メンバーに妻より姑が控えてる

岳人 理瑛 露児 諷云児 二南 一風 杜的 度 公一 典子 公一 典子 達子 柳宏子 紫香 結実 笛生 奏月 千秀 仙吉 失名 千歩 千歩 柳伸 トメ子 みつ子 保州 英壬子

メンバーに欲しいが敵の智恵袋
 メンバーの中で泳いでいる安堵
 メンバーの一人に洒落が通じない
 メンバーの一人が毒を持っている
 住
 メンバーが欠けると風が重くなる
 メンバーにつむじ曲りもいて楽し
 メンバーを抜けて一人の風の彩
 人
 メンバーチェンジすると空気が白くなる
 地
 メンバーに恋人がいる登山帽
 天
 ダントツがないメンバーの夜が温い
 軸
 メンバーの一人がうまく絵にならぬ
 兼題「来る」 玉置重人選
 幸せが来ると信じて門を掃く
 その時が来てもあわてぬ稽古する
 悪友の来るのを待つて疲れてる
 来るこないやきもきしてる花時計
 ちっけな土地へ蟻たち寄つて来る
 夏好きが西瓜を一つ下けて来る
 かばちの馬車来るのを待つている少女
 嫁貰う話へ故郷の母が来る
 傷ついた犬を子供が抱いて来る
 居心地がよいのか今年も来たつばめ
 来る時が来たと諦め切つた顔
 悟郎 萬的 文子 文子 英子 元江 元江 年代 吐来 武庫坊 公一 仙吉 美房 頂留子 柳英子 三男 利武 惠空 杜的 二南

待ち人が来る古いを信じてる
 三叉路に来ると生きさま試される
 鬼の来る玄関に貼るお札です
 梅雨の晴れ間に弔問客がやって来る
 風と来て風と去る日の風媒花
 断わりの返事見事な文字で来る
 税務署がこんな小さな城へ来る
 火を溜めた言葉いつたり来たりする
 他人とは思えぬ顔と乗り合わず
 春が来て帽子を一つ見失う
 招かない客が手ぶらでやつてくる
 来る来ないそんなシナリオくりかえず
 来客へ少しリッツちに茶を入れる
 飽食にきつときびしいツケが来る
 時来れば明け渡す城磨いでる
 一人で来るから疑う他人の目
 もう少し話延ばせとメモが来る
 叱言言う母とんでくる九度三分
 土壇場に思ひも寄らぬ人が来る
 風紋が消えて別れの時が来る
 心の向き変えたと幸せきつと来る
 住
 又来るを信じて燕の巢を守り
 ゴミ袋もつて主人がやつてくる
 そのうちに輪廻の報いきつと来る
 枇杷の実が熟れて花嫁やって来る
 ハッピーな夜にしたくて赤を着る
 人
 親戚になる客が来る水を撒く
 温子 楓楽 鬼遊 森子 美代子 諷云児 英一 寿子 美房 正坊 正坊 幸 冬葉 白洋 千秀 柳伸 三男 柳仲 二南 弥生 柳宏子 栗 美幸 幸 月子 吐来

地 天

開店へ乗り継いで来る友の汗
 嫁が来てからは上手に馬鹿になる
 来客へ花輪を挿し替える

憲太郎

楓 楽

重 人

兼題「父」

西尾

栗 選

亡父の釘がまだ利いている帽子掛
 ハーモニカ吹いてる父の持つロマン
 だんじりの好きな親父の祭り月
 尊氏の父は結局弱い人
 恐れ入る庭師に父の一家言
 母さんが美人で父が可哀想

幸

ただし

章 久

友 照

憲太郎

規不風

千 歩

温 子

杜 的

射月芳

雀踊子

正 子

緑 良

楓云児

奏 月

愛 論

笛 生

白 子

筑前琵琶烈しさをます父の闇
 すき焼に父はうるさい鍋奉行
 過労死は大丈夫かなお父さん
 居酒屋の父は話がよく分かる
 花嫁の父や今日だけ泣かしてや
 父もじいちゃんもチャンバラが好きだった
 父ちゃんの酒はゆつくり笑い出す

父の年になって歩幅も父に似る

ちかし

賞罰無し細くても長い父の臍

信 義

おやじと呼ぶ息子ふたりが父になる

雀踊子

父の日に父と呼ばれるのが怖い

蝋 子

父として苦言を一つ抱いている

智 子

ワンポイント遅れて父のきつい洒落

萬 的

出世して父の無口を自慢する

しげお

産休のパパ パチンコに負けている

重 人

生真面目な父で妥協が大嫌い

楓云児

ムキになる父に私を見てしまっ

保 州

父の浮気もじんわりわかる齢になり

吐 来

客が去ぬまではパパ、パパ言いすぎる

しげお

森繁の歌が得意なお父さん

保 州

つまずいた石に父の声 母の声

弥 生

父を継ぐ杭一本が打ってある

森 子

弱味あるらしく父さんよく喋る

柳宏子

茶筌から雫が漏れる父の部屋

岳 人

長女だけ父の味方をしてくれる

二 南

何時までも父で寝返り打っている

智 子

受付でどなっているのは父の声

栗 葉

▼訂正 五月旬会の席題「傷」の「傷つい

た同士で肩が近くなる」の作者は、ただし

んでした。

新同人紹介

〒561 豊中市服部本町1-11-10

電話 06-8662-7347

滝北博史

〒561 豊中市稲津町2-15-1

電話 06-8664-5657

三宅つえ子

〒583 藤井寺市恵美坂2-8-10

電話 0729-55-5049

中島志洋

〒725 竹原市竹原町中

電話 08462-4554

山内房子

川柳塔社常任理事会(6月1日)

▽滝北博史(豊中市)三宅つえ子(同)中島

志洋(藤井寺市)山内房子(竹原市)の同

人推薦を承認

▽5月現在の同人・誌友数を報告(会計部)

▽合同句集・路郎物語の出版について検討

京都塔の会吟行

本 莊 福 子

塔の会の「春の吟行」に初めて参加させていただきました。当日の五月二十六日は、雨男・雨女がいなかったせいか、予報を裏切って初夏の日射しが強い一日でした。

午前十時に北大路に集合した一行三十二名は、バスで神光院前まで行き、まず、正伝寺へ向かいました。住宅の間に点在する畑の豆やねぎ坊主を見ながら着いたのは、「観光寺院」とは趣きの異なった、人の手の入らない小さなお寺。所々に皮をつけたままの若竹の猛々しさとその肌の美しさ。枯葉が舞う石段そして、素朴な方丈とおどろおどろしい血天井。手の形、足の形を明らかに残しているそのむごさ。片隅に置かれた雑記帳に記された若者たちのこの古い小さな寺への思い入れ。正伝寺から神光院へは下り道。失礼ながらと裏口からお邪魔しましたが、こちらは手を入ったお庭で、開け放った部屋では、早や作句に入る人も。時は正午過ぎ、落ち着かないのはお腹のせいかと早速、「お昼御飯です。京都らしいお膳の棚から楽しみながら料理を出

して、眺めて、味わって。出句締切の時間を気にしながらも結局、全部きれいにたいらげました。

句会は、萬的さんの古代京都のお話から始まりましたが、披露の際、日ごろ活字だけで存じ上げている方々のお顔とお声を知りました。千代紙細工のおみやげをもらっての帰り道も、まだ太陽はキラキラ、立ち寄った喫茶店の冷房の気持ちよかったこと。この吟行で多くの先輩にお会いでき、少しでも皆様とお近づきになれば、参加した甲斐があったと喜んでおります。



私の句碑

平吟 宗二

今から約二十年前のある日、柳友の行本壬さんがリヤカーに小さな丸い石を積んで私の家を持ってきました。「何にするのか」と聞くと、「これに川柳を書いて庭に転ばせておけ」と言うのです。ちょうど家内がいなかったので、コップで冷や酒を飲みながら句集を探しましたが、これはと言うような句が見当らず、その後、家内に調べさせてもやっぱり

〈当日雑感から〉

風光る 京洛北はすでに夏
野苺の赤がうれしい洛北路
山も木も風もみどりの中に古寺
なだらかに浄土へ続く正伝寺
方丈の風おおらかに比叙呼ぶ
遠州作の枯山水に風動く
獅子の児が渡るか風がびたり止む
落城の無念を偲ぶ血天井
参道に落葉しきり竹の秋
満ち足りた心へ京の普茶料理
やすらぎをもらう大師の神光院

西出 楓葉
松川 杜的
板東 倫子
松本ただし
小林 英子
阿萬 萬的
都倉 求芽
川島颯云児
田中 正坊
藤村 メ女
堀端 三男

良い句がなかったので、溝の中に転ばし、そのまま忘れていました。
このたび、庭に新たに車庫をつくることとなり、溝の中の石も捨てようとなりましたが、ふと昔のことを思い出し、駄句をつくって刻みました。

丸うなれまあるうなれと石の声 吟平
下手な字でも、私がつくって書いたものです。今は亡き行本壬さん、ありがとうございました。たとえ拙い句や字でも、あなたのお心や亡き妻貞子の思いがこもって、昼となく夜となく私に呼びかけてくれています。丸うなろう、まるう生きよう。この石こそ、幾万年も雨風に揉まれてきて、その生き方を教えてくれているようです。

何時までもささやく石の友ができ 吟平

暑中お見舞い申し上げます

平成三年 盛夏

第十六回 全日本川柳大会は左記の通り
和歌山市で挙行することになりました。
皆さまの絶大なお力を戴きとう存じます。

大会実行委員長 野村太茂津

記

- ・と き 平成四年六月十四日（第二日曜日）
- ・ところ 和歌山県民文化会館大ホール
- ・前夜祭と宿泊 平成四年六月十三日（土） ホテル東急イン

山柳塔わらわ

南大阪川柳会

毎月句会は19日です

お気軽にお越し下さい

参会者一同

姫路 川柳化粧櫓の会

暑中お見舞申し上げます

平成三年 盛夏

服部 一典	保西 岳詩	本多 茂章	丁坪 サワ子	大原 葉香	川島 春蘭	中塚 遊峰	内海 美代	山崎 治夢	松浦 大鷹
松浦 輝月	福本 好花	福島 姫女	丸尾 はる子	駒井 はる女	北山 越山	美原 嘉	菅原 朱玉	植村 客遊子	

暑中お見舞い申し上げます

高槻川柳サークル卯の花 一同

八尾市民川柳会

暑中御見舞申し上げます

久世川柳クラブ

二	森	伏	三	池	杉	矢	富	後	後	牧
宗	田	見	村	田	本	野	坂	安	安	野
吟	甫	す	美	半	伊	山	志	江	ふ	秀
平	正	み	恵	仙	久	人	重	山	さ	香
		れ	子		栄				え	

暑中御見舞申し上げます

三幸川柳教室一同

事務局 〒640-01 和歌山市西ノ庄239-23

桜井千秀

暑中お見舞申し上げます

熊本川柳会

黒田 緑
有働 芳仙
鶴田 謹爾
遠山 夏生
北川 一進
高野 宵草
永田 俊子
宇野 昭代
大川 幸子
岩切 康子

尼崎
いくしま川柳会

例会 毎月第一金曜日午後1時

サンシビック尼崎三階
(阪神尼崎駅西南三分)

尼崎
おはま川柳会

例会 毎月第一、三火曜日午前10時

尼崎市尾浜二丁目五―八
尾浜公民館

尼崎
小園川柳会

例会 毎月第二、四水曜日午前10時

尼崎市若王子三―二―二一
小園公民館

サークル 檸檬

橋	伊	木	池	友	新	楠	大	松	片	田	藤
高	奈	内	尾	碓	開		澤	本	岡	形	田
薫	ます	キ	登	雅	千	美	三	今	智	美	泰
風	すみ	ミ	美子	子	代女	子	四子	日子	恵子	緒	子

暑中お見舞い申し上げます

岸和田川柳会 一同

事務所 〒596 岸和田市上町7-36

植山武助

電話 (0724) 39-0836

兒	田	武	三	吉	高	楠	高	赤	菊	高	福	中	中	吉	笠
他	島	中	部	崎	田	田	田	木	地	津	元	島	原	岡	原
一	与	孝	敦	伴	つ	治	昭	美	和	繁	三		志	比	美
同	呂	子	子	子	や	子	子	代	子	男	郎	稔	洋	呂	房
	志				子			子					志	志	江

川柳藤井寺

■各地句会だより

うみなり川柳会

森田熊生

うみなり川柳会は、昭和三十三年六月から始まった日本海新聞柳壇の投稿者が一同に会して友好を深め、川柳を勉強していくことを目的に、昭和三十八年六月、森田茗人を会長、加藤貞山・小林由多香氏らを幹事とし、「日本海川柳友の会」として結成、昭和五十年七月、「うみなり川柳会」と改称して現在に至っている。

昭和四十一年九月、川柳手帳『うみなり』を出版、会員の作品のほか、川柳の生いたち・三要素・作り方などを分かりやすく解説、県下川柳人の参考書として愛読されたが、同四十三年十一月には、森田茗人句碑

風のいとのばしてかぜにさからわす

を建立、故人となられた大嶋濤明・清水白柳氏ら多数を迎えて記念川柳大会を開催した。

昭和五十一年八月、茗人の死後、小林由多香氏を会長として再出発してから十四年、平

成年から森田熊生が会長となり、新しいうみなり川柳会を運営、毎月例会、吟行会、八月の茗人忌川柳大会、鳥取市民文化祭参加川柳大会等を開催している。

なお、茗人のよき川柳仲間であり、当会を温かく見守って、激励し、相談役でもあった河村日満前鳥取県川柳作家協会会長も、昭和五十八年十月に永眠された。

昭和五十一年十一月、毎年開催している文化祭参加川柳大会と併せて、森田茗人追悼川柳大会を開催、翌年から八月に茗人忌川柳大会を開いて今年で第十五回となる。この大会には、第一回から西尾菜主幹、橋高薫風理事長、黒川紫香・野村太茂津副主幹、西田柳宏子・阿萬萬の副理事長ほか、常任理事、参事、理事の先生にお話や選をお願いし、毎年、多数のご参加をいただいております。多表彰される「茗人賞」は、県下川柳人の励みとして注目を集めている。

鳥取市民文化祭参加川柳大会では、同時に川柳色紙短冊作品展を開催しているが、茗人の言っていた「川柳の色紙や短冊は、句意を大切に、書くのではなく画くのだ」を心がけた作品を持ち寄って展示している。

かつて茗人はある本に「うまい句」と「よい句」と題して、「うまい句」と言うのがあ

る。これは言い換えれば「器用な句」であつて、技巧的に上手に纏めた句である。(中略)私の詠む川柳には、私の生活が滲み出ていなくてはいけません。私の句帖は、即ち私の人生航路の記録でなくてはならない。だから私が川柳を詠み、私の川柳が磨かれて「よい句」を作るようになることは、即ち私と言う人間が次第に磨かれてゆくことなのである」と書いている。人間を大切にして川柳を磨き、「よい句」を作ることを目標にして、明るく楽しい川柳会になるよう、会員一同、勉強しながら励んでいる。

今年で第十五回となる茗人忌川柳大会に同



人・誌友の皆様の参加を心からお待ちしております。いま

老地獄壇

原稿は川柳塔社事務所へお送りください
毎月25日締切・30句以内厳守。所定の原
稿用紙に清記をお願いします。 編集部

岸和田川柳会

芳地 狸村報

温もりを与えてくれる国なまり
マヒの子に天が与えていた画才
板さんの下駄にたまった夜のうっ
板前が腕を買われたバスポート
一重散り八重に移って春が去る
奥様のグルーブ今日はグルメ旅
世はうつり女も強くなりました
しあわせを与える花の種をまく
安心感与える父のてかい靴
筋通す明治の母の襟の芯
襟合わずそぶり女房はまだ女
詰衿の祖父を見直す一ページ
ねんねこが若奥様によく似合い
奥様の顔でピアノの子を眺め
ボスになれない猿 襟首に傷がある
うつり気な蝶へ花芯は逆らわず
夢二の絵 女の性が襟にある

富志子 通彦 浪速子 希久志 さよ子 ころ 狸村 ひで すみえ 恵空 白光子 勝晴 武助 作一郎 甘平 萬的

風邪癒るまでは抱かぬと子煩惱

川柳化粧檜

植村客遊子報

柳宏子

父の日も父は仕事の靴を穿く
順風へポツカリあいた落し穴
寡婦はなお義理という字を大事がり
一步前進 夢ばかり追うカタツムリ
亡姑に掌を合わせて捨てる粗大ゴミ
不器用をあらためて知る妻の留守
酒とろり美女はべらせた夢を見る
子の宝 親にも見せぬ甲虫
童心を愉快にさせた蟻地獄
勘違いしないで奢るのはうどん
告白へ震度七程揺れた椅子
君が代が流れて感動老天生
散り際はそれぞれ違ふ形持ち
孫思う人の子見ながら自我意識
身を八つに裂いて入れたい地方選
神様へ無理を承知の百度石
ぐい飲み 燗徳利は雑魚寝する
春浅き桃の節句に老友と酌む
二度三度死線を越えて今日を生き
中天の月を酒盃へ受けて飲み

高槻川柳サークル卯の花

辻白溪子報

もの怪が落ちた明るさ退院日
淋しさに耐えた鍵っ子よく眠り
当選を待ってましたと蟻の列
うぬばれを横に積んでる三面鏡

茶の子 春風 波留吉 武庫坊

駅までの距離のふたりに桜散る
風雪に耐えて南天の実が赤い
控えめにしていると座る場所がない
耐えきれぬ顔が古参の中に有る
膳だけが並び団体集まらず
冗談が過ぎて警察沙汰になる
冗談にして置かないと損をする
どん底を耐えて何にも恐くない
美しい嘘で女の二枚舌
当り券捨ててしまった競馬場
早合点他人の空似へ声をかけ
早合点誤解が一人歩きする
冗談が本気になって旅に出る
欲のない人に効かない鼻ぐすり
冗談にしては野心が見えすぎる

川柳クラブわたの花

片上 英一報

柱時計老いて時どき嘘を言う
四月馬鹿男待たせる花時計
家計簿の自分に嘘をついている
酔うほどに嘘とほんまが入りみだれ
さはよんだ年もうっかり干支でばれ
信じてるえらいお方がうそをつき
結局は妻にあやまる意地と意地
ポケットに嘘をくるんだチョコレート
錯覚が一人歩きの青春でした
褒められて嘘でもうれしい四月馬鹿
大人読む漫画たのしい嘘ばかり
嘘のない政治 夢ではない一票

シマ子 章 ますみ 君江 幸枝 泰成 しげる 春子 正子 初子 トシエ みき子

嘘少し入れて賑わう花の宴
嘘のある話が沸いて花が咲き
天気予報真面目にやっても嘘となり
千三つと嘘八百を勝負させ
嘘嘘でがんじがらめな街あかり
野も山も人も色めく季節です
花屋にも色あふれ出す春盛り
色々選べるうちがまだ花よ
木もれ陽にモデルを写す色変化
海は青空も青色娘はピンク
色のよい着物を着ていい娘
酔顔ににぎにぎして感謝の日
丸くなり何かに着つけて感謝の日
茶断ちした母の話をあとで知り
ありがとつと言えないボチが尾だけ振り
親からは感謝されてる保育園
政治家が嘘をつくの困ります

久世川柳クラブ

二宗 吟平報

美恵子 一雄 弥生 その 弘直 英一 龍襄 龍 暁子 明子 丈夫 朝子 一風 友甫 美津留 鬼遊

年を取り許しておこう怒る癖
許されて許して夫婦の長い旅
手を握るまでは許したきれいな目
着飾った群れを見に出た猿の群れ
おっぱい川柳会
松村迷観子報
申し分ない話にも裏があり
老人会真赤なシャツが踊り出す
愚かしい戦い終って病む地球
サンクラス外せば優しい目に出合
春がすみ墨絵のように浮かぶ島
過疎の村忘れず咲いた山桜
行き先を決めたらミシン良く走り
ボカボカと睡魔が仕事の邪魔をする
筋道をたどって見れば迷路抜け
子も親になって賑やか喜寿の膳
さわやかに娘の服も桜色
定年後いつか忘れる友の顔
参加してあの人の人みな元氣
暮しよい所なんだか住みにくい
無投票ただ酒飲めずがっかりす
白椿咲いて邪念が一つ消え
蝶がとぶ心わくわく新学期
手芸作 孫にほめられVサイン
川柳ねがわ(3月旬会) 高田 博泉報

美恵子 ぶさえ 邦人 賛平 迷観子 マサエ 迷香 迷香 放任 明人 かおり よしみ 伽名子 チカエ 正雪 いさむ スミエ 吟笑 迷貫 白柳子 白柳子 菜実子 ふみ

思いやり親になつての変わりよう
過労死にならぬ程度のやり手です
駒子のいな雪国の旅ひとり旅
花活けの水替えている外は雨
遊女みたいに写真が並ぶ選挙戦
そのひたい嘘うそ嘘と書いてある
思いやり受けて自分を見失う
選挙戦米の足しにはなりませぬ
金包み無口な父の思いやり
母さんはお針上手で育て上げ
妥協ぐせ付いて目方が軽くなる
初耳のふりして聞いた思いやり
ライバルを丸めて飲んでるやり手
顔のない人も揺れる終電車

佳句地十選 (六月号から)

三宅 保州選

勇太朗 吉之助 磯 冬葉 波留吉 速水 君子 眉水 光子 かずみ 静江 藍子 一途 時弘

修水 てる 諷云児 志重 栄恵 二南 与呂志 幸 柳宏子 度

戦友会みんな薬を持っている
春風におどる家族の竿ダンス
和紙作り夢を描いた春の虹
苦も染も耐えたノレンの色も褪せ
点滴のリズムに温い血がめぐる
幾山河子に支えられ今日があり
嬉しい日 花念入りに生きている
ささやかな今日の笑顔を忘れない
今日も拾う空缶三つ小さい善
許すとは言わない父が孫を抱く

思いやり父と母とでまた違い
勝敗はとうに終っている選挙
実直に歩くひたいに向う傷

弔電に選挙の匂う名が並び
思いやり黙って一人旅させる

公園で孫と遊んでいるやり手
大股に北の新天地を行くやり手

桃活けて八十路の母はまだ若い
未亡人のことで町長さん落ちる

下積み苦勞が光る富士額
こんな時知らん振りする思いやり

涙壺やり手の母が抱いている
たこ焼を焼く手で世間ばなしなど

妻はまだ見てないというお水取り
猫のひたい程の庭にも四季が満ち

大臣も株屋もやっていたやり手

川柳東大阪

森下

愛論報

休火山思わず妻の薄笑い

残り火がそこはか匂ううす化粧
悔恨を火の粉で禊ぐお水取り

まぐれとも言える予言が財を成し
苦勞する母の予言に背を向ける

順風万帆少し驕りのある予言
一杯の水にいのちがある砂漠

精いっぱい生きてほとけの顔になる
心にも愛一杯に広い胸

予言者の迷い人間臭くなる
吉凶の通知ハガキに決めたのだな

ポストまで来たに一円貼り忘れ
筆不精ハガキの余白もて余す

簡単にかね貸しますとくるハガキ

英子

一芳

度

おさむ

あいき

外吉

おさむ

あやめ

シマ子

紫香

薫風

柳宏子

良三

美子

雅士

マネキンを裸にさせる好きな柄
ロボットに負けた人形窓際

人形でないから始末に悪い妻
寝たきりの人形抱いてうつろな目

川柳岩出 小倉 アサ報

仲直りしたはずの瞳が笑わない
寄り添って小さな傷を拭い合う

将来をもて余す程夢を積む
作業着の仲間待ってる土と鉄

将来を思えばわたし眠られぬ
おしどりが妬くほどベアの仲のよき

夫婦仲喧嘩するのは茶飯事に
将来を永い目で見る親心

手をつなぎ仲よし一年門くぐる
将来を子供にかける親のエゴ

将来を思えばこそと子を叱り
夫婦仲奇妙なものと思いつつ

仲の良い夫婦に刻む皺の数
将来を織る横糸にある不安

将来の夢がわたしを弄ぶ
平然と仲間裏切る鉄面皮

どの木にも将来夢見て根を下ろし
添い寝する母がぐっすり寝てしまい

岩美川柳会 羽津川公乃報

ロボットに生活圏を攻められる
口紅を引くと女が動きだす

栄転と言うタイトルで左遷され

孤舟

度

頂留子

勝美

精子

英子

昌子

綾子

アサ

和子

義美

千代子

喜市

永年

悦男

札束で買えぬ宝を積んで病む
女房の口に栓して昼寝する

胸襟を開く栓抜きなら貰う
耳に栓して一刻をバカになる

栓抜いて人の意見を聞き入れる
やがて来る脳血栓の立ちくらみ

耳栓をしてから浮世静かです
血液の流れに栓はせぬように

倉吉川柳会 渡辺 昔句報

見つめればやはり先祖に似てる猿
公園の風で気分を入れ替える

山家より立派に見える猿ヶ島
腹に一物あれば笑顔は出来ません

エチケツト気にして酔いが回らない
春夏秋冬絵心だけは忘れぬ

公園を素通り出来ぬ花づくし
花咲いて猿のストレス重くなる

タンポポの笑顔がとても温かい
公園に天女の降りる池がある

負けた日の涙で描いたガラスの絵
手鏡の笑顔次第に母に似る

みつめてる猿に私が無視される
公園で肩を抱かれた事がある

春や春山の公園動きだす
山水の画になる里に子は住まず

この風にどんな笑顔を咲かせよう
猿よりも上手に栗を剥いている

俺だけが貰った笑顔だと思つ

美恵子

芳江

公乃

由多香

照女

大漁

忠良

玲子

秋人

康志

雄々

美智子

和枝

喜与志

勝見

絵の下の値段を先に見てしまつ失敗をして謝っている笑顔
お猿にも美人不美人あるだろうな
ドアノックせずに娘に叱られる

三幸川柳教室

三宅

保州報

完司 螢 由多香 独歩

独り居の不足を抱いて宵寝する
不足など知らぬメダカが群れている
何不足ないが合わないワイーリング

物差しが長くても不足出る
物不足乗り越えてきた知恵袋
原点に戻し過不足確かめる

説明をすれば決意が鈍りそつ
説明どおり演じてくれぬ影法師
説明をすればこだわり深くなる

説明のとっても好きな薬指
説明に解説つける評論家
口開けて返事求めている歯科医

若さ誇示した日を思う糸切り歯
豪邸に住んで心が痩せている
たすねれば桃の花咲く家はなし

歯石落とすように法話を聞いている
所詮泡説明すると愚痴になる
思考力不足迷路が抜け出せぬ

不足した言葉が溝を深くする
本当の不足誰にも話せない
決めかねているのは不足ない釣書

説明書わざと小さい但し書き
モンローは腰で説明してくれる

千枝子 美子 一郎 純子 三代 三千子 博章 好笑 幸子 百合子 信一 親路 靖子 茜

戦友を亡くす気持で虫歯抜く
歯がゆいが約束だから言わんこと
モデルハウス土地の値段が書いてない
上司への不足呑み込むコップ酒
説明を読まぬ三文判の悔い
寒行の歯の根も合わぬ結跣座
雑兵もひとりひとり家に家がある

川柳塔唐津支部

久保

正敏報

正雄 備美子 孝子 仲幸子 鉄治 朱夏 保州

公約と笑顔当選する日迄
九条は曲げず湾岸への支援
ゴルビーの北方領土も夢と消え
春二番ホリユーム掲げて吹き抜ける
音のない野球へテレビ買いました
違反車の女性は注意だけで済み
酔えるものあれば辛さも耐えられる
買えぬ家チラシの上で夢を見る
妬いて見せもてない亭主喜ばせ
退院の別れを惜しむナースの手
茄子トマト植えてねんころ水を撒き
バーゲンはバーゲンなりの価値悟る
いいことがありそな日です花を買つ
初恋を語る夫の得意顔
最悪の友が居居わる妻の留守
敵を知り己を知って手を出さず

川柳塔とつとり
岩原 喬水報
粗粒

朴竜 弘 剛司 虹汀 旭恒 四郎 高明 高ハル 幸夫 喜久亭 紀一 治幸 ふさ子 ちよ 義美 正敏

税務署で答える声も震えだす
大声で呼んでも過去は戻らない
天の声聞いて余生を暮します
春休み童の声もこだまする
因縁を断ち切る神の声をきく
人ひとり蹴落とす声に棘を持つ
糸切り歯入れ歯になって噛み合わず
指切りが出来ぬ電話がもどかしい
可愛くてどれも切れない花ばかり
手を切った苦の女に呼び出され
花を切る未練断ち切る音で切る
ひとり立ちさせたい風の糸を切る
今日もまたひとつのいのち切り刻む
勝つよりも勝つて見るまで夢走る
マルクスも物資の不足には勝てず
不戦勝すつきりしない顔してる
言い勝つてからのお酒に味がない
勝つために今は小さな芽を育て
勝つまでは互いに席をゆずらない
勝つているときは味方は多くなる
勝つことにこだわり敵が多くなる
勝利へのスクラム水も洩らさない
勝つて泣く涙と汗は惜しまない

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

山人 艶子 喬水 政子 千秋 帆雀 風袋 よしお 一枝 侑里 天涯 旋風 行男 忠雄 友夫 亨 輪多朗 登美枝 俊路 圭一郎 多可志 由多香

手ごろとも言えぬが平和を金で買ひ
投げたいが手ごろの石がみつからぬ
手ごろなら明日でもウンと言わせませ
人の世や手ごろな椅子は人が座し

はるみ 蔵栄 民子 鈴江

ふところへ手ごろな策を抱いて出る
フセインの誤算 自慢のヒゲが泣く
生きる術また足し算をしています
泥舟に狸まんまとのせられる
さっぱりと明日へ誤算はもち越さぬ
金封の中身誤算でしたとも言えず
セールスが寝た子起こしたまま帰り
風雪に耐えた桜が派手に散り
翔んでいる女にも涙のある誤算
あの時の誤算女の子が生まれ
一ミリの誤算ゆるさぬ外科のメス

川柳塔さやらばく 政岡日枝子報

蝶のむくろをおみこしにする蟻の群れ
サボテンが届かぬ愛に渴き切る
渴く土少しずつでもしめらせる
友と別れてひとり映画をみる渴き
花便り涙の渴く頃に來る
カラオケをやりすぎのどがからからだ
かごめの輪泣きなき渴く鬼の首
砂渴くピースシャワーよもつと降れ
ホリヨの口渴いていくさ止めにする
渴ききつた砂漠が割れて声がする
病み呆け渴いた心何処さまよう
幼な子の声の渴きが気にかかる
白旗でのどの渴きを訴える
水たまり渴きドラマも生まれぬ
吃水線で愛の渴きもがく子等
欲求不満が渴いた声でカラス啼く

かつ子 ヒデ子 芳枝 好栄 聖子 ちよえ 智重子 悦良 博利 清泉 白汀 登栄 朗子 八重子 瑞枝 富美子 保子 てい子 寿々子 やえ 千春 松子 恵子 ふみ 日枝子 花子 玲子

難を流した川がゆっくり渴き出す
田が涸れて位牌のうらも渴き出す
川柳さやま社 遠山 可住報

裁縫が苦手でつけがまわって來
知らん顔してるとお金逃げないか
善人の掌 小鳥は知っている
大きな目もルンルン花吹雪
青い鳥ばかりを追って夢に泣く
生臭い話にカラス寄って來る
通らない話を安く売りに來る
頑固さが取得で老舗繁盛し
雀百まで紅を刷く喜寿の母
吹雪く夜戸をたたやくに水子を想う
欲深いだけが取得で金を貯め
幕引きはするが取得のない男
飛ぶ鳥を落した過去へしがみつ
取得ないどうしへ金婚式が來る

京都塔の会 松川 杜的報

半分はうっとり聞いていた小言
モノトーン北国の春雪の下
旗色が悪くてやり場のない尻尾
色直し見えかくれする親の見栄
昼間だけ育てていますママパート
シナリオの通りにいかぬ子の育ち
炊事洗濯おんなも強くなりました
究極は酒の肴になる料理
お隣の炊事場借りている葬儀

千代 荒介 純子 つや子 ヒサ子 和子 靖子 とみ子 富美 百合子 テル 素水 越山 文平 可住 風云児 福子 求芽 圭坊 花代子 芳子 年代 白溪子

共稼ぎ今夜はパパのオムライス
欲のない姿で妻が炊事する
炊事場にメモと鉛筆置いてある
炊事場でお帰らなさいと言っている
お炊事はいたしませんと女優妻
週休二日男の料理も腕を上げ
名匠の指揮へ満場声を呑む
スピーチが途切れる三度の色直し
遺伝子のせいとも知れぬ子の育ち
すすすくと育つた子らのしサイズ
船場育ちで商いの裏妥協せず
子育てがまだ終らない石の上
育つ子の伴せ願う神の鈴
今週の炊事洗濯パパの番
晴れたかと思えば曇るお水取り
それぞれの孫のどっかにいる私
淋しさと背中合わせに日自由
思い出のモカフラックで飲んでいる
亡母の日は小さい善を志す
襖越し聞えています軽い咳
一泊へ雨の支度もして出掛け

川柳藤井寺 高田美代子報

似たような公約ばかり聞かされる
子の頭なでて一票とれるなら
政策は次の次だよただ連呼
銭湯で背中流している選挙
当落を片目でにらむダルマの目
子供にも笑顔手を振る選挙カー

柴 萬的 杜的 紫香 英子 葉子 百合子 倫子 ただし 正坊 武庫坊 しげお 巨詩 笑女 はつ絵 てる 達子 幸 美穂 水客 宗一 三夫 ときお 利武 治子 志洋

ひとり居を気づかう電話の定期便
 緊張は優しい女医の声で解け
 夜叉の面とれば優しい妻の顔
 優しさを鬼の刑事が持っていた
 気の優しい鬼で時々歯が痛む
 優しいが少しお喋り多すぎる
 三浪目母の優しさ子に重い
 白い杖風がやさしい曲り角
 いたわってやらねば地球泣いている
 また会いましょう野にあるものは野に返す
 食虫花こんな優しい貌をして
 正座して心の尖るのを静め
 朝帰りツンツン尖る顔浮かぶ
 ゴルバチヨフ温い握手に尖る胸
 尖るだけ尖って折れて丸くなり
 幼児には悪魔のような注射針
 昭和史の尖った心伏せておく
 つんつんと尖るつばみに出た丸味
 尖がり帽角をかくした鬼に逢う
 埴輪まだ鍔尖らず夢を見る
 パラの美学かも知れぬ刺がある
 ふるさとの風も尖っている負い目
 さりげない所作に蝶がふとのぞき
 孫娘に祖父母が送る百鶴の図

はびきの市民川柳会 塩満

赤坂の蓋ある話嗅ぎ付ける
 銭もなし十連休は寝て暮らす
 菓屋が開けるほどにくれました

政代 信子 三郎 寿美 繁男 修六 一屯 和子 美代子 与呂志 淑子 寿美子 知之 智久 ケイ子 昭子 正枝 美房 悦子 吸江 キミ子 伴子 敏報

利武 忠宏 ダン吉

弁当の蓋から食べる戦前派
 連休で知った車の便不便
 臭いもの何時もふたする議員達
 鍋の蓋みがき女の城まもる
 われ鍋を恋うとじ蓋の余生です
 次の世は益虫になれあぶら虫
 終電車街の疲れを持って来る
 泰山鳴動ゴルビ旋風吹き抜ける
 ユーモアか小便小僧のその手にも
 終章の蓋をのぞけば菊うう
 連休やただひたすらに歩くだけ
 長電話ぶつぶつ怒る鍋の蓋
 連休に挑む財布が軽過ぎる
 ユーモアが神話の中にたんとある

尼崎いくしま川柳会 春城

子供の日父さんばかり機嫌よい
 古希過ぎてこともに戻る童歌
 子供れの父が見上げる観覧車
 孫の手の温もりがある子供の日
 反抗期の子供へ軋み出すレール
 貯えはないがあしたを信じてる
 明日の風信じ切つてる楽天家
 裏口は覗かぬ主義で楽天家
 トグロ巻く蛇をアップにするテレビ
 これからは僕的时间だねじを巻く
 熟年の年相応に捻子を巻く
 旗を巻く潮時があり待っている
 春愁の遙か昔を巻き戻す

志洋 かつみ 夏秋 ケイ子 絢子 キミ子 悦子 昇 眉水 志津江 胡村 吐来 敏 敏之 伊三郎 作二郎 芳子 萬的 薫 園歩 歌子 正子 紫香 武庫坊 定人 正一

巻き舌がとつても似合うサングラス
 下積みの天職老いを忘れさせ
 城門に弾痕一つ夢の跡
 売り切れた荷の軽さから夕焼ける
 駅前ですごい易者におどかさされ
 尾を振らぬ犬が一ぴき野良でいる
 妻の忌にえんど豆をむく独り
 日向ほこ昔ばなしが落ちて
 割箸を裂いて寛ろぐ弁当箱

城北川柳会 吐田 公一報

隅からの意見がゆつくり射る
 辞表書く夫の背が丸くなる
 花作り好きだった母やさし笑み
 さり気なく見比べてみるアクセサリー
 まだ燃える火種を抱いてフルムーン
 だまされておこう夫の下手な嘘
 ライバルに会うのに夫白髪染め
 期待かける花へ肥料をやりすぎる
 孫の字が元気に挑ねて踊ってる
 着地したあととはゆつくりした演技
 ゆつくりとやがて一氣に花の雲
 盗んでも盗みきれないおどりの手
 満塁ホーム打つても負ける時は負け
 千年の山の辺の道梅匂う
 ゆつくりと出来ぬ実家は兄の代
 春待つて根強く生きたれんげ草
 てっぺんで踊るから足踏み外す
 寝転んでみても立っても四畳半

杜的 文夫 敬 三笑子 保藏 年代 英子 静夢 六浦 静歩 寿美礼 佐津乃 白峰 静子 昭子 典子 秀夫 史風 ただし 春蘭 新一郎 登美子 倫子 久留美 満津子 文子

花冷えに足早に行く朝詣り

一生を賭けた女の軒聞く

ゆつくりと座り直したセールスマン

啓蟄と関係なしに腹の虫

ゆつくりと話せば通じる老いの耳

柳吉のような夫と法善寺

尾浜川柳会

前田いわお報

ネクタイのゆがみ気付かぬ朝の客

毎朝にネクタイ替える若社長

ネクタイを締めて表の顔になる

西陣のネクタイを買う京土産

純白のネクタイ締める日が近い

嬉しい言葉鑄型に入れて置いておく

賽銭をスローで投げてよく拝み

口癖の小言は姑の子守唄

聞き飽きた小言は棚に上げて置く

顔中を口にして泣く赤ん坊

下心ある好意とはつゆ知らず

押し売りの好意に迷う若い寡婦

苦勞人ひとの好意も四捨五入

ターリンの好意見て見ぬ振りをする

ご好意に甘えて肩を休ませる

好意持つ女が小指からませる

子離れはしたつもりでも長い夜

手から手へ春がころがる紙風船

裳裾からおみ足わずか伎芸天

八重子

公一

温子

達子

右近

小夜子

いわお

義嗣

澄子

向西

弘治

六浦

修水

十四郎

二南

保蔵

すみ

敏之

昌子

歌子

夢之助

紫香

良江

なめられてなるかとキヤリア六十年

まじないも入れてなめとく孫の傷

なめるなと叱って見たが俺も齢

辛酸をなめて仏の顔になる

巢立つ子へ海の深さは教えない

節くれたその手を信じ用立てる

名は左膳抜く手も見せず悪を斬る

白魚のような手の酌早く酔う

手入れた庭の花々咲き誇り

神仏もあの手この手のPR

金縛り手も足も出ず立往生

毎日が手さぐりだからおもしろい

むすんで開いて悩みいろいろ手に余る

当選御礼白手袋は直ぐ捨てる

学歴が決め手となった高い椅子

手作りの味噌手土産に母の来る

一円で難民に手を差しのべる

皿なめて猫はおいしい顔をする

合掌の手の中欲の渦がまく

月掛けがだんだんふえる手内職

千手観音役に立つ手は二三本

生き延びてまだ試される山がある

裏ごころ男の眉に覗いてる

胸底に焼き付く影が喋り出す

胸借りた道へ休まず打つ響き

悔って登った山に裁かれる

宣司

絹子

登志実

正坊

楓楽

光子

英一

照子

みよ子

綾子

すすむ

さと美

みつ子

千歩

しげお

真

正雄

東雲

凡子

恭昌

いつを

鬼遊

信秋

登志代

光代

アサ

山越えてまだ目標が見つからぬ

山程の愛を初孫ひとりじめ

岩山へ男ひとりをあほにする

臆病で無事に帰った山男

山彦に逢いたくなくて登山帽

裏口にちよっぴりこぼれていた鞆

裏街に叙情詩人の四季がある

裏芸に長けて左遷を免れる

裏作の野菜主流を占めている

自分史は脳裏に刻み込んである

裏口を覗いて挫折する弱者

めざし焼く小さな幸の中において

飛躍する男は過去を焼き棄てる

手を焼いた子が一番の親しい

焼きもちの刺激はホケの滑り止め

ハワイまで焼きに行つたと自慢の娘

老夫婦朝のリズムのパンを焼く

焼け石に水だが母の眼がぬくい

焼いたのは手紙燻るのは気持

休んできた海に悟りがおいてある

働くな休め遊べと何にも無い

眼を入れてやつとタルマもひと休み

人生を休むとみんなに笑われる

休戦へ眩しい平和かみしめる

人間を休むのれんの燭がある

人生のところどころにある峠

武治

紀久子

度

正博

稚代

柳宏子

高夫

鉄治

順子

保州

栄美子

綾子

精子

英子

忠

信子

紀美女

寿子

克子

輝子

英男

淳太郎

与呂志

公子

豊太

あすなろ

翠洋会

井上照子報

ひろ子

蛙

良江

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

信秋

登志代

光代

アサ

彌和子

大原川柳社

小林妻子報

鯉職り泳いでいるが嫁もいる

人生のところどころにある峠

あすなろ

正子

孫の絵に夢想の未來たくましい

菜の花の幸せ蝶も首つたけ

人の輪へ世間話の花が咲く

大草の畑鶯が笑うてる

花暦褪せ初夏の風が舞う

岐路に立ち下足を投げて賭けてみる

神仏の試練と思う風おもう

花冷えに太陽待つてなぞくれぬ

粗品とは似ても似つかぬ荷を背負い

熱さめて漸く人間取り戻す

人形と向き合い今日のひとり酒

想像が過ぎて渦中の人になる

染めてると言われない恋の邪魔になる

お粗末な城で賑わう平和な灯

街の灯に染まりそこねてUターン

茄子の枝一つ実らぬ子と思う

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

村八分差別の壁は破れない

差別した訳ではないに瘦せもいる

セレナーテ差別はないというけれど

村八分選挙権は持っている

均等法足踏みつつきお茶を汲む

少女の胸ふくらんでやがて恋

腹芸も上手になった厚い胸

飛び込めば包んでくれた亡母の胸

はじらいは胸かくす事からおぼえ

何も彼も収める胸がうすくなる

居酒屋で胸にささった小骨抜く

胸襟を開く一升揚げてくる

胸の内明かして美味い空気吸う

再職の名刺ブライド捨てて出る

ポケットの名刺男の意地をもつ

取りかわす名刺男の血が匂う

子の名刺母は大切に持っている

ライバルの名刺が鞭になっている

運不運もしもと思う時間帯

もしものことは神にまかせているカルテ

もしもからきれいな夢を組み立てる

初心者マークもしもの事故は考えぬ

カラス鳴くもしもと思う胸さわぎ

先の先読んだつもりで会うピンチ

ピンチだと絶る話に嘘三分

取りかじも早目にピンチのりこえる

ピンチから救ってくれたのは女

連続のピンチで強くなった母

気の強い女にピンチ助けられ

カッターのルージユが醸す大ピンチ

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

えんどうが咲いてる土の匂いする

しあわせの予感に震う鹿沼土

故郷の土確かめてる素足

祭りばやし土の香りも乗せてくる

さわらびは優しい土にはぐくまれ

盛り土の古墳偉人の顔浮かぶ

美しい嘘をドラマに辻易者

易の灯に再出発をすすめられ

妻 子

かおる

義 良

房 子

雄 々

ちかし

きみ子

与根一

文 子

静 恵

多賀子

桂 子

芳 枝

太 泡

長 三

鶴 丸

登志子

町 紅

煩悩児

柳 伸

作二郎

柳 章

弘 直

勝 美

喜 風

悦 郎

重 人

易の灯に心の裏を見すかさされ

易の灯も修学旅行の京土産

天眼鏡とことん弱味つかまえる

占いのはしこして居る青い恋

ノータイの暮らしにもなれ眼鏡ふく

百本のネクタイ百の走馬灯

ネクタイが男の唄をうたう酒

ネクタイを指ではじていてねだるくせ

ブランド料やけに重たくぶら下がる

ネクタイを外すと旨い酒になる

淋しくて指切りばかり繰り返す

指切りはしたけど多分嘘だろう

絡ませた指に冷たく光る石

石橋の上で指切りしておこう

指切りで胸の痛みを知りました

叱られて母は私の味方する

負けた兵士も勝った兵士も母を抱く

いじわるばあさんなんだから母元氣

うれい事はいの一番に母に告げ

長男がもう母さんを虚仮にして

富 柳 会

池

森子報

村一番悪戯な子が教育者

その厭味もう通じまへん惚けてます

信楽へ行かずに今日を生かさされて

子の邪魔にならぬ命を祈ります

角とれた厭味に首を締められる

賛否両論しびれを切らす酒の燭

神様にだんだん近くなる祈り

しげる

雅 士

柳宏子

頂留子

一 風

翠 公

欣 之

律 子

宏 子

隆

甘 平

朝 子

覚然坊

度

正 子

かつみ

美 幸

恒 明

春 子

シマ子

昭 水

柳 太

トシエ

花 子

莊 次

文 次

花 梢

その意見素直にうけている夜霧
意見言い煙たがられてる男
湾岸の掃除に祈る無事掃還

維久子
(伊) 勇
勇

厭味ない人だがどこか物足りぬ
意見したつもりが逆にしてやられ
厭味など言ってこたえる奴じやない
讚美歌へ厭味を言うたことがない
母の乳房は祈りのかたちして眠る

智久
生子
美房
岳人
森子

南海川柳會

飯田

悦郎報

はげ山へ蘇生をめさす植樹祭
よみがえれと人工呼吸汗をかき
君の名はテレビドラマで甦る
威儀を正して蝶々待つてるねぎ坊主
黒揚羽告別式の昼さがり

勝美
文秋
度雲
東
泰

五月晴 蝶も毛虫も風に乗る
彩りを添えんと蝶々永居する
花冷えに白い蝶々弱く舞う
蝶よ花よそんな時かておましたな
花と蝶 男と女の戦です
遭難の救援隊が戻らない

柳伸
二南
千鶴子
凡九郎
ダン吉
甘平
信博

巻き添えの非行の罪を知る重さ
巻き添えに五時間遅れと言う帰省
巻き添えがなにさ友情深くなる
組抗争巻き添え避けてサツを呼び
ポイントと少しずらして謎をかけ
ポイントはしつかり餌を撒いてます
ポイントはしつかり攻める母の知恵
ポイントをずらすと先が見えて来る

恒明
覚然坊
花仔
重人
真砂
三男

着々とポイント稼いでいたフアイト
物語たずねて川をさかのぼる
物語伏せて余韻に浸る夜
不意に近く友物語る通夜の席
物語解けば歴史が語りかけ
物語母は上手にねかきつけ

柳宏子
悦郎
庸佑
志華子
喜風
しんじ

打吹川柳會

奥谷

弘朗報

花束を受けてグルマの目がひらく
強引な花強引なプロポーズ
花束をご縁に妥協する心算
定退の花束鬼の眼に涙
花束の影で涙を拭いても泣いた
もらうなら花束よりも諭吉さん
花束の花伴せを希いたい
演奏会さっきの花束またもらい
恋の勝利者花束を鷲掴み
パンザイの花束うそでない様に
定年の花束妻におすわけ
幸せを花束にして明日生きる
花嫁の父花よりも酒が良い
無位無冠の夫に心の花束を
花束を受けた知事さん男前
花束の脇役果たすかすみ草
花束を別れるときも贈ろうか
花束贈呈さつきい姑と聞いている
花束と香典袋焼くけむり
みじかに夢の花束をありがと
野の花を束ねて母ちゃんありがと

喜与志
温子
白つみ
たつみ
妻子女
善政
明治
節枝
紫映
野草
野恵
ひさ子
勝見
節子
信子
玲子
雄々
早苗
石花菜
幸子

花束に勿忘草をそえておく
他人から花束貰ったことがない

とみお
弘朗

手を打てば金銀緋鯉の渦の中
友好の廬山あらわすおかめ笹
吟行を緑の風が撫でてゆく
友情の森 友情のにぎりめし
怒鳴り声聞かぬ振りする妻でこそ
下宿から電話うれし孫の声
何時までもあの一声がつきささり
緊張の空気がくれる産声に
声上げて泣く人時にまぶしかり
一声でみんな集めるわらび餅
春夏秋冬むらさきの花が好き

友碇
稚子報
美緒
智恵子
美子
泰子
三四子
千代女
稚子
ます子
キミ
今日子
薫風

川柳後楽吟社

従野

健一報

ベテン師の飼うたお世辞のいいオウム
カーテンを引くと涙が落ちるから
覚え書きの暦は余生を叩くむち
山肌を晒して無情のショベルカー
胃袋はいっぱい心は空っぽです
のんべえはつけのきく店ひとつ持ち
自己主張すると積木がくずれだす
ぼけをする演技も覚えて人情味
もの識りの耳学問に花が咲く
生きていけるうちが花と誘い合い
焼酎を愛し人生たそがれる
使い捨て時代使える物も捨て

草風
美智子
たけ志
青銅
桃風
柳五郎
進
博友
金吾
玉水
哲郎
吟平

水茎の跡履わしい文を受け
人形の自問自答はまだ続き

つつがなく柳友みんな白髪増え
まん中に立つて疑いなど持たぬ
偏頭痛仕事終えたらすぐ治り

ひと花を咲かせたこともある継ぎ木
蝶よ花よ一人息子に嫁が来る
光らない螢となつて父も老い

南大阪川柳会

金井 文秋報

佐加恵 正秀 桂風 拓治 保男 健一 文平 秋月

悪いのはみんなパパだとママにつき
噛みついた方が悪いと言いきれず

悪いこと悪いと知らぬ子が哀れ
悪い話やないと誘惑ささやかれ

たそがれると悪い奴の顔すぐ揃う
嵐のあとと蟻栗親をいましめる
点滴のリズム栗親許されず

コンテスト栗親できぬ美女揃い
栗親へ時には雷を落とす
嫁きおくれ栗親してた訳でない

新人を甘く見すぎた達磨の目
拙いけど僕のカラーは出てました
姉さんの拙い文字にある意味

拙い字を取ることなどない写経
答案の改竄拙くなった椅子
もめているとこへひよっこり行き合せ

少年の拙いべんに夢がある
焼き増して肌身離さぬ愛だらう

柳宏子 奏月 勝美 頂留子 悟郎 凡九郎 作二郎 寿美 新造 久子 あいき 章 恒明 度 楓 柴 憲太郎 智子 シメ子 柳伸

焼けボックイ傷ついたのは女だけ
出合いから目に焼きついて離れない
人を焼く煙を鴉しっている

わらびにも野焼きが肥となる太さ
世話焼いたほどには相手恩に着ず
螳螂の斧だが泣き寝入りは出来ぬ

反抗期過ぎて大人になりました
はれ物に触る思いの反抗期
反抗をこんな形で妻の旅

おねだりか素直な態度気味悪い
緑遠い娘に鮮やかな福ボクロ
連休は昔の顔に会いにゆく

連休にすまなさそうに雨が降る
連休に親子似てると笑う嫁
笑い癖出ぬかと気づかう通夜の酒

連休へせつせと車磨いてる
首筋の白いうなじに艶ボクロ
可愛い娘呼ぶと舌出す癖がある

連休に方言を聞く汽車の旅
連休があつて幸せふしあわせ
孫を連れとにかく連休の人ごみに

目印のホクロ涙のご対面
ちよいといいい女で甘え癖がある

堺川柳会(5月旬会) 河内 月子報

米穀通帳身分を明かす武器だった

萬的 文江 慶三 清水 公一 文秋 シマ子 覚然坊 雀踊子 トミ子 直子 弘治 ミサ子 キク子 夢之助 勇次郎 紫香 悦代 向西 六浦 寿子 芳子 修水 歌子 春蘭

せつかなガラスに水だけ残る
ひとときの月下美人を待つ長さ
短い強い言葉の意志がある

短い父の言葉にある温み
部屋回り終ってナースの時間来る
単身赴任お米を計ることおぼえ

初めから米は白いと思う子等
年寄りの家を覗いて来た安堵
減反で八十八夜忘れられ

しばらくは年を忘れて股覗き
短めの言葉に満ちた愛の鞭
子離れをして一合の米を研ぐ

人間の勝手長い日短い日
米びつを覗くとフアイト湧いてくる
米輸入休耕田の風さわぐ

米びつの底が知ってる母の修羅
米買えと腕すくでいう星条旗
米洗う母が知ってる娘の噂

米櫃を満たして母の心足る
銀しやりと呼んだあの日は光つてた
勿体ない雀が米を拾つてる

夢だから舞台裏まで覗かない
神様はいいな賽銭箱覗く
名をあげて太く短く生きる人

聴障川柳 稲田 豊作報

日暮れ時遊び呆けた孫探す
オバタリアン山のいで湯でお喋り会
遊ぶこと下手な男と住んでいる

千万里 小雪 金三郎 ひで 武助 真柳 春香 博光 信博 半銭 天笑 月州 満州 寿恵子 頂留子 与呂志 妻子 柳影 よしみ 泰子 一三三 紀美女 豊作 文古 三香

おばあちゃん遊んだげると孫が言う
陽もつらら遊びついでヨモギつみ
遊ぶにも駐車ばかりの団地の子
遊戯の輪孫はどこかとお皿の眼
お年寄りよく食よく寝よく遊べ
悠々と「実相」の国に吾れ遊ぶ
対岸の桜に遊ぶ月夜船
多忙と時に遊べ身の保養
孫連れてひらりひらりと花見かな
幼な子のままごと遊びママそっくり

曉障川柳前月分

井上 富子報

禿頭 櫛は無用の物となり
櫛の色選ばせている髪の色
一度位染めてみてはと櫛が言う
もつ一度逢瀬へ櫛をそつと入れ
櫛の折れ目は女の修羅を知っている
年代について流行った櫛の数
櫛の目をきちんと入れた銀行マン
洋髪で櫛もブラシに座をゆずり
櫛入れて器量十割できてきた

川柳たけはら

森井 菁居報

バレーのサーブ何回やってもむずかしい
木は豊か緑のベール光らせて
春風はやさし口紅変えてみる
短冊が上手に書ける本を買つ
余り布つまく活かしてのセスス
待ったなし今走らぬば呆けてくる

柳香 美乃留 静子 みつる 真女 珍妙人 八恵子 行江 健太郎 末子 静子 健太郎 末子 真女 末子 三香 八恵子 富子 富子 行江

六時迄寝てはおれない陽が昇る
一浪が見事に咲かす桜花
春耕の田圃に上衣ぬぎ忘れ
傾いてほんとの夫婦腕を組み
イヤリング一つ落としてきた誤算
八十老も頑張る趣味を持っている
母の歳亡母のしぐさに似てしまつ
道問えば一緒にと言つ旅嬉し
言うな言つなが伝わりみんな知つてた
休日は時計の針も気にならず
亡父に似た背とパチンコ屋で出会つ
ほんとかなあおいしいかなあ水を買つ
中流になつて忘れたい労働歌
少しゆるめにたずなを締めている妻で
心ころころ私の中の鬼という
欲ばりで次はバーフェクトをねらつ
戦争で消えたベルシヤの海の青
泣いてないて哭いて空虚なる
序列にはそれなりの訳リンゴむく
いさかひの無いのも淋し老いの日々
この程度だつたか僕の評価額
母の背にいつでも見える風車
ためらいもなく宿命の段昇る
おにぎりの中にチーズがある不思議

川柳大阪

高須賀金太報

看護婦に若いと言われ葉さく
無礼講でも席順は決めてある
三拍子揃つた孫のリズム感

清水 喜美子 喜久恵 静佳 ヤスエ 麻代 博子 浪子 節夫 白狐 一路 菁居 笑子 淑子 静風 新造 房子 仲子 貞子 笹舟 邦男 こうじ 幹風

住む家を三つに割れと言つ遺産
ばね利かぬ足で小川を飛びそこね
自分でも気には掛けてる天邪鬼
雲が飛びひたすら洗つものがある
軽くとも一円だつて生きている
医者代がタダで喜んではおれぬ
マタ見てる時計は後へ動かへん
遅れた子優しい心持っている
今はもう見せ物だけの水ぐるま
つむじ風風から出られぬゴミがある
ゆつくりとしつかり回る夫婦独楽
回転はにぶいがまじりぬ水車です
庭の木の巣箱に青い鳥よ来い
この辺も休む木がない渡り鳥
がみがみと言つのも妻のやさしさだ

亮太 柳弘 司

川柳塔鹿野みか月(5月) 土橋 螢報

ちちははの愛に育つた苗を植え
あたたかい風が好きです苗育つ
一本の苗 千両の花咲かす
いい苗にとときどき躰などして
新しい苗字で旅の葉書くる
一本の苗に人生かけてみる
稲の苗やつと出てきて秋の夢
子孫のために緑の苗を植えにゆく
椿苗見事な花をつけて売る
苗植えたときより老母の汗が見え
血統も確かから仕込まれる
ハイテクの大きな夢を背負う苗

比呂志 美津留 雅果 希久志 洛醉 重人 凡九郎 一步 三吉 川童 我勝 鉄心 けお 笑風 金太 螢報

鯉苗を休耕田に放し飼う

早耳な風に内緒を盗まれる

あねよりも口紅おぼえたはおとと

風見鶏時がはやくて定まらぬ

ランドセルこどもの夢は果しない

目の前のえさにありつく手の早さ

大切なわたしの種をまきましよう

地獄から逃げて仏のふところへ

のびのびと五体安らぐ故郷の空

苗床に祈りの言葉敷きつめる

高い土手飛びそこなつて目が覚めた

大空へ落書したい葱坊主

燃えて生き今日のひと日を大切に

回転のはやい仲間の輪の外に

子や孫と遊び疲れた子供の日

地藏盆こどもが走る下駄の音

手塩にかけたこの子もやがて手を抜ける

淋しくて実のなる苗を植えている

川柳泉尾

吉川

寿美報

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

はるお

房子

風人

覚

幸代

幸江

隆風

喜与志

八重子

しげる

久枝

三千代

静江

和子

かつ乃

睦子

くに子

みさ子

オープンに出来ぬ二人のやぶれ傘

窓いっぱい開けると大きな絵がみえる

オープンに賭ける男の青写真

遊学にしっかりと保険掛けておく

母と子と遊ぶブランコ春の風

合格だ さあ四年間遊べるぞ

輪の中でうまく遊べぬ紙人形

風紋をなぞり心遊ばせる

曲り角きつちり曲がる春の風

今が春そんな気持ちで過ぎたい

足ばやの春追いかけて追いかけて

セピア色になった春だを抱いている

さくら散る春はいのちを考える

油断する心に春の風邪を引き

春休み子の成長の一里塚

春は曙 画はユトリロの街になる

軽やかに擦れ違ふ人春の彩

春いっぱい詰めて駆け出すランドセル

あさこ

美代子

シメ子

美南子

シマ子

昭子

洋子

千歩

弘子

はつ子

(特)文子

マリ子

葉遊

可愛

悦子

トミ子

一枝

買う買わぬ行く行かないも妻が決め(田)英子

父の日は洒落た帽子と決めておく(外)英子

好き嫌い言わずに何でも食べる孫(外)英子

回り道ばかり続けてロマン主義(外)英子

ふと戦後 年金貰って不平など(外)英子

乗り換えて座れたけれど帽子ない(外)英子

日輪と春風をのむ鯉のはり(外)英子

温習会 後見人の光る汗(外)英子

母の日の母は満足して眠る(外)英子

二枚目が隠し通した私生活(外)英子

酸性雨 地球の傷が深くなる(外)英子

辻褄を合わすテープが短すぎ(外)英子

水府忌

番傘川柳本社句会

とき 8月6日(火)午後6時

ところ 大阪市立労働会館301号室

(J.R・地下鉄「森ノ宮」下車すぐ)

お話 「水府を語る」 田中 好啓氏

宿題 (各題2句・席題1題)

「いのち」 杉森 節子選

「ビール」 山本 翠公選

「素顔」 森中恵美子選

「ふたり」 高杉 鬼遊選

「贈る」 磯野いさむ選

会費 500円

空家にも季節は回りこぶし咲く
権兵衛はカラスを先に歩かせた
時々猫にきかせておく愛語
春の雪含めばどつと飢えてくる
真夜中に見方が変わる人生観
ひとりでは咲けない花のひとり言
日経新聞片手にせかせかハイヒール
敵味方多いオープンな人柄
オープンな夫婦だ茶碗とんでくる

恵美 靖子 寿美 美子 和子 伴子 淑子 美津子

再会の話がはずむ五月
五月雨や人を恋うれば細く降る
五分五分へ生まれついで弱運
時々甘夏買うて見舞いする
前掛でリング磨いている八百屋
お見舞いに行つて貰つてくるメロン
共稼ぎカルチャー志向も妻が決め
とっさの時の逃げ口上は決めている
金を出す話になると決まらない

きく子 武庫坊 薫 一笛 明女 明光 明吉 富子 しげお

柳界展望

編集部

★西宮北口川柳会の「きたぐち」二百号記念句会は、

5月13日、出席者一二九名
投句者三名により市立中央公民館で開かれた。秀句賞は次のとおり。

ハーマニカ 牧場に楡の影長し 奥田みつ子
母の肩たたいた数を忘れ
ない 森中恵美子
深々と彩が重なり合つ友
よ 池 森子
メナードもボーラも知らぬ
爽やかさ 水上比沙湖
ふんきりがつけば女が潔
い 門谷たす子
お幸せですか軽音楽のよ
うに 山本 礫
人間を疑つこと不幸せ
吉村 雅文

なお、投句は別個に選句
芦田静江・林荒介・西秋忠
兵衛・岩田信義の各氏が秀
句賞に輝いた。

★風見発刊記念川柳大会が

5月26日、松江市のなにわ
別館で一五九人が出席して
開かれ、本社同人の次の各
氏が秀句に入選した。

今という時間と語るお寺
さん 林 荒介
本当の男を知っている影
だ 土橋 螢

泥つきの言葉がふる里か
ら届く 新 正子
仏壇の前の畳がうすくな
る 野坂 なみ

一畳のたたみがあれば夢
を見る 高杉 鬼遊
つくないの壺を満たして
から死のう 八木 千代

★大阪市交通局互助組合文
化部・川柳部は、このほど
創立五〇周年記念川柳大会
特別号として『川柳大阪』

5判・36頁の冊子だが、大
会の入選句とともに公募し
た。私が詠んだ大阪の句、
六七六句(三三八名)を特
集している。

★翠洋会は句報一〇〇号を
記念して6月1日、川柳合
同句集Ⅱ「すいよつ」を発
刊した。B6判・156頁
で、36人の会員が各20句、
720句を掲載、五〇号記
念句集よりも一段と充実し
たものとなっている。

★第14回阪神文芸祭は7月
7日午後1時から宝塚市立
文化施設ベガ・ホールで開
かれ、川柳はじめ入選歌句
の発表と選評が行われ、半

どんの会代表の小林武雄氏
が「今、郷土文化は」と題
して講演する。

★鶴彬祭紙上川柳大会(川
柳紅樹社主催) 雑誌2句
未発表作品 選者は斎藤

大雄ほか11氏。投句料10
00円(発表誌呈)。用紙

自由。締切7月30日。投
句先〒020 盛岡市開
運橋通3-43-202
佐藤美枝子方・川柳大会係

▽同人消息△

■芳地狸村氏(岸和田市・
同人) 5月10日、腸閉塞の
ため、和泉市立病院に入院
・手術、経過良好です。

▽芳志△
■西宮北口川柳会から「き
たぐち」二百号記念として
金一封拝受しました。

■千原理瑛・松本元江さん
(岡山市) から句碑建立・
句集刊行記念として金一封
拝受しました。

▼訂正▲

■5月号 P85中段8行目
「静水」↓「静江」
■6月号 P56上段21行目
「北川波留吉」↓「北岡」

・P69下段26行目の亀井円
女さんの句は「見ぬ振りも
たまにはしよつそれも愛」
の誤りでした。

川柳 東大阪	27日(土)午後6時から 一気・大変・名人・坂	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5-6-23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
はびきの 市川柳	28日(日)午後1時から 器用・甘い・パンチ・(半分)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★特に記載がない場合 句会費 500円、投句料 310円(62円切手5枚)、各題3句以内
原稿送り先 (締切・毎月20日 予め決定している場合は何か月分でも結構です)
〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

7 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 および 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	5日(金)午後1時から 芝・急所・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 62円切手3枚
川 柳 塔 まつえ	6日(土)午後1時半から 手帳・泡・夏	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
堺川柳会	7日(日)午後1時から 抱く・脆い・辛抱・自由吟	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
八尾市民 川柳会	10日(水)午後6時から 星・スタッフ・初心・勢い	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 わかやま	14日(日)午後1時から 用心・横・喜ぶ・子感	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14 野村太茂津
西宮北口 川柳会	15日(月)午後1時から 足・細い・洗う・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ 句会費 300円 投句料 62円切手4枚
もくせい 川柳会	15日(月)午後1時から 七・序列・鳴く・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	18日(木) 正午から 都合・鳥・閉じる・自由吟	高槻市民会館306号室 阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児 句会費 500円 投句料 62円切手3枚 各題2句
富 柳 会	18日(木)午後1時から 笑顔・艶聞・煙突	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
南 海 川柳会	19日(金)午後6時から 停止・主義・夕立・火花	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
南 大 阪 川柳会	19日(金)午後6時から 受ける・句切り・拗ねる・つらい	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
川 柳 ねやがわ	21日(日) 正午から 破る・流れ・裸・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
京 都 塔 の 会	25日(木)午後1時から 糠・降る・人魚	京都府南労働センター 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的 句会費 350円 投句料 62円切手3枚
岸 和 田 川柳会	25日(木)午後6時から 謝る・異動・うつつ・得	岸和田市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東徒歩5分 〒596 岸和田市上町7-36 植山武助

編集後記

★本誌に連載している「川柳の群像」は、柳界でも注目されている読み物の一つだが、バックナンバーを繰ってリストをつくってみたところ、七月号でなんと一〇六回になる。第一回は、一九八二（昭和五十七）年九月号の井上剣花坊であり麻生路郎など六大家をはじめ名だたる川柳人が網羅されている。

★対象はすべて故人で、執筆者である東野大八さんによると、その基準は「大なり小なり柳界に貢献された方」となっている。掲載には別に順序はないが、ほぼ五〇回くらいまでは、いわゆる「歴史的」な人物が多く、ここ数年來は私にとつても身近な「同時代」人がまじるようになり、今月号

には友人の白岩文衛君が登場するにいたった。

★その白岩君も生前、會員の一人であった老朋友の会（最終学校のクラス会）一行が去る五月、年一回の総会を兼ねたツアーで鎌倉へ行った。大仏一建長寺一八幡宮など、おきまりのコースをパスで回り、宿舎では夜おそくまで歓談した。リタイア組ばかりなので、連休直後のウィークデーの閑散をねらったつもりだったが、おりからの「太平記」ブームもあって、どこも修学旅行生の波であったのは思わぬ誤算だった。

★ここ数年か月間、同人・誌友の増加がづつづついている。編集にたずさわる者としては、やはり一人でも多くの人に読んでいただきたいというのが願いだ。暑中見舞いへのご協力にも厚くお礼申し上げたい。（正）

★七月は路郎忌。路郎先生のように、ご夫婦で川柳を詠んでおられる同人は、昨年未現在で八組。きつと日常の会話にも川柳を話題にされて楽しいことと思う。

それとも却って、ライバルとして厳しいのだろうか。いずれにしても、共通の趣味を持つのはたいへん結構なことである。

★一九八八年—一九九〇年の三年間の同人句、約四万句余りの中から夫婦の機微を詠んだ句を探し出すのはなかなか時間も手間もかかる作業である。しかし、それにもまして、いろいろな夫婦の姿が浮き彫りにされるのは楽しい。

い、時には貶し、許し合つて、それぞれの彩を織りなしている。

★表面は夫の権威を保ちつつ、内心は奥さんを大切にしている。微笑ましく夫の追慕の情に、胸が熱くなる。月並みではあるが、路郎先生ご夫妻のようにならぬ線を守り、また静

も七〜八度ぐらいに冷やし

ておくのが、うまい飲み方とか。

◇熱帯夜、寝ぐるしいからといって、クーラーや扇風機をつけたまま休むのは体に悪い。寝びえや夏かせのシーツとふとんの間に花ゴザを敷く、氷枕をすなど、ちよつとした風流な工夫でもなさっては。

◇昼は光化学スモッグ。これは風が弱くて気温が高く日射が強い日に発生しやすい。その症状は、目がチカチカする、目が痛むなどの刺激症状にはじまって、どの痛み、いがらっぽい感じ、息ぐるしいなど。また頭痛やほき気などの症状もあるらしいが、洗顔やうがいではほとんど回復すると書いてあった。光化学スモッグ報が出たら、ちよつとそんなことを思い出して、川柳さんに嫌われませんように。（し）

作品募集

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
 水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
 銀河系 (3句) 河内 天笑 選
 茴香の花 (3句) 小出 智子 選
 吟「白」 本田 恵二朗 選
 課題 (3句) 「吹く」 内田 結実 選
 「動く」 野村 京子 選
 初歩教室「宅配」(3句) 辻 白溪子 担当

9月号発表 (7月15日締切)

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

10月号課題吟 「時代」「赤い」「貯める」

お願い

日本川柳協会の『日本川柳秀句集・日本川柳推薦句集』応募締切が迫りました。西尾栞主幹も選者をつとめておりますので、同人・誌友は本号表紙裏の案内を参照の上、こぞってご応募ください。

川柳塔社

〒545

発行所

川柳塔社

大阪市阿倍野区三好町二丁目一〇番一六
 ウエムラ第2ビル202号室

編集兼 西尾 栞
 印刷所 藤原 童心 社

定価 六百元 (送料56円)
 半年分 三千八百円 (送料共)
 平成三年 六月二十五日印刷
 平成三年 七月一日発行

電話 (0)6元16九一四番
 振替口座大阪81三三三六番

路郎忌 本社7月句会

日時 7月8日(月) 午後5時半
 会場 メンズファッションセンター13階
 中央区内本町1-1 電06・941・1918
 地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点西南角
 おはなし
 兼題 「舞う」 橘 高 薫 風 選
 「人妻」 福本 英子 選
 「風」 川島 諷云児 選
 「迎える」 梶 田 中正坊 選
 「文楽」 西尾 勇次郎 選
 投句 1題 当日発表 各題2句以内
 会費 500円
 柳箋(4cm×19cm) 1葉に1句を書き、
 投句料310円(62円切手5枚)同封のこと

本社8月句会 7日(水)

兼題 「玉」「文字」「波乱」
 「研ぐ」「ひらたい」

NHK川柳作品募集

課題 「ゆっくり」 森中恵美子 選

ハガキに3句 7月10日締切

投句先 大阪市中央区馬場町3-43

NHK大阪放送局

「ラジオセンター」川柳係

発表 7月21日(日)ラジオ第1放送

午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題 「昔」 橘高 薫風 選

ハガキに3句 7月15日締切

投句先

〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20

大手前ウサミビル3階

西日本文字放送 川柳係

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成三年六月二十五日 印刷
平成三年七月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通巻七七〇号

川柳塔

七月号

定価 六百元(送料 五十六円)



泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマン

オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7
(06) 941-8018

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

TJ 豊津住宅株式会社

代表者 大 矢 喜 一

豊津店

〒564 吹田市泉町5丁目11-14
TEL (06) 330-0006(代)
FAX (06) 388-6102

関大正門前店

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21
TEL (06) 388-6166(代)
FAX (06) 388-6886